

# あ き た の 文 藝 第 48 集



## 掲載方法一新!!

す  
く  
な  
り  
ま  
し  
た  
。

部  
門  
別  
掲  
載  
で  
見  
や

工  
ツ  
セ  
イ

詩  
・  
短  
歌  
・  
俳  
句  
・

5  
作  
品  
掲  
載

グ  
リ  
ー  
ン  
賞

エ  
ツ  
セ  
イ  
8  
編

川  
柳  
56  
句

俳  
句  
112  
句

短  
歌  
77  
首

詩  
7  
編

小  
説  
・  
評  
論  
4  
編

入  
賞  
54  
作  
品

応  
募  
總  
數  
260  
作  
品



「あ  
き  
た  
の  
文  
芸  
」

第  
四  
十  
八  
集



# あしたの文芸 第48集 目次

## ●小説・評論

入選 奨励賞  
入選 奖励賞  
入選 奨励賞

ナメクジと七色の羽の鳥  
ふるさとの肖像  
MOKA

佐和島ゆら  
藤田みち

5

## ●詩

入選 奖励賞  
入選 奖励賞  
グリーン賞

赤さく殯もがり  
菅原聖美  
矢代レイ  
卵ら

宮野栄子  
宮野栄子

武佐小十  
藤藤林康子  
幸清康子  
雄助子

55

## ●短歌

入選 奖励賞  
入選 奖励賞  
入選 奖励賞

朝職人  
夕人の川  
抄日々  
柴西小佐々木  
田山田夕  
京和ヨリ子  
香代敏子

小眞野  
西ミチ  
誠太郎チ

渡大塚三佐  
部山本浦藤  
栄文佐善榮  
子穂市隆悦

63

グリーン賞

俳句

天 盂 石  
蘭 山

村 会 抄

佐 寺 加 佐 柴 蘭  
々 木 田 藤 藤 田 盆  
寺 ト 美 和  
佳 悅 シ 子 代 蕈

神 鈴 宇 佐 佐  
成 木 佐 見 々  
石 栄 レイ 子 成

鎌 池 麻 高 宮 三 塚  
田 田 生 橋 本 浦 本  
光 郷 白 静 佐  
江 太 風 遙 峰 佳 市

入 奨 励 賞 入 奖 励 賞 入 奖 励 賞 入 奖 励 賞

グリーン賞

川 柳

入 奖 励 賞 最 優 秀 賞

忘 青 花  
谷 高 却 の 降 の 街  
口 島 の い る  
心 中 ト  
平 ゆみ子 空 街  
子

藤 近  
本 藤  
あき子 桃 春

加 佐 石 藤  
藤 藤 井  
円 ち す る ト  
心 し す る モ 子 子

## ●エッセイ

最優秀賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選  
グリーン賞

緑色の時  
左に曲がって  
父の外套  
マリア観音  
森山比蘿  
加藤トシ子

佐々木容子  
渡辺芽衣  
佐々木真知子  
坂本愛子  
石山敦子

佐々木真知子  
豊島香織  
坂本愛子  
石山敦子

## ●最優秀賞受賞のことば

### ●選評

小説・評論

山高岡塚見渡辺

高館木小堀江加賀谷

柴荒森加石川高橋

川柳俳句詩  
短歌

崎橋部本上瑠  
義光三鳩枝いさむ  
修司

橋岡村林江沙オリ  
一稻登絢  
成風龍子

芳川田藤悟朗  
隆祥千技子  
隆一郎貢

## ●あきたの文芸 「あきたの文芸」応募状況

## ●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說 · 評論

# 一 小説・評論

## 奨励賞 ナメクジと

### 七色の羽の鳥

東京都練馬区（横手市出身）

佐和島 ゆ うら

六月の終わり、雨が降っていた。鼻をくすぐる雨の匂いは、溶けたアスファルトの匂いも混ざって気持ちが悪かった。長袖のシャツを着ていたも、心細くなるほどに気温は低い。鍵の壊れた体育倉庫の中で、私は肩をすくませる。

空気の冷たさに体が反応したわけではない。同級生の久美代の笑顔に、おののいていたのだ。久美代は美人だ。目鼻立ちは整っているし、髪の毛はさらさらと肩の上を流れている。身長も高く手足はすらりと伸びている。制服はその美しい容姿にふさわしく、のりがきいている。よれてくたびれた制服を着ている自分とは大違いだ。

久美代と私は同級生ではあるが友達ではない。もし教室が

森だとしたら、木の上で美しい声で鳴く七色の羽を持つ鳥が久美代だ。私は木の陰の石の裏に這うナメクジだ。あまりにも住む世界が違います。

久美代の視線は親しげで、普段の関係性からは考えられないほどにじっと見つめてきた。私は居心地が悪くて目を合わせられない。

「そんなびくつかないでよ。ただ、私はお願ひをしているだけなんだから」

そう。そんな甘ったるい声で久美代はお願いをしてくる。

ことははじまりは一年前だ。

元から久美代は文章を書くのが苦手で、中学時代は作文の成績がひどかった。

高校に入学してまもなく、私がうっかり落としてしまった作文を久美代は見て、作文を書くように強要してきたのだ。

久美代の強要を断れるわけがなかった。

久美代は基本的に威圧的な態度をとらないし、物腰も低い。ただこちらが圧倒されるような笑顔と蛇のような視線を時折向けるだけだ。しかし久美代の強要を断れば、教室での立場が悪くなることは明白だった。

私はおどおどしながら、口を開いた。

「……頑張ります。久美代ちゃん」

私は書いた。書いて書いて書き続けた。結果久美代は私の作文でコンクールの優秀賞をとった。

「琴子。今度お願いしたいのは、平和の大切さを訴える作文なの。正直平和とかよく分からな

いけど、戦争のことをつっこめば、大丈夫でしょ」

久美代の言葉に私はぼそぼそとした声で返した。

「いつまで。やらなきゃいけないの」

「来月の末かな。学校祭の終わった頃」

久美代は私の肩を軽く叩いた。

「頑張ってくれるよね、琴子」

私は素早く頷き、一步後ろに下がる。

身震いしそうな自分がいる。触られたくない。

久美代だけではなく、人に汚い自分を触られるのが苦痛で仕方がなかった。自分の体臭に気づかれてしまうのではないかと思った。汗と垢が混じった気持ち悪い臭い。しかし過剰な反応をすれば、怪しまれる。

久美代と私は同級生ではあるが友達ではない。

教室で関わることもほとんどない。もし教室が

久美代が体育倉庫から出て行くと、私はざわつく心を必死になだめた。自己嫌悪と底なしに卑屈になる心。私は嫌になるくらい自信がない。

学校が終わると急いで家に帰った。母親から家の電気が止まるかもしないという連絡を受けた。

電気が止まるのはもう、家では日常茶飯事だ。ならば対策を立てなければいけない。仏壇のろうそくをありつたけ集めて、夜に立ち向かわないといけない。ろうそくは一本で一十分は持つ。

食事用に一本。勉強用に三本。家事や就寝の準備に、何本用意すればいいのだろう。素早く計算する。この時の自分はひどく奇妙な生き物だ。肌が粟立ち、皮膚の内側に流れれる血が騒ぐ。何をどうすれば生き残れるのか、脳がぐるぐると動く。生きるために行動を起こすために、覚醒している自分に気づく。

私はそういう時の自分が嫌いではなかつた。

少なくとも教室にいて、体臭が他の人にかかれてしまうのではと怯えるよりはずいぶんましだった。久美代の前でへこへこと言うこと聞く自分は自分じゃない気がした。でもむなしいのも事実だった。私の人生って、こんなものなのだろ

うか。

ここは平和で豊かな国だと言われているのに、私はちっとも満たされない。生きることに必死で、みつともない。

負け組だから、しようがないと言えば母親は怒るだろう。何に負けているのと聞いたただすだろ。その怒りの形相が、余裕のない暗い瞳が「負け」を示していることに気がつかないだろう。

もし父親が気まぐれでも、お金を入れてくれていたら幸いだ。ただし今家にいるかは分からぬ。でもいたらお金を持っているだろう。何故か父親はいつもお金を持っている。家族のために使ってもらうという幸運にかけるしかない。

ただでさえガスが止まっているのだ。三日に一度、市営の銭湯に入っている生活なのだ。電気が止まれば、現代人の生活から、また一步遠ざかってしまう。

私はこんな状況の家に対して怒りを感じなかつた。

あるのは無力感と諦めだ。氣を抜くと指先に力が入らず、だらりと糸の切れたマリオネットのように腕が下がる。呼吸は静かで、ため息も出ない。

八歳くらいの時だろうか。ひまわり柄がプリントされたかわいらしいワンピースを着た同じくらいの年の女の子に笑われた。女の子はリボンで髪を二つに結んでいて、風に柔らかくなびいていた。

笑われた瞬間、私は自分のみすぼらしさに耳元まで肌を赤く染めた。

安売りの総合スーパーで買ったトレーナーを着て、髪の毛も毎日洗っていなかつた。髪の毛は皮脂でテカリが出ていた。

汚いなあと女の子は無邪気に鼻をつまんだ。

汚い、ばいきんみたい。

私は悲しくて手を伸ばすと、女の子は避けた。そして逃げ出してしまつた。

子供特有の高い悲鳴が耳に響く。

私はそこに一人取り残された。体に力が入らない。

でも、どんなに苦しんでも、私の心を受け止めてくれる人やものは何もないのだ。

汗で服が肌に張り付く。

どうして汗は分泌されるのだろう。体を冷やすための防衛機能の一つだなんてことは知っている。だけど私にとって汗は恥だ。汗が出ること

とで起きる不都合を考えると、汗なんて必要な  
い。だけど水を飲むのを控えても汗は止まらない。  
粘液を出して地面を這いつるナメクジのよ  
うだ。

電気をつけると、部屋は白い光で照らされる。  
奇跡的なことに、家に父親がいた。

「請求がうるせぐで、払ってきた」と言うと、  
また出かけてしまった。

母親は父親を追及しなかった。

どうして今まで、支払いを先延ばしにしてい  
たのか。

そんな質問は、もはや愚問だ。ライフライン  
が保障されていない生活なんて今も昔も変わら  
ない。これからも変わることはないだろう。

食事を終えて部屋に戻る。

机に座って、鞄からノートを取り出す。ペー  
ジを開くと気が抜けた。

どこにでもりそな、キャンバスノート。  
その中身は私の思いが綴られている。

久美代に逆らえない自分、それに嫌悪する自  
分。

家の生活。毎日お風呂に入れないこと。そ  
のことで人に引け目を感じていること。

筆記用具を手に取った。ふいに脳細胞から染  
み出した記憶に、肌が粟立つ。シャープペンシ  
ルを動かした。慌てすぎてぽきりと芯が折れる。  
それでも動かした。

中学時代はもっと生活が苦しくて、一週間も  
お風呂に入れないことがしばしばあった。思春  
期真っ盛りの女子は、制汗スプレーで汗の臭い  
を気にしていた。そんな女子の前で一週間もお  
風呂に入っていない私は立っていられなかつた。  
皮脂は固まりとしてこぼれ、髪は脂で濡れて奇  
妙なほどにつややかだった。肌も妙に脂がつい  
てテカっていた。夏が近づけば、体からの臭い  
がないとは言えない。

視線が怖かった。自分の人に言えないささや  
かな惨状に気づいて嗤つてゐるのではと思つた。  
……疑心暗鬼で頭の中にウジ虫が徘徊していた。  
休み時間になる度に、図書室へと逃げた。本  
棚の間にしゃがみ込み、うめいた。恐怖が私の  
心臓を掴んでいた。

まなじり  
眦に涙がたまる。頭をかぶり振り、天井を見  
る。涙を落とさないようにする。悲しいことは  
悲しい。過去はもう一度と取り返せない。皮膚  
をカッターを使って剥いだような痛み。こんな  
ことをして、「自分」を保てるのだろうかと思  
う。不安になる。

深く息をつく。  
何か、楽しいことはないだろうか。あかぎれ  
に塗る軟膏のような、優しく患部を包み込んで  
くれるもの。

ふと、昨日見た夢を思い出した。

私は居酒屋で働いている。普通の町にあるよ  
うな居酒屋ではなく、幽霊がやっている居酒屋  
だ。そこに綺麗な女幽霊がやってきて。私は小  
さく微笑んだ。

の世で一番汚いものになる。馬鹿にされるどこ  
ろじゃない。人間扱いだつてされない。  
みんな、綺麗なものが好きでしよう？

私だって綺麗でいたいのに！

見ないで、見ないで。見抜かないで。

どうしてこうなるの。どうして、お風呂に入  
られないの。恥ずかしい。生きていて恥ずかし  
い。

どうしてこうなるの。どうして、お風呂に入  
られないの。恥ずかしい。生きていて恥ずかし  
い。

夢の内容をノートに書く。

過去の思い出を書いている時よりも、何倍も楽しかった。柔らかな暖かい膜が、心の痛い部分を塞ぐ。

書き終えると、ノートを胸に抱く。心に血液が循環して元気になった。

七月になると梅雨は続いていたが、時折雲間から見せる日差しは夏のものになっていた。心に重石がのる。本格的な夏がやってきた。私を憂鬱にさせる夏が。

担任の高橋が、二メートル近くある大きなベニヤ板に紙を貼り付けていた。

「よし、こんなもんだなあ」

高橋は教室の後ろ側で作業を見ていた生徒たちに笑顔を向ける。

「あつ。この板に、ちぎり絵をやればいいんだな」

自分の愛称を呼ぶ生徒に高橋は頷いた。

「そうだ。去年の文化祭は最下位だったからな。今年はきちんと時間守って、いい作品を作るんだぞ」

去年、私のクラスは学校で規定した作業時間

を大幅にオーバーして、大量に減点された。作品の出来もお粗末なこともあり、最下位に甘んじたのだ。

久美代は元気よく手をあげる。背中には自信が満ちあふれている。

「任せてよ、あつ。今年は計画をきちんと立てたし。美術部に下絵を任せたわ」

久美代は教室を見回す。

「後はみんなの努力次第なのよ。作品の精度を上げて、入賞を目指すの」

「頼もしいなあ、久美代は」

高橋の言葉に久美代は大きく頷く。そして周囲に発破をかける。

「いい！ 絶対約束は守って勝つのよ。私たちの真の実力を見せつけなくちゃ。去年みたいな事態は繰り返さない。勝つの！」

七色の羽を持つ鳥は、鮮やかに生徒たちを導く。

「あつ。この板に、ちぎり絵をやればいいんだな」

気合を入れて拳を上げる久美代に、生徒たちも追従した。大きい声と、拳がたくさんあがる。

「そうだ。去年の文化祭は最下位だったからな。今年はきちんと時間守って、いい作品を作るんだぞ」

すごいなと私はその光景に圧倒された。

久美代は本当にすごい。

美術部に依頼したこと也有って、下絵はすぐに出で上がってきた。

濃淡のある青空と白い筋が流れる藤色の鳥海山。前方には青い稲が広がっている。

久美代は満足げに頷いた。

「うん。いいじゃない。鳥海山と田んぼ。興味を惹きつけるには十分ね。さすがは美術部」

久美代にほめられて眼鏡をかけた小太りの女子は嬉しそうだった。赤い眼鏡のフレームを女性のように押し上げる。

「まあ、ちょっと。資料の写真の模写が大変だったけどね。たくさんの色を使って表現するより、少ない色でも、濃淡をきちんと出した作品の方が美しいと思うの」

早い口調で語る女子の話を、久美代は笑顔で聞き流していた。

明らかに興味がなさそうだった。

お前の話なんてどうでもいいという心は表には出さないようにはしているが、そのかわり薄っぺらい笑みを堂々と貼り付けている。私は二の腕をさすった。つららを当てられたような寒気が走った。

久美代は自分の態度に罪悪感がない。利益を得られれば、その後のことなんてどうでもいい。

自分の思い通りになれば、それでいい。その無自覚な傲慢さを振りまいっている姿を見て、いられなかった。

久美代は本当に恐ろしい。

「おい久美代。ちぎり絵の下、空白部分がある

ども、どうするんだ」

高橋の声が聞こえた。

「ううん。そうだ。何かの本の、名文を書けばいいんじゃないでしょうか」

久美代はごまかすように笑った。

「あはは。まあ、何とかしますよ」

時間はまだありますしと呟く。久美代はちぎり絵の材料の紙をちぎるように、同級生に指示した。

授業は終わったが、迎えの車が来るまで時間が経った。図書室でノートに今日のことを綴り、教室に置いてきた本を取り戻した。教室の扉に手をかけた時、女子の声が聞こえた。

「ねえ。琴子ってさ、臭くない？ 汗の臭いだと思うんだけど」

怖気が走る。言葉が心に刺さって、息が浅くなる。胸元を掴んでそのまま持ち上げて、鼻に近づける。汗の臭いを確認した。けれども自分の体臭が強まっているのか分からなかった。足が床に張りつけられてしまつたかのように動けない。自分が感じ取れなかつたものを、人が感じ取つていたという事実はあまりに重かった。

久美代は軽く笑つた。  
「ううん。制汗剤を使ってないからじゃない。  
ほら、あの子。そういうところがうとそうじゃない」  
「そうかなあ。何かさ、髪も毎日洗つているのかなあと思うのよね。もう夏なのに」  
「別に毎日洗わなければいけないという法律はないでしょ」

久美代は仰天した。  
「えええ。久美代、マジで言つているの。そんな気持ちの悪いことを言わないでよ」  
久美代は女子の前に立つた。にこにこと笑つていた。

「あんたさ。自分の道具は大切にしなさいって言われなかつたのかな。子供の頃に。琴子はね、とっても優秀で有用なの。大事にしなきや、ね」  
見えざる手で喉を掴まれた。

久美代はきっと優しくて、優しくて、自分が従う限りは悪い人ではないはずで、だから私は駄目だよ。本気で怒るよ  
あっけらかんとした口調。その言葉の裏には、聞いた者の背筋を震わすほどの威圧があった。

私は駆け出した。

鳥はじっと、私のことを訝しがるみみずを見ていた。

みみずは悟る。自分が森の王たる鳥の機嫌を損なおうしていることに。

「分かった。分かったわよ。言わないからさ。

そんな目で見ないでよ。ていうかさ、琴子と久美代ってそんなに仲良くないよね。何で、そんなに怒るのよ」

久美代はおどけた仕草をしながらくるりと回る。扉についた窓から教室を見ている私を見る。笑う。口の端がにいと上がる。怯えたみみずは、久美代の歪んだ笑みに気づかなかつた。私だけが見ていた。

久美代は体を伸ばす。

「あんたさ。自分の道具は大切にしなさいって言われなかつたのかな。子供の頃に。琴子はね、とっても優秀で有用なの。大事にしなきや、ね」  
久美代はきつと優しくて、優しくて、自分が従う限りは悪い人ではないはずで、だから私は彼女に付き従えば何もかも安心で、だから、だから……。

ごまかしきれない。胃の奥から怖気がこみ上げる。

普段は数学の授業で使われる特別教室に逃げ込んだ。久美代は私を助けてくれた。私に疑念を持った女子の言葉を封じてくれた。

それは、感謝すべきことだ。

実際今の私は三日に一度にしかお風呂には入らない。毎日頭を洗うことが出来ない。生きているから汗を止められない。

自分を抱きしめると、体が震えていた。汗を指先に感じて、たまらない気分になつた。奥歯を噛みしめた。

久美代の道具で在り続ければ、私は久美代から守られるだろう。

久美代の、優しさの皮を被った言葉、モノに対する慈愛のこもった目。

どうして、作文を書く能力があるだけで。クラスで力がないだけで。

どうして私がそんな目に遭わないといけないの。

そう、言い出したいのに、私の口は動かない。唇は見えない糸で縫いつけられて、呼吸するの

も辛かった。私は拳を握った。

やがて感情を高ぶらせているのにも疲れて、私は緑の床を食い入るように見つめた。プリペイド式の携帯電話からアラーム音が聞こえた。そこで意識が現実に戻る。

ああそうだ。今日は母親が迎えに着て、銭湯に行く日だった。

混乱している。身体を動かすが、自分で動かしている気がしない。誰かにあやつられている気がする。

……そうだ、自分は人形に過ぎないのかもしれない。腹にたくさんのナメクジをうごめかせる、久美代の道具。

よたよたと肩を揺らしながら、私は特別教室を出て行つた。

翌日、私を呼びだした高橋は、右手にノートを持っていた。頬を強ばらせて、指先一つ動かせなくなる。高橋は眉を寄せた。  
「琴子。おめなあ。あまりに人目につくことで、こんなノートを置くんじゃね」

私は目を見開く。やはり高橋はノートの中身を確認したようだ。もしものことを考えて。決定的なことは直接的に書いていないといえ、私の心を晒しているノートだ。私は首をすくめた。ゆっくりと頭を下げた。

そして気づかなかつた。ノートを忘れたことに。人に見せてはいけない大事なノートを。

ノートがないことに気がついたのは、家に帰つてしまはらくのことだった。胃がぐっと下がるよう

な衝撃とともに、自分の馬鹿さ加減に頭を抱えた。あのノートには、クラスと名前がきちんと記載してある。誰かが見つけたら、担任の高橋に届けるだろう。しかしそれを素直に返され

るとは思えない。授業に関係のないノートだと察して、高橋は中身を確認するだろう。高橋はプライバシーを守るという意識が欠けた教師だった。

明日のことを考えると、胃が痛くなる。私は布団に倒れ込んだ。

琴子。あのな、後で時間、あるが？」

「放課後なら、いつでも大丈夫ですけど」

「そうか。ちょっと話したいことがあるんだ」

高橋は人の良さそうな顔でやりと笑った。

その顔が、何か企んでいるように見えて、戸惑いを覚えた。これ以上の用件が思いつかない。

高橋は笑っている。落ち着かなかった。どうして笑っているのだろう。

怯えたウサギのように拳銃不審になる私を高橋がなだめた。

「いやそんな、お前を責めるような話じゃねえから。安心せ」

「はあ、そうですか？」

窺うように見る私を安心させるためだろう。

高橋は大きく頷いた。

校庭から陸上部の生徒の張りのある声が聞こえる。図書室で二十年は働いているという司書

は、本の整理をしていた。図書室は人がまばらで、多少声を出してしまっても許されてしまいそうな雰囲気があった。小説を読みながら高橋を持つ。しばらくして生徒に注意しながら、高橋が図書室にやってきた。

私は立ち上がった。

「先生。話って何でしょう」

高橋は私に席に座るように促した。

「ああ。そうだな。えっとよ、うちの高校には文芸同好会って同好会があるんだ。知つていただ

が？」

「知らないです。そんな同好会が活動しているという話も聞いたことがないです」

「まあ。人が集まつたら同人誌を作るってレベルの、小さな同好会だ。知らんのは、無理もねえべ」

「……その同好会がどうかしたんですか？」

高橋に聞くと、高橋は愉快そうに頬をゆるませた。

「今度文化祭で同人誌を出すんだ。俺が顧問になつてな。どうだ、琴子。この同人誌に何か作品を載せてみないか」

すぐに言葉が出なかつた。高橋の言つている言葉がうまく飲み込めず、沈黙が流れた。

ゆつくりと頭にしみこませるように言葉を理解すると、うなじが熱くなり、私は手を大きく横に振つた。頬を朱に染める。

「無理です、無理ですよ。私、そんな、同人誌に載せるような作品を書いたことがありません」

「いや同人誌に参加する他の生徒も、創作経験は浅い。そんな気を遣わなくともいいど」

「でも、でも。私に何かが出来るわけがない……」

自分の胸に手を置いて、私は困り果てる。すると私の肩を高橋が叩いた。

「自分の夢で見たことを物語にしたらどうだ。……おめのノートを見た時、夢についてかかれた文

章が、一番生き生きしていいだ」

私は目を合わせて、高橋は言った。

「自分が一番楽しい文章を書けばいい。書きたい物語を書けばいい。おめが楽しいのなら、それが一番だ」

高橋の目は私の姿をしっかりととらえていた。

逡巡し、考える。自分は何か作品を書き上げられるのだろうかと。自分の楽しいは何だろうと。楽しくないものはすぐに思いついた。

作文だ。それも久美代に強要されて書くものは、どれもこれも楽しくない。強要されていることに抑圧を感じ、息苦しさで喉が詰まる。自分で書いている言葉のはずなのに、自分のモノではないような気がする。

そして自分が書き上げたもので、久美代がほめられるのを見る度に、心が握りつぶされそうになる。

自分が久美代の掌の中にいる。あやつられるだけの存在だと感じて、叫びたくなることもあつ

た。

でもこの同人誌に書く作品に、久美代は関与しない。すべて自分のものだ。

そう考えた途端、胸が高鳴った。心臓の鼓動がリズミカルに踊る。気分の高揚でふわふわと地に足が着かない。子供のようにはしゃいでいた。

私は前のめりになった。

「お願いします。先生。私も、その同人誌に参加させて下さい」

私の言葉に高橋は嬉しそうに頷き、同人誌参加の手引きを手渡した。私はその手引きを読みだした。

着信があつたので確認すると、久美代からのメールが来ていた。

明日の放課後までに、以前頼んだ作文の一次原稿を完成させておいて。というものだった。

七月に入り、締め切りが近づいている。作文は一度書けば終わりというわけではない。何度も推敲して書くもの。

久美代は締め切りを破られるのが嫌いと考えると、急いで書かなければいけないだろう。

自然と眉間にしわがよる。心底、嫌だなと顔

を伏せる。それでも机に向かい、シャープペンシルを手に取った。けれど作文を半分ほど書いた時、我慢が出来なくなつた。

シャープペンシルを放り出し、布団に潜り込む。ごろごろと転がり、想像する。

頭の中に大きな鍋があつた。私は鍋の前に立つ。思いついたアイデアを、次々に放り込んでいく。アイデアが放り込まれる度に、赤からオレンジ、コバルトブルーからイエロー。様々な色に変わる鍋の味を確認する。

ちょっと、設定倒れをしそうな味だな。内容が刺激的すぎて、最初の思惑と全然違う。このアイデアを持ってくるとしたら、このままだと話の流れがおかしくなってしまう。

思案する。考え込むのが楽しい。

自分の考えたものはいったいどんな形になるのだろう。想像するだけで心が浮き立つ。少し

でも、自分の思うとおりの物語が作りたかった。正確な形にしようと何度も考えた。妥協したくはなかつた。

天井に向けて手を伸ばす。目をつむる。瞼の裏に雲一つない青空が見えた。ナメクジの身からあまりに遠かつた空が、少し近くに感じた。

久美代の作文は約束の時間までに何とか出来上がつた。しかし正直言つて、読んでも面白くない作文だった。良い作文はどんな形であれ、人の心を動かすものだ。それだけのエネルギーを持っている。けれど今回書いた作文はつまらない。誰が見ても一目で分かるほどに、平凡な考収がだらだらと書かれたものだった。読んでも時間を消費しただけだと思われても仕方がないものだった。

久美代は私の作文をろくに見ずに受け取つた。「助かったよ。次回もよろしくね」

上機嫌に言うと、久美代は職員室へと向かった。とりあえず場をしのげたことに安堵しつつも、私の心中は暗雲が立ちこめていた。

次回は、ちゃんとした作文を書けるのだろうか。

心の中で呟く。自信がなかった。

危機感は覚えつつも、本音が頭の中に広がる。

いた方が、ずっと面白い。

創作の楽しさにはまる自分に気がついた。そ

う簡単に抜けられるものではないと思った。

そうしてしばらく考えて、私は思考することを止めた。先が分からぬのだ。どうなるか分からぬことに心配したり、思考したりすることは、ひどく疲れる。こんなことに使うなら、もっと別のやりたいことに使いたかった。

詩人の幽霊が、同じ幽霊が経営する居酒屋で自分語りをするという小説を書いた。以前見た綺麗な女の幽霊が出てくる夢を元にした。

白梅の香りに気づくあなたの心は陽だまりのよう。けれど私の心はあまりにも不釣り合いで、身をすくめる。

百年の孤独を閉じこめた飴を舐めて、酔いしれる私は醜いでしょう。冷たい肌の女でしょう。その手を取るあなたはあまりに優しくて、柔らかな新緑の葉のよう。私の頬にしづくだけがこぼれるのです。

物語は詩人が詩を呟くところからはじまる。

居酒屋の店主が詩を賛嘆すると、詩人は自分が深いと語りだした。

むかしむかし、大きな都に詩人は暮らしてい

た。詩人は芸の道では有名ではあったが、夫はなかった。本妻のいる男に囲われていた。

詩人の書く詩は優しかった。けれどもそれを書く詩人は、高貴な出自に鼻をかけて、素直に人と向き合えない性格だった。

詩人は生きていくだけの力がなかった。経済的に困窮していた。詩人は男にすがっていかなければ生きていけなかつた。女が働いてお金を稼ぐという概念がない時代だった。

詩人は男に体を許しても、心をなびかせないと決めていた。出自からくる自分の誇りを汚したくはなかつた。

男は詩人のことを「杯に浮かぶ月のようです」と語りかけることがあった。詩人が「掴ませるつもりはございませんから」と答えると、男は

杯の酒をぐっと飲んだ。そして柔らかく微笑んだ。

「私はそんな貴女が好きですよ」

詩人はくだらないと顔を背ける。一人が会うのはいつも夜だった。それが時代の習いとはいへ、男は陽の当たる時の詩人を見たことがなかつた。男と女になつても、それ以上の関係になることはありえなかつた。

くだらないと詩人は眉をひそめた。

陳腐でつまらない甘言に、誰が心を傾けようと思った。

男は詩人の元に通い続ける。男の周囲にはたくさんの人がいて、男はどの人間にも優しかつた。詩人は八方美人な男と蔑みながら、詩を書くことに専念し続けた。その様子を男は酒を飲みながら、優しく見つめる。その視線を詩人は無視した。

男は詩人にどれだけ冷たく当たりられても、穏やかな態度を崩さなかつた。

ある晩、男は詩人の詩を読んだ。

「貴女の詩は、都でも評判ですよ。とても美しい詩を書くと」

詩人は鼻で笑つた。

「詩と書く者の性格が一致していないとも評判でしょう」

「分かっていない者は放つておいても良いのです。詩に出てくる貴女の心も、私に言葉の刃を向ける貴女の心も、どちらも貴女でしょう」

「分かった口をきくのね」

「そうですね。惚れた女のどんなところも受け

入れたいのですよ。私は」

真摯な男の言葉と視線に詩人の心はかすかに

動く。本妻がいる男の瞳は寝屋に差し込む月の光で濡れていた。詩人は思わず目をそらす。感情が動き、落ち着かなかった。

男は詩人を抱き寄せる。男の温もりが伝わる。その熱に混乱する。詩人は男の腕の中で身じろぎ一つとれなかつた。

詩人と男の関係は変わらなかつた。相変わらず詩人は男を冷たくあしらつた。しかし男が数日自分の元に通わないと落ち着かなくなつた。

詩人は自分を恥じたが、自然と男の姿を探す自分がいた。詩人は唇を噛む。さもしいと感じた。

男が唐突に詩人の元に来なくなつた。詩人は月の満ち欠けを見ながら、じつと男を待つた。やがて詩人は風の噂で、男の本妻が身ごもつたことを知つた。

知つた晩、詩人は筆を取り、詩を書こうとした。

だがいくら待てども言葉が浮かばない。詩人

は焦つた。身の内に溢れかえるのは、溶岩のよ

うな熱い嫉妬だった。詩人は何度男と体を重ね

ても、けして身ごもらなかつた。

産の痛みだけではなく、祟りにあつていた。祟りの正体は、髪の毛を振り乱した詩人だった。

本妻は子供を産むことが出来たが、祟りで息絶える。

それを詩人は夢で知つた。それが自分のせいであろうことも知つっていた。

詩人は屋敷を出た。底が深い川にかかる橋へと向かう。橋の上から水面に姿を映すと、そこには往年の美しさが失われた鬼が立つてゐた。詩人は筆を離して、床に伏した。嫉妬、不安、恐れが体の血を沸き立たせる。男の姿が目に浮かび、同時に顔の知らない本妻の笑みも浮かぶ。陽光の下、子供と男と本妻が笑い合う姿を想像した時、詩人は初めて自分の感情に気づく。詩人は声を失つた。

男をこの世で一番愛している。

詩人はその感情に身がちぎれそうになつた。姿を見せぬ男を追い求めた。

どうか、どうか、自分に逢つて欲しい。姿を一目見たい。また杯の月だと呼んだ自分を呑んで欲しい。

けれど子供も産めず、出自が高貴なだけの女

に、男をつなぎ止めるすべはなかつた。

男は優しい。子供を産む本妻を大事にするだろう。子供が産まれたら、目の中に入れても痛くないほどに可愛がるだろう。男と本妻の未来を想像するだけで、詩人の心は苛まれた。狂気が暴風となり、心中を駆け抜けた。

居酒屋で詩人は涙をこぼす。

「結局私は、私を信じられなかつた。男を信じることもしなかつた。自分の感情も認められず、狂つて人を殺してしまつた。素直になれば良かつたのに。自分の思いを大切にすれば、もっと別の道もあつたのに」

詩人は話を聞いてくれた居酒屋の店主にお礼を言った。詩人が店を出ると、満月が輝いていた。

愛おしさがこみ上げる。自分の中の物語が花開き、甘美な果実を落としたことを確認すると、安堵にもよく似た疲労感で私は脱力した。自分の中のものを出し切った。心地が良い。

湯船につかって時のような気持ちよさだ。夏で三日もお風呂に入れないと、肩がこる。見え

ない重石が肩にのり、まとわりつく垢でため息が出そうになる。体の筋肉は緊張で張りつめている。それが湯船につかって、全身を伸ばすと、すべてがなくなる。身体と心が生き返る感覺。

私は汗がじわりと滲む手で、自分の胸元を強く掴んだ。唇には笑みが浮かぶ。私の物語、私の生み出したモノ。

その存在は、私の手の上に確かにあった。

高橋に声をかけられた。

「小説を読んだぞ」

あ、と私は声を出しそうになった。そうだ、

高橋に小説を提出していたのだ。高橋は作品のとりまとめをしているだけで、まさか読むとは

思っていなかつたが。瞬間的に身体に力が入る、初めて書いた小説。書いてみて楽しかったが、どんな評価がくるのか、見当がつかなかつた。私は高橋を窺い見る。恐る恐る口を開けた。

「えっと、どうでしたか？」

高橋は腕を組んで、静かに語りだした。

「そうだな。とても高校生が書くような内容には思えねがつた。女の狂う様が迫真的だつたな。何というか、読んでいてやるせない気分になつた」

私は肩をすぼめた。夢で見た女の慟哭を、どうやつたら説得力を持つて伝えられるのかと思つて書いたのだが、高橋は気に入らなかつたのだろうか。

私は口を真一文字にした。すると高橋は腕を組むのをやめて、私の目と目を合わせてきた。

春の太陽の光を反射する小石のように、瞳が輝いている。

「だけど、面白い！ 文章が綺麗だ。過酷な物語なのに、文からは優しさを感じる。詩人の悲しさがよく伝わる。琴子、お前すごいな。やるじゃないか」

「私の物語、良かったですか？」

高橋は大きく頷いた。

「良かった。琴子、お前はもっと自分に自信を持った方がいい。お前は物語を書くことが出来るんだ」

私は自分の手のひらを見た。指先は丸く、も

みじをそのまま大きくしたような、幼さを感じる手だ。そんな手でも、書くことが出来る。誰かの感情を自分の物語で動かすことが出来た。久美代に言いなりになるナメクジでも、やれることがあるんだ。

肌が粟立つ。刷毛で背中を撫でられたようだ。

全身が震える。恐怖や絶望を覚えたからじゃない。もっと湯たんぽのよう温かくて、言葉に出来ない感情がこみ上げる。私は口元に手を当てた。気分が高揚する。口から言語化出来ない感情がこぼれそつた。

は出来上がり、色に濃淡をつけて絵に深みを持たせる作業に入つていた。私は紙をちぎり、ピンセットを使って貼り付けた。板の半分の空白をどう埋めるかは決まっていなかつた。

文芸同好会の同人誌が刷り上がり、廊下の片隅に置かれた。少しづつ同人誌は持つていかれ、数が減るのを実感する度に、私の心の中で花が

咲いた。

一輪、二輪、三輪、四輪……私は夜、目をつむると花を何度も数えた。心が少しづつ満たされていく。

久美代が私を呼びだしたのは、花が十輪、咲いた時だった。

梅雨明けしていた。夏の本番を迎えた日差しは、夕方になつても強かった。朱とオレンジの光が教室に差し込んでいた。

久美代は日差しを嫌ってか。影になつている教壇に腰掛けていた。顔の上半分が見えない。

表情が窺いしれないことに、ひどく不安をかき立てられた。私は恐縮し、肩を縮こませる。

久美代は足をぶらぶらと揺らしながら言った。「作文がね、お粗末だって。先生から書き直した方がいいって言われちゃった」

久美代の口調はマシュマロのように軽かった。

ちょっとと出かけたら、おいしそうなドーナツ店を見つけたのと言っているぐらい、何でもなさそうだった。

それが逆に怖かった。私の喉元に、鋭い刃物の切っ先を突きつけられたような気がした。声帯がうまく動かず、かすれた声が口から漏れる。

自覚していた。久美代に渡した作文がお粗末な出来であることに。書き直すように言つてくるのも当然だ。

「困ったなあと思ったよ。琴子は今まで、私に恥をかかす作文なんて書いたことがなかつたから」

「ごめんなさい」

久美代から求められてもいらないのに、私は自然に頭を下げて謝っていた。心臓の音がばくばくと耳の中で響く。背中の筋肉はひきつり、手のひらの柔らかい部分は汗で滲んだ。気持ち悪かった。

久美代はえへっとかわいらしく声を上げて笑つた。私はひとと喉を鳴らした。久美代の手には私の小説が載った同人誌があった。

久美代は教壇からおりて、私の前に立つた。

「私、思ったの。もしかして、琴子は……」私の作文よりも大事なことが出来たんじゃないかなって！」

私は唖然としながら聞いた。極刑判決を待つ被告のような気分だった。声が震えた。

「久美代ちゃん。その同人誌、持つていたの？」

久美代は頷いた。瞳を大きくして。子猫のよ

うな愛らしさのある瞳だった。

「うん。ばっかり読ませていただいたよ。琴子の作品」

久美代は形のいい唇を歪ませた。

「すごい力作ね。これに夢中で、私のお願いがおざなりになつたんだ」

久美代は簡状にした同人誌で、私の頭を殴つた。私はとっさのことに、声を出せなかつた。

七色の羽の鳥は、大きなくちばしを開けた。「ちゃんと、しつけしなきやね」

久美代は私の襟首を掴んで、私と目を合わせていた。でも目は瞳孔が開いていて笑つていい。久美代の視線に射抜かれて私は動けない。

久美代は私を突き飛ばす。机に当たり、うまく受け身がとれないま、私は床に転がつた。

久美代はいち、に、さんと歌うように数え出す。

ちぎれた紙が、宙を舞う。幼子が面白半分でゴム人形の手足を抜くように、久美代は同人誌を破つた。

私は久美代にすがつた。

「やめて。やめて。私の小説を破かないで」

私は散らばり落ちた同人誌をかき集める。そ

の手を久美代は踏みつける。私の手を床に縫いつけるように、足に力を入れた。私は痛みでうめく。目が見開く。瞳に紙切れと化した同人誌の姿が映る。

久美代は、鳥は、ナメクジを冷たく見下ろした。

「勘違いしないでよ。あんたは私のためだけに作文を書きなさい。それが仕事、あんたのやるべきこと。私の言うことを黙つて聞きなさい」

久美代は私の髪を掴んで、耳元に息を吹きかけた。

本当、汚い髪ね。脂っこくてふけもあって、最悪。

あざけりを含んだ言葉を耳に入れる。心を凍らすには十分だった。言葉が毒蛇になつて喉を噛む。全身に絶望が駆け巡る。

「期待しているからね。作文、今度こそお願ひね」

久美代は私の顎を掴んで、小首をかしげる。

お返事は？ 無言の問いかけ。

私は唇を震わせる。

「はい……」

意志のない「言葉」という音が、口からこぼれた。

久美代が教室を出ていくと、散らばり床を汚した紙切れにしみが広がった。ぼつ、ぼつとしずくが落ちる。唇に入り込んだしずくは塩辛かつた。

とめどもなく流れる涙は、流せば流すほどに惨めな気分にさせた。鼻をすする。みつともなく、汚い音がした。

私は紙切れを集めて、胸に抱えた。

書いた言葉の一つ一つが頭に思い浮かぶ。物語は無惨な結末に泣いているような気がした。キャラクターはどんな気持ちだろうと思つた。

詩人、男、本妻は無事なのだろうか。自分のいる世界を否定されて、どれだけ傷ついただろ。かわいそうでしょうがなかつた。心が張り裂けそうだった。

自然と謝罪の言葉が口からこぼれた。

「ごめんね、ごめんね。痛かったよね。私が、私がふがいないばかりに」

謝罪をすればするほどに、申し訳なさで頭が割れそつだつた。同時にどうしようと思った。

久美代は認めないだろう。私が創作をすることを。

自分のために文章を書くことだけしか、認めないだろう。道具は反抗しない、そう久美代は許

考へている。

私は動けなくなつた。久美代の考えを深く深く理解すればするほどに、動けなくなつた。指に、髪が絡んでいた。二本絡んでいた。マ

リオネットをあやつる糸のように、しっかりと絡んでいる。

今度こそ、お願いね。耳に先ほどの久美代の言葉が蘇つた。私は叫び出しそうな声を殺しために、自分の喉に手をやつた。首を掴み、力を込めた。

時間だけが過ぎる。

強い光とともに朝がきて、太陽が空をめぐって、夜が虫の音ともに過ぎていく。だけど私の心は時を刻まない。久美代に同人誌を破られた瞬間から、動けずにいる。食欲がなかつた。母親が作ってくれたものを見ると胃がえずきそうになる。母親は心配をする。けれども私は大丈夫とごまかした。何も言えなかつた。

私が久美代の道具になつていると知つたら、母親はどれだけ悲しむだろうと思うと、本当に頭がおかしくなりそつだつた。

創作をしたかった。けれど創作をすれば、それにかまけるだろう。そんなこと、久美代は許

さない。

小やぎに石を詰められた狼のように、絶望感でお腹がいっぱいだった。動く度に悲鳴を上げて、頭が熱くなる。同時に申し訳なくなる。喉が乾いた。水をがぶがぶと飲んで、顔を上げた時に鏡に映った。思わず鏡に水をかける。ナメクジが鏡に映っていた。

ちぎり絵の作業を手伝う。もう締め切りまで時間がなかった。久美代は忙しそうに教室を歩き回る。そこに美術部の女子が声をかけた。

「久美代。さすがに下の空白に手をかけないとまずいよ。どうするの？」  
「そうね。他のクラスは何をしているの？」  
「ううん。作品のタイトルとかクラスのモットーとかを書いているみたい。特に制限がないみたい」

「まいっただなあ。私、そういうのが苦手なのよ。ちぎり絵のコンクールなんだから、ちぎり絵一本で勝負しなさいよって言いたくなるんだけど」「おい、久美代。その空白の件だども」  
高橋が会話を割り込んできた。

「どうしたの、あつ？ もしかしていい案があるの？」

高橋は真面目な顔で頷いた。そして私を手招いた。

高橋の行動の意味を深く考えられないまま近くと、高橋は強く私の肩を掴んだ。

「琴子。ちぎり絵の空白に詩を書かないか？」

私はぽかんと口を開けた。高橋の言っている意味がよく分からなかつた。久美代は唇の端をひきつらせた。

「ちょっと、ちょっと待ってよ。あつ。琴子に空白を任せちゃうの。それはどうかと思うよ。変な言葉を書かれたらせつかくの絵のイメージがダウンしちゃう」

「俺はそうは思わね。琴子はちゃんとやってくれる」

「……素人なんだよ、琴子は。素人の文章を誰が」

久美代は口をつぐんだ。高橋が厳しい視線を向けた。

「久美代。俺はお前さ聞いてるんじゃねえ。琴子に聞いているんだ。なあ琴子、お前はどうしたい？ 詩を書きたいか？ それとも」

高橋の問いを前にして私の呼吸は浅くなつていた。心臓が痛かった。高橋の言葉には、自分に対する信頼がにじみ出していた。

私の書くものが必要とされている。そのことに初めて嬉しいと思った。私は高橋の目を見た。

「やらせて下さい。書かせて下さい」

久美代は呆れたように、息をついた。馬鹿馬鹿しいと思っているのだろう。けれどかまわなかつた。私は自分に与えられたチャンスから逃げたくなかつた。

詩が出来るのはあつと言ふ間だった。

携帯電話で撮った写真を元にして、イメージを膨らませると、言葉はあつと言う間に文字として紙に滑り出ってきた。メモ用紙に乱暴に書き出した言葉を、作文用紙に丁寧に書き写す。

久美代は高橋の提案にのつた私に、直接文句を言うことはなかつた。ただあきらかに面白くなさそうだった。本当は私にまた「しつけ」をしたかったのだろう。しかし教室には高橋がいて、言葉をぶつけることすら出来なかつた。

七色の羽を持つ鳥は、さぞや腹立たしかつただろう。

私は作文用紙をファイルにしまいながら、考

え込んでいた。詩を書いてみて思った。

楽しいと感じてしまった。それどころか、目

のはしに涙が滲んだ。瞼の裏に赤や黄色の火花  
が散っている。

今回は高橋のおかげで創作をすることが出来  
た。けれど今後はそうはうまくいかないだろう。  
創作をしたら久美代は怒る、絶対に。

一度覚えた「楽しいこと」の甘美さは背骨に  
くる。

一度望まずに離れて、また思いがけなく触れ  
てしまうと、心がぐずぐずに溶けそうになる。

すっかり私は創ることに、侵されている。何  
度も、何度も書かずにはいられない。その樂し  
いことが、また離れてしまうのか。また……望  
まずに……私は拳を握った。もう、手放したく  
なかった。

しかし弊害がある。久美代がいる。

あの美しい鳥は、ナメクジをそのくちばしで  
ついばんでしまう。ナメクジの仕事は地面を這  
うことだと、高みから見下ろしている。けれど  
その圧倒的に強い立場にいる鳥は、自分の立場、  
に酔って、油断しているのではないか。そこに、  
つけいる隙はないだろうか。

「あ……」

声が漏れた。今思いついた。思いついたが、  
そのアイデアが及ぼす影響におののき、戸惑つ

た。呼吸を落ち着ける。そうして……それしか  
久美代の呪縛を解く方法がないと結論づけた。

久美代の呪縛を解く方法がないと結論づけた。

久美代の呪縛を解く方法がないと結論づけた。

久美代の呪縛を解く方法がないと結論づけた。

久美代の呪縛を解く方法がないと結論づけた。

久美代は手を止めず、後ろも振り返らなかつた。

一度覚えた「楽しいこと」の甘美さは背骨に  
くる。

一度望まずに離れて、また思いがけなく触れ  
てしまうと、心がぐずぐずに溶けそうになる。

すっかり私は創ることに、侵されている。何  
度も、何度も書かずにはいられない。その樂し  
いことが、また離れてしまうのか。また……望  
まずに……私は拳を握った。もう、手放したく  
なかった。

しかし弊害がある。久美代がいる。

あの美しい鳥は、ナメクジをそのくちばしで  
ついばんでしまう。ナメクジの仕事は地面を這  
うことだと、高みから見下ろしている。けれど  
その圧倒的に強い立場にいる鳥は、自分の立場、  
に酔って、油断しているのではないか。そこに、  
つけいる隙はないだろうか。

一度覚えた「楽しいこと」の甘美さは背骨に  
くる。

一度望まずに離れて、また思いがけなく触れ  
てしまうと、心がぐずぐずに溶けそうになる。

すっかり私は創ることに、侵されている。何  
度も、何度も書かずにはいられない。その樂し  
いことが、また離れてしまうのか。また……望  
まずに……私は拳を握った。もう、手放したく  
なかった。

しかし弊害がある。久美代がいる。

あの美しい鳥は、ナメクジをそのくちばしで  
ついばんでしまう。ナメクジの仕事は地面を這  
うことだと、高みから見下ろしている。けれど  
その圧倒的に強い立場にいる鳥は、自分の立場、  
に酔って、油断しているのではないか。そこに、  
つけいる隙はないだろうか。

一度覚えた「楽しいこと」の甘美さは背骨に  
くる。

一度望まずに離れて、また思いがけなく触れ  
てしまうと、心がぐずぐずに溶けそうになる。

すっかり私は創ることに、侵されている。何  
度も、何度も書かずにはいられない。その樂し  
いことが、また離れてしまうのか。また……望  
まずに……私は拳を握った。もう、手放したく  
なかった。

しかし弊害がある。久美代がいる。

朗らかな声で言っていたが、高橋の目は笑つ  
ていなかつた。その言葉を聞いた私は立ち上がり

て、久美代はきっとあの場所にいる。学校内で日  
につかない、二人の秘密の場所。久美代が私に  
作文を書くように強要してきた場所。

久美代は体育倉庫で座り込んでいた。

久美代は私の声に唇をわななかせた。私の肩  
を掴む。

「どういうつもりよ。あんた。どういうつもり  
は、私が書いたものです」

久美代は私の声に唇をわななかせた。私の肩  
を掴む。

たかっただろう。

久美代はふざけんなと言つて、私を突き飛ばした。

「あんたに私が何をした！　臭いあんたを守つてやつたのに。私に従えば、守つてやつたのに」

雹が降るような勢いで久美代は激しい言葉をぶつけてくる。私は何も言い返さず、久美代を見つめた。

久美代の顔色が変わる。綺麗な顔は怒りで形相を変える。久美代は私のお腹を蹴った。肉に包まれた内臓が足の衝撃で悲鳴をあげて、私はせき込んだ。吐き気がこみあげる。私は苦痛にのたうち回りたいのをこらえて、久美代をにらみ続けた。久美代はさらに私を蹴ろうとする。

思い通りにならないことに腹を立てている。私は思いきり、自分の拳を壁に叩きつけた。その音に久美代が怯む。

私は叫んだ。

「久美代ちゃんの道具になっていたら、私は自由にならない。自分の書きたい言葉を書くことも出来ない。私の言葉は私のものだ！　お前の心を満たすために、書いているんじゃない！」歯がうまく噛み合わない。かたかたと鳴る。憤りで唇の動きがおかしくなっている。

とうとう本当のことを言った。自分の気持ちを表した。久美代は何も言葉を返さない。手の甲に涙を落とし、泣きじやくりはじめた。そこには七色の羽を持つ鳥でなかった。ただの子供がいた。

私は体育倉庫を出る。久美代の居場所を先生に伝えにいくために歩き出す。夏の夕暮れは長いが、それでも空の端には青い闇が忍び寄っていた。

空がひどく近くに感じる。空気の熱が肺に入るのも気持ちよかつた。ああ、手足に熱が通っている。

私は空に向かって手を伸ばした。

この気持ちは、どんな文章にしたら楽しいのだろう。

## 奨励賞 ふるさとの肖像

埼玉県所沢市（秋田市出身）

藤田みち

黒っぽい薄手のコートに両手を突っ込んだ男が、背を丸めてコンクリート橋の欄干から川を見つめている。ヒョイと顔を上げると、とぼとぼと歩き始めた。

「水の流れは、ともかく、昔のままだ」

この六十がらみの男、関がそうつぶやいたのは、すっかり様変わりしてしまった故郷の町に昨日来当惑し、うら寂しく感じていたからだ。

今日は午前中に母の十三回忌法要を終え、妹夫婦と昼を食べ、その後何するでもなく一人でぶらぶらしている。

五月の連休後半とはいゝ、東北のこの町にはうすら寒い風が吹いている。関は首をすくめた。

そう広くない道の両側に小さな飲食店が数軒並んでいる。ほとんどが閉じているところを見ると、夕方以降に聞く飲み屋が多いのだろう。人通りはとんとなく、お世辞にもこぎれいとはいえない店みせのシャッターの前を、車ばかり

が我がもの顔で通り抜ける。

この界隈のかつての賑わいを覚えている関は、ため息をついた。雑貨店や洋服店、オモチャ屋が人を集め、夜店が立つ夏の夕べには、人にぶつからないで歩くのが難しいほどだった。もう半世紀近くも前のことになる。角には八百屋があつた。野菜を載せた台や漬物樽が道へとはみ出し、おばさん連れいつも混み合っていた。その中には関の母もいた。

関少年が使いに来たこともあった。塩漬けシナチクを何グラムだか、母にいわれた通りに買った。母の作ってくれたシナソバの濃い醤油の味が舌によみがえる。

「あれはうまかった」

通りの中ほどに来ると、古本屋が昔と寸分変わらぬ店構えで営業している。入ってみると時が止まったかのよう、奥まった狭い番台に過ぎし日のままに歳の行つた主人がちんまりと座っている。もちろん代替わりしているはずだ。

駅前のホテルの部屋にもどると、喪服のまま

椅子に腰掛け、画集を開いた。

雪の街角を一頭の馬が櫂を引いて行く絵がある。櫂には木材が積まれている。そのまま後ろで、短いスキーを履いた男児が滑っている。よく見ると、両手の竹製のストックが櫂の後ろに引っかかっている。くたびれた学生服を着て、ニカッと笑っている。「楽ちん、楽ちん」とで

壁際に歴史書のコーナーがある。律令制度、鎌倉仏教、幕藩体制などの背のタイトルが、いやな記憶を引き寄せる。関は一年前まで高校で歴史を教えていた。

郷土関係の棚を見ていると、郷土史や民話集に埋もれるように、パンフレットのようなものが押し込まれている。六十ページほどの薄い画集で、聞いたことのない画家のものだ。おそらく油絵だろう。一昔前のこの地方の風俗や人々との暮らしが、細部までたんねんに描かれていく。四季折り折りの街のたたずまいは哀感をたたえ、まるでタイムマシンに乗つて昭和の時代にもどったような感覚を覚える。ページをめくるたびに、懐かしさがこみあげる。

こうして関は画集『小川未之助みのすけ』が描くふるさと』に出会った。

もいっているようだ。家いえの屋根には雪がうずたかく積もり、軒には長短のたろんべ、つまりつららが下がっている。ひとつの窓の中で、綿入り半纏の少女が外を見ている。

この男児は自分だと関は思う。すうっと息を吸うと、冬の冷気がそこにあるのだった。

こっちは夏の絵だ。緑の木々に囲まれた広々としたグランドで、白いランニングシャツに半ズボンの少年たちが空を見上げている。空にはいくつもの模型飛行機が自在に飛び回っている。ワーワーという歎声が聞こえてくる。

関は忘れかけていた遠い日のことを思い出す。台所の板の間で模型飛行機を作った夜のことだ。

ロウソクの火に竹ひごをかざし、少しづつ曲げた。焦がしすぎると、ひごは細かな繊維を見せて折れる。翼の形ができると障子紙を貼る。飛行機が完成するとゴムを巻いて、部屋の中で飛ばしてみた。巻き上げられたゴムから伝わる弾力のある圧迫感が、指によみがえる。そうやって作った飛行機は、市の模型飛行機大会で惨敗だった。グランドの回りの茂みに落っこちて、胴体が折れてしまった。

小川未之助の描く懐かしい風景の中に、関は子どものころの自分をきっと発見した。どんな

将来が待ち受けているかななど皆目知らないまま、のんきに無邪気に遊び回っていたあのころの自分がだ。

これらの絵を描いた小川未之助とは、いったいどういう画家なのだろう。なぜこれまで世に知られることがなかつたのだろう。画集は昨年春の出版だ。

画家の息子の小川寅一による一ページほどの「解説」が巻末にある。

「父小川未之助は大正八年未年にこの町に生まれ、旧制中学を卒業後、国鉄に就職しました」

小川未之助は日曜画家であつたらしい。数年前に亡くなり、四十枚ほどの油絵を残した。長男の寅一は私費を投じて本を出版した。

卷末に小川寅一の現住所が記されている。この人に連絡すれば、实物を見せてもらえるかもしない。

関は机の中からホテルの便せんを取り出し、書こうとして手を止めた。

見ず知らずの者が突然連絡して、絵を見せてと要求するのは、あまりに自分勝手ではないか。

立ち上がって部屋の中を歩き回るが、諦め切れない気持ちが募るばかりだ。今度は決然と便せんに向かった。

五つ年下の妻は現役の教師だ。年度初めの四月五月は、学校現場は猫の手も借りたいほど忙しい。まして新入生のクラスを受け持っている

「初めてお便りします。東京から来ました関信太郎という者です。ひょんなことでお父上の画集を手に入れ、拝見し、たいそう感動しております。

大変唐突ではありますが、お父上の絵を見せていただくことはできますでしょうか。わたしは今、駅近くのホテルに滞在中です。もしや絵を見せていただくことができないかと勝手なことを考へ、滞在を延期して、ご連絡をお待ちしております。ご連絡いただければ、いつでも、どこにでも伺います。お手数とは存じますが、なにとぞ、よろしくお願ひいたします。」

一気にそう書くと、携帯電話番号を付記した。明日には東京に戻るつもりだったが、ホテルのフロントにとりあえずの延泊を申し出、速達でと小川寅一への手紙を委託した。

今回やはり関東から帰省した妹とその夫は、昼食がすむと「明日から仕事だから」と、急いで帰ってしまった。関は当初から今夜はここに泊まる予定でいた。家に帰っても、どうせ無気力な生活が待っているだけなのだから。

月五月は、学校現場は猫の手も借りたいほど忙しい。まして新入生のクラスを受け持っている

妻は、学校の廊下を小走りしているに違いないし、家でも持ち帰った仕事を毎晩遅くまでやっている。「無理にいっしょに来なくていいよ」と、妻の同行を諦めるしかなかった。

勤めていた高校を定年で去ったときの心境は、とにかくゆっくりしたい、それだけだった。四十年近く教師をして、心底疲れ果てた。知恵をしぼって工夫したつもりの授業でも、結果は生徒たちの私語、いねむり、成績不振だった。悩み苦しんだ年月だった。定年を迎えた昨春、非常勤講師の道もあつたが、さっさと辞めてしまった。

自分の無力を常時突きつけられる生活、時間に追われる生活から解放されたかった。近現代日本史の研究を深め、所属している学会に論文のひとつも書いて投稿しようかという野心がないわけでもなかった。

しばらくはのんびりしよう、が夏になり秋になつた。やる気は一向に起きず、本を手にしても気づくといねむりをしている。そのうち綿飴のような正体のない厚い膜に、身体も精神もすっぽりとおおわれてしまつた。その膜はやさしく甘苦く、抗おうにも抗う力そのものをふやかした。

夕食作りだけは、それが免罪符であるかのように日課にしている。午後になると買物に出かけ、おかずを作る。妻の帰りを待ちながら、好きなワインを飲み始める。夕食後、妻が書類を抱えて書斎に退いても、テレビを見ながらまだ飲んでいる。酒量が増え、最近は一晩でボトルを空けることも珍しくない。翌日は二日酔いで自己嫌悪に陥る。

妻は腫れ物に触るように、遠巻きに見ている。決して注意をしたり小言をいったりはしない。

夫が現在陥っている苦境には、親身のアドバイスも忠告も効果なしと見当をつけているらしい。よけいなことをいって夫のプライドを傷つけたら、事態をこじらすだけと自らにいい聞かせているようでもある。そうだとしても「の本人にしてみれば、憐れむような目で見られるよりは、ずばりと非難されたほうがよっぽど気が楽だ。

気に入った絵画を見せてもらうため、もう少し滞在すると妻に電話した。

「そう、良かつたじゃない。是非見ていらっしゃいよ」

何かに初めて挑戦する幼児に対しているような、大仰で明るい励ましの声色が携帯に響いた。

寅一氏からの連絡を待つあいだ、県立美術館、

県立博物館、古代の城柵跡の見学と、どこに行くにも関は画集を携えた。

幕がさっと開くと、明るい照明に照らされて舞台の細部がそこに存在するように、未之助の絵の一枚一枚を引き金に、思い出はリアルによみがえった。身体の周囲をおおう結界を滋養の雨が溶かし、久しぶりに思いっきり手足を伸ばした自分がいる。そして哀惜と郷愁と、自分を育んでくれたものへの感謝の念が胸の中で脈打つた。

寅一氏からの電話が来るときに酩酊していくはいけないと、断酒もして待つた三日間だったが、四日目の朝にホテルを引き払う決心をした。「また出直すことにしてよう」

十時のチェックアウトに間に合わすべく荷造りをしていると、テーブルの上の携帯がけたたましく鳴った。

「小川という者ですが」

小川寅一は足掛け三日の泊まり勤務から夜遅く家に戻つた。

長く勤めたメーカーの早期退職に応じたのは数年前だ。そのタイミングで女房が出て行つてしまつた。今は国道沿いの「格安ホテル」でフ

ロントの仕事をしている。仮眠室での連泊は、還暦を過ぎた身にはこたえる。世の中はゴールデンウイークで、ホテルは珍しく繁盛した。

郵便受けから新聞を引っ張り出すと、封書が一通こぼれ落ちた。

また画集の感想だろう。みなが皆口をそろえて「懐かしい」とすればかりだ。

あれの出版は一大決心だった。弟からもいくらか融通してもらい、出版社との交渉を経て、なんとか出版にこぎつけたときには、これで一生分の親不肖を償つたつもりだった。

しかしそれはほんの取つかかりで、坂道におかれた雪玉のように事態は展開し、どこまで転がり大きくなるのか、もはや留めようもない。

地方紙に取り上げられると、反響が湧いた。この一年振り回されっぱなしだ。額装さえしていないものが多いのに、見せてくれ、貸してくれ、売ってくれとひきも切らない。

居間のテーブルに新聞や手紙類を投げるようになると、封書をつまんで開封する。東京から来て滞在中という男性からのもので、実物を見せてくれという。

寅一は冷や酒をグラスに注ぎ、二階に上がった。洋室の明かりをつけると、四枚の絵が壁の

上で待っている。ソファーに背をもたせ、グラスを傾ける。

全く、と寅一はいつもの愚痴を繰り返す。都会の連中は季節のいいときにだけやってきて、ここは水がおいしいだの空気が違うだのという。

親父の描く雪景色が「たまらない」とのたまうが、だったら冬もいてみればいい。俺たちは毎年雪との戦いだ。

寅一は壁の絵を見回す。

「冬の停車場」。プラットホームの上空はまだ暗く、到着したばかりの汽車の車内は明るい。

手拭いを頬被りした婦人が数人、背中にくくりつけた大きな荷物の重みで前にかしき、我先にホームに降りようとしている。

向かい合わせになっている木製の座席では、黒いマントに学生帽をかぶった青年に手伝ってもらつて、荷を背負おうとしている婦人がいる。

「学生さん手え貸してけれ」とでも頼んだのだろう。どの顔も「きょうもいっぺん稼ぐべ」という意気込みで、赤らんでいる。郊外から魚類や野菜を売りに来たガンガン部隊のおがっちゃんたちだ。トンビと呼ばれた黒いコートを着た男もいる。立ち上がって「着いたか」とばかり、窓の外を見ている。

この絵は人気の筆頭だ。「ガンガン部隊が懐かしい」「あのころはこのおがっちゃんたちのよう、みんな頑張って生きていました」と口を揃えていう。「この絵は末之助さんの駅員としての記憶ですね」と鑑賞してみせる。

しかし俺たち親子にとって、国鉄は不幸の元凶だ。親父が国鉄を退職されしなかつたら、お金もあんなに苦労せずにすんだものを。当時国鉄職員の相当数がひどい目にあつたことを、今の世ではだれも覚えていないし、だれも知ろうとはしない。

「醤油工場の夜」に寅一は目を移す。

親父は国鉄を去ったあと、港のモッコ担ぎで日当をもらっていた。モッコに石炭などを入れて背負い運ぶ作業だ。そのあと醤油工場に就職した。

カンバスには工場内の薄暗い空間が広がり、巨大な樽が列をなしてそびえている。天井に届くほどの木製の樽は茶褐色をして、竹を組んだ頑丈な瓶(たが)が回りを絞めている。醤油の樽だ。土間を奥へたどると、行き止まりに小さな部屋があり、明るい電球のもとで少年が二人ニコニコして木桶風呂につかっている。小学生だった自分と弟だ。父が宿直の夜に泊まりに行つたのだ。

人は醤油工場の様子がいかにもで、「醤油の香りがするようです」という。「醸造産業は、この町の主要産業でしたものね」と妙に納得する奴もいる。

ところが父にとつては醤油工場はつらい職場だった。モッコ担ぎで痛めた腰で、今度は醤油や味噌を造るための米や大豆の袋を担がなくてはならなかつた。生涯腰痛で苦しみ、何回か手術もした。安月給だったから、お袋は夜なべで内職をしていた。

俺が見ると、寅一は思う、黒々とそびえ立つ樽は人間を脅かすようだ。

「松島の午後」の二枚がある。寅一は反射的に目をそらした。

花冷えというのだろうか、今夜は冷える。

一生あくせく働き、何ひとつ誇れるものない父だったが、絵を描いていたときばかりは楽しそうだった。自分の世界に入りこむというのは、ああいう状態のことだろう。とはいえた父は、作品を発表するというようなことは全く考えていなかつた。価値のあるものだなんて思つてもいなかつたろう。

画集の出版後に、何人かの熱心なファンが現

れ、「小川未之助美術館」を創ろうといい始めた。少し離れた港町にある実家が空き家になっている。そこを改装して、という案が出ている。

ここ四枚と、隣室に箱に入れて保管している数枚の他は、実家においてあるわけだが、額装だけでも大変な費用がかかる。ましてあのぼろ屋をつぶして防火建築の美術館に改装するとなると、最低でも三千万円は必要ということだ。有志が市と県に掛け合つてくれたが、資金不足で無理とのことだ。

港町の町おこしの目玉にしようとしている連中もいる。だからといって、町が金を出してくれるわけではない。

ノスタルジーとやらで、三千万の金が集まるはずはないだろう。親父が残した家族の歴史だから、俺と弟にとっては大事なものだ。しかし他人にとつても、そんなに意味があるものだろうか。俺には全くの謎だ。

ともかく手紙の男には、明日電話してやろう。

今日はもう遅いし、第一話す気力がない。連絡があるまでホテルで待つていいのだから、暇な奴だ。「感動した」と手紙にあった。今夜一晩ゆっくり寝たら、明日はその感動男に対応する元気が出るかもしない。

寅一は立ち上がる、部屋のスイッチを切った。

その家は郊外の住宅地の一角にあった。建て売りらしいこじんまりとした二階建てで、ブロック塀に囲まれている。庭には冬からの枯れ草がそのままに折れ乱れ、その合間に緑の雑草が顔をのぞかせている。伸び放題に茂るツツジの葉むらに、赤紫の花がちらほらと顔を覗かせていく。

膝の出たズボンにトレーナー姿の、角張った顔の小柄な男がドアを開けた。  
「押しかけて申し訳ありません。お電話いたしました東京の関です」

玄関の狭い二和室には履き古された靴が何足か出しっぱなしにされ、上がり口には古新聞の束が置かれている。関はコートを脱ぐと掛けるところを探したが、空しく腕にかかえこんだ。

「絵は二階にあります」

寅一はそういうって先に立つた。途中でくの字に曲がる狭い階段を上ると、五畳ほどの洋室の壁に絵が四枚架けてある。寅一がカーテンを開けると、花柄の壁紙が色あせていて。部屋の中央に、かつては真っ白だったであろう二人がけ

のソファーが置かれている。

どれも思つたより小さな絵で、小学校の一人用の学習机ほどの大きさだ。画集の巻頭を飾つていた「冬の停車場」がまず目に入る。

関は目を見張った。暗い戸外と明るい列車の中の対比は写真で見るより鮮やかで、おばさんたちの表情もより活き活きしている。マントに学帽の青年にやっと出会えたと思うと、関の顔はほころんだ。

「すばらしい絵です。お父上の仕事に寄せる愛情が感じられます。このマントの学生は好感が持てます。いかにも気のいい、やさしい心根が感じられます。作者の暖かい眼差しが反映しているのでしょう」

印刷されたものよりもずっとリアルで奥深い絵の世界は、関の思い出をかき立ててる。

「そういえばわたしの家でも母が、リヤカーで売りに来るおばさんから魚を買っていましたよ。わたし、この町の出身なんです。冬には大きい鮭なんか買って、するとその夜は鮭フライだったものだから、母が買うのを見ると嬉しかったのです」

寅一は無表情のまま立っている。あまり長く時間をとつてはいけない気がして、関は「醤油

工場の夜」に移動する。

「親父の職場に弟と遊びに行つたときの絵です。国鉄を辞めたあとのことです」

何度も繰り返した解説であるらしく、一本調子の声が聞こえる。

「これも末之助さんの職場を描いた絵なんですね。味わい深い絵です。お二人はなんて楽しそうなんでしょう。

わたしの家にも一時期、こんな風呂がありましたよ。湯船につかって褐色に変色した木肌に

触ると、少しぬめっとしました。風呂桶の脇に焚き口がついていましたよね。途中で母が入ってきて、かがんで火加減を見ててくれたのです。そうそう、きれいなお湯の入った狭い仕切り部

分があつて、そこには新しいお湯が入つていて、『陸湯おかゆつこをかけて出れや』と母がいってくれたりして……」

しゃべりすぎたと口をつぐんだ関だったが、回想は回想を呼んだ。

風呂場には洗濯機がおいてあつた。洗濯機には手回しローラーの絞り器が付いていた。母は裏庭に洗濯物を干した。洗濯バサミもない時代で、柱と柱の間に張った縄を手でよじつて空隙を作り、そこに衣類の端を突っ込んで干した。

冬の日には洗濯物がバリバリに凍つて、シャツはシャツの形に、股引は股引の形に真っ平らに凍つた。干すときも取り込むときも、どんなに

寒く冷たかったらうか。一瞬のうちに過去の情景が浮かび、関は厳肅な気持ちになった。法事の読経のさなかですら、チラとも浮かばなかった母の像だった。

現実にもどった関は「丘の上の博物館」に向かった。画集で見たとき以上に、自覚ましい印象を与える絵だ。

丘の上の円筒形の近代的な建物と、人の列だ。青い空の下、真っ白な建物は誇らしげに立っている。建物の入口から丘のふもとまで、老若男女の長い行列ができる。

建物から三々五々出てくる人びとがいる。女性は胸や腕に赤や青の大きな石のアクセサリーをつけ、子どもたちは手に小瓶を持ち、その中にも大きな石が光っている。子どもらは財宝を手に入れた桃太郎のように、小躍りしている。

「この建物は鉱山博物館でしょうね。カーニバルのような華やかな絵ですね」

「自分と弟もそこにいます。鉱山博物館の開館の日に、お袋が連れて行ってくれたんですね」

「家族の思い出の場面なんですね。この宝石で

しょうか、光る石ですね、出てくる人がみんな持っている石はずいぶん大きいですよね」

「現実離れしています」

当の絵には視線を向けず、寅一はつぶやいた。

「非現実的な石の大きさに、博物館の開館を喜んでいる市民の心が表現されているのかもしれませんね」

関の想像はつづく。

「鉱山王国と呼ばれていたこの県への人々の誇りが描かれているのかもしれません。すごいなあ、それをこんなふうに色と形で表現するなんて。銀山があつたとか、銅が採れたとか、言葉を尽くして説明してもいまひとつピンと来ないものですよ、産業の歴史なんて。すごいなあ、芸術だなあ」

感嘆の声を寅一は眉ひとつ動かさずに聞くと、「松島の午後」の方へ一步進んだ。

「なんとなく寂しい絵ですね」

松島湾はエメラルドグリーンの水をたたえ、

島々は濃い緑の木々を茂らせていて、岸壁には観光船が横付けされ、観光客が数人乗り込もうとしている。少し離れたベンチには一組の中年の男女が、微妙な間隔をおいてつくねんと座っている。一人とも寂しげな表情で遠くを見てい

る。

「親父とお袋です。松島に行つたことがあったんです」

寅一は簡単にそう説明すると、関の方を向いた。

「あとは何枚か隣の部屋に置いてありますけれど、額装していないものですからお見せしていません。残りの絵は港町の実家に置いてあります」

「港町のご出身だったんですね。昔はちんちん電車が通ってましたっけね」

訪れた沈黙に、関はここが潮時と察した。

「お忙しいところ、見せていただき本当に有り難うございました。本物を見ることができて、これで心置きなく東京に帰れます」

関が玄関で靴を履くべきか迷っていると、二階のカーテンとドアを閉めた寅一がゆっくり階段を降りてきた。

「お茶、飲みますか」

心からの誘いというわけにはいかないが、関には嬉しい呼びかけだった。

雑然としたリビングから庭が見える。寅一は珠暖簾の先にあるキッチンで、バタンと音をさせて冷蔵庫を閉じると、片方の手にグラス二つ

を、ウーロン茶のペットボトルをもう片方に持つて現れた。

「ホテルに滞在だそうで」

「ええ、実家は売り払ったのですから。法事で來たんです。古本屋でお父上の画集を見つけ

てからというものの、どうしても実物を見たくなりまして。今日お電話がなかつたら、いったん帰ろうと思っていました。だから、お電話いただいたときは、嬉しくて飛び上がりたいくらいでした」

「お待たせしてしまって」

「暇人ですから、気になさらないでください。お父上の絵は昔を思い出させてくれます。この歳になると子どものころが懐かしくて。本当によかったです」

「せっかく来てもらって、あれしかお見せできなくて。手狭なもので」

絵を見たあと興奮が収まらないまま、関は心に湧き起ってくる思いを口にした。

「駄目な男です、わたしなんて。四十年も教師をして、ひとつの時代の解釈もひとつの論文も残しました。出来の悪いぼんくら教師です。わたしの専門は日本の近現代史なんですが、お父上は昭和という時代を丸ごと表現しました。

そこに生きた人間の息吹をカンバスに定着させました。すばらしい画業です」

告白めいた心情吐露に、寅一は話し手の真意

を測りかねるよう視線を宙に遊ばせた。関は発した言葉に自ら恥じ入り、頬を赤らめ下を向く。寅一はウーロン茶を飲み干すと、尋ねた。

「東京で高校の先生をしていらつしやつたのですか？」

聞き手の冷静な態度に助けられ、関は目を上げた。

「はい、大学を出てから昨年までずっと。それ

で、お父上は若い頃から絵を書いていらしたのですか？」

「始めたのは、わたしが中学生くらいだったと思ひます。知り合いに教えてもらつて」

「そのころも未之助さんは国鉄に？」

「いえ、とうに辞めていました」

「そうすると、駅の情景は思い出して画いたの

でしようか？」

「そうです。博物館の絵もそうです」

「すごい記憶力ですね。それは、すごい。ところで国鉄はいつごろ退職されたのでしょうか？」

寅一氏は即答を避けるように問合ひをとると、その話題を終わらせたい気持ちを露わにして、

いい渡した。

「自分には親父が国鉄職員だったときの記憶はないです」

立ち上がった寅一は、パソコンで作成したものらしいチラシをテーブルの上にさらりと置いた。

そこには「冬の停車場」がカラー印刷してあり、「小川未之助美術館を創ろう」という見出しと、小川未之助美術館設立準備会代表何某、そして一口一万円と書いてある。

その日の午後遅く、依然として居間のソファーにいた寅一は、急にいらいらと立ち上がり、またぞつかりと腰を降ろした。テーブルの上のペットボトルの根元には、小さな水たまりができる

いる。

寅一の頭の中には、関との会話がいやおうなく浮かんで来る。

大学出の教師だというのに、自身を駄目者呼ばわりしていた。高校教師の何十年間より、親父の手すさびのほうが上等だというようなことをいっていたが、人を馬鹿にしているのだろうか。妙にへりくだつて見せるのは、むしろ自分の優位を疑わないからだろう。何しろ苦労をし

ていない人間の言葉は信用ならない。

博物館の絵が鉱山王国の誇りだとは恐れ入った。

寅一は薄笑いを浮かべる。

鉱山博物館の開館の日のこととは、忘れようもない。俺は小学生だった。展示室の入り口に、

大人の背ほどもある楕円形の岩があった。垂直な切断面が露出していて、中には鉛筆の先のようにとんがった紫色の結晶が数え切れないと群がり、中心の狭い空洞に向かってキラキラと林立していた。地中にこんなに精巧できれいなものが埋まっているのかと、俺は目を疑つた。

お袋が買つてくれたガラス瓶には、ピンクや青、緑のきれいな小石がつまっていた。俺は大事に机に入れて、ときどき出しては見ていた。そのうちに親父が鉱石図鑑を買ってくれた。

俺はその本に夢中になった。一枚の写真をよく覚えていた。白っぽい母岩に、コロコロとした二十四面体のガーネットがいくつもくつついでいる。それらの石榴(ざくろ)のような暗赤色の結晶は、母岩から成長したものだと解説にあった。

俺たちの足元の地下で、絶え間なく動いているマントル。その何十億年もの動きにともなって美しい鉱石は形成され、やがて地表近くに移

動して来るのだという。俺は地球に流れた悠久の時間に思いを馳せた。

将来は鉱物博士になろうと決心し、高校生になると、地元の国立大学の鉱山学部を目指して勉強した。

「丘の上の博物館」の絵はそのころ画かれたものだ。あのころはほんの一時、うちが明るかつた。親父は醤油工場で事務方に回してもらって、いくらか家計が改善していたし、お袋は内職から解放されていた。俺は眞面目に勉強したし、いいところの全くなかった我が家に、未来の望みが見えてきたというわけだ。

俺の志望の発端がガラス瓶の小石だと、親父は知っていた。だから瓶の石をうんと輝かせたんだ。それは我が家を明るく照らす、文字通り宝石だった。おそらく親父は弾む気持ちで筆を運び、他の見学者の石も大きく描いたのだろう。

親父は俺に期待していた。毎月忘れずに受験雑誌を発売日に買って来てくれた。

ところが俺は受験に失敗した。浪人したかったが、下に弟がつかえていた。諦めるしかなかつた。俺は高卒で地元のメーカーに就職した。親父もお袋も長いことしょんぼりしていた。しかし親父はあの絵を消さなかった。家族の夢

を絵に閉じ込めたままにした。

あの絵を見るたびに、俺は自分の出来の悪い頭と失敗だらけの人生を突きつけられる。それなのにみんながあの絵を好きだという。

寅一は立ち上がり、窓を開ける。

連休の間つづいた晴天が、やっと曇ってきた。相変わらずの草ぼうぼうの庭だが、少し見ない間に春めいてきた。赤い花が咲いているのは、女房が植えたツツジだ。庭をいじって喜んでいたときもあつたのに、もつと見栄えのする生活を求めて出て行ってしまった。

ソファーにもどった寅一は、今日の客との話題に連れ戻される。

あの男は親父がいつ国鉄を退職したのかと聞いた。はっきりとは返事しなかつたが、歴史の専門家だというから、思い当たることがあっただろう。

親父が国鉄を去ったとき、お袋のお腹には俺がいた。栄養不足と、今でいうストレスが祟つたのだろう、お袋は産後の肥立ちが悪かつたそだ。お腹が大きいのに夫が失職じや、具合が悪くなるものも無理はない。

二人の子どもの出産と生活難が重なつたせいか、お袋はその後いつも身体具合が悪かつた。

お袋というと真っ先に思い出すのは、座布団を二つ折りにして枕にし、ちゃぶ台のわきで横になっている姿だ。

あの男は親父がレッド・ページで辞めさせられたと推察しただろう。マントの青年のやさしい仕草に、作者の暖い眼差しが感じられるといっていた。おがつちやたち、つまり働く者への共感というわけか。それが労働者の権利の思想につながれば、まっすぐにレッド・ページだ。そんなんじやない。親父は思想を貫いて首を切られるような強者じやない。それだけの強者だったたら、残りの人生ももう少し気の利いたものになつていただろう。

親父はやさし過ぎたんだ。なぜ国鉄を退職したのかと親父に聞いたことがある。

「おらは、仲間を檻に入れて見張る役だけはしてぐねがつたんだ」というのが答えだった。

駅は毎日沢山の現金を扱う場所だ。今は知らないが当時は駅舎のどこかに、現金をちょろまかした職員を入れる牢のようなものがあったのだろう。警察に引き渡すまでの一時的な拘束のための。労働運動のサボタージュや煽動容疑で、組合員がどんどん警察に逮捕された時代だ。捕まえた職員をとりあえず駅舎の牢屋に入れたの

だろう。親父はその部署に配属されたが、同僚を檻に入れて見張ることが、どうしてもできなかつたんだ。だから辞めたんだ。

親父が亡くなつてから、俺はもしやと思つて

たな。それくらいは分かると見える。あれはあまり人気のない絵だが、唯一親父とお袋が並んで登場するから、箱につっこんでおく気にはなれない。

図書館で『国鉄労働組合地方史』や『県労働組合史』にあたつてみた。大勢の組合員が職場を追われ、路頭に迷つたという。運動の歴史がずいぶん詳しく記録されていて、委員長・書記長の年度別一覧表や、ページにあつた代表格の組合員氏名までが載つていたが、親父の名前は出てこなかつた。組合員だったとしても下つ端で、リーダー格でなかつたことは確かだ。自分から何かを主張するような性格ではなかつたから、そんなもんだろう。

同僚の監視役が出来ずに職場を去つたというのが、やはり真相だろう。そんなんで国鉄を辞めて、モッコ担ぎだ。それで腰が曲がつてしまつた。

遠くで救急車のピーポーピーポーが聞こえる。最近この辺は実に静かだ。以前は学校帰りの子どもたちや、そこいらにたむろすおばちゃんどもの話し声がしたものだが、このごろはいつもシーンとしている。

あのお氣楽男も、松島の絵は寂しい絵だといつ

と、そう思つたに違ひない。

「松島の午後」が親父の最後の絵だつた。そのあとは、以前の絵をぼんやり見ていたり、手直しするだけだつた。家族の歴史はそこで終わってしまったんだ。

あの絵はお袋の人生そのもののような悲しい絵だ。あの事件があつた年の春に、弟は関東の会社に就職し、家を離れた。俺は結婚して、別に所帯を持っていた。息子が二人とも家を出てしまい、お袋は寂しかつたんだ。俺は自分のことで忙しく、そんなお袋の気持ちに全く気づいていなかつた。このことは悔やんでも悔やみきれない。親父だっていっしょに暮らしていくても、お袋の変化を見逃してしまつていてたのだろう。

松島の警察から電話があつて、親父はすっとんで行つた。お袋は女学校時代に修学旅行で訪れたという松島に、ふらつと出かけてしまつたんだ。生涯で一番楽しかつたという女学校時代に戻りたかったのかもしれない。

松島から連れ返されて、そのあとお袋は体調をくずし、じきに亡くなつてしまつた。

親父の落ち込みようはふつうじやなかつた。苦労をかけてばかりだつたと、後悔の嵐だつたにちがいない。旅行に連れて行ってやりもしなかつた、初めて行ったのが家出のときだなんて

館ができたたら、親父だって喜ぶだろう。有志が

金を集めてくれて、雑事もやつてくれたなら、別に俺は反対する理由はない。絵のいちいちに、ご大層な物語や美談をくつづけて喜ぶのは、見る者の自由というものだ。どうぞご勝手にというしかない。

見学者の対応が俺の手に負えなくなったら、家においてある絵をどこか公民館にでも貸し出して、そこに見に行つてもらうようにするまでのことだ。

あの四十枚ほどの絵は、もう親父とお袋、俺と弟だけのものでなくなつてゐるのかも知れない。気のいい親父は、まあそれでもいいべさといつて苦笑いするだろう。

寅一はうす暗い室内を見回した。そのとき何の脈略もなく、父の画いた花火の絵を思い出した。

夜空には赤や黄色の大小の花火の輪が広がっている。波止場には人びとが集まり空を見上げている。中央に立つて嬉しそうにしているのは、寅一と弟と、浴衣を着た母。

港祭りの夜の風景は、父親となつた寅一が娘の手を引いて花火を見に行つた日の思い出を引き寄せた。

ちっちゃな手が俺の指をぎゅっとぎつてい

た。娘は浴衣を着て、ピンク色の帯を締めていた。買ってやつたソフトクリームが溶け出して娘は泣き出し、俺はなだめながら浴衣や手を拭いてやつた。なかなか泣き止まなくて、それでもそのうち花火が上がり、娘はやっと笑顔になつた。

娘が顔を見せなくなつてもう何年になるだろう。成人してからは何を考えているのかさっぱり分からぬ娘だが、あのころは「パパ、パパ」と俺にまとわりついて、かわいかつた。

寅一の目のあたりがジンと熱くなり、思いがあふれてくる。夕闇に沈もうとしている庭を背景に、寅一は身じろぎもせずに座りつづけた。

未之助が国鉄を退いたのは、おそらく昭和二十年代だろう。戦後のインフレがひどく、「食べられるだけの賃金を」という官公労働者の待遇改善闘争は熾烈を極めた。それに対し、吉田茂政権は定員法を制定し、官公労働者を大量解雇した。それはつまり組合運動家の大量馘首だった。国鉄でいえば、全国六十万の職員が五十万人まで削減されたのだから、とんでもない規模の首切りだつた。

時を同じくして起きた下山、松川、三鷹の各事件。それらの事件処理に名を借りた馘首反対運動の弾圧と世論操作。アメリカ軍による占領下で、何でもありの悪い時代だった。当時は復員者や引揚者が狭い国土にあふれていたから、職を失つた者は容易に就職先が見つからず、土方や行商をした者が多かつたという。

家族をかかえた未之助が自分から進んで国鉄を辞めたとは思えない。おそらく労働組合運動絡みで首を切られたのだろう。

未之助は時代の波をかぶりながら、それでもあのときには、自分をとりまく重くて希薄な時間が永遠につづくと思われていた。今は何もかもが目まぐるしく動き始めた。頭は小川未之助の絵のことといつぱいだ。

「松島の午後」の絵には晩年の作者自身と奥

さんが描かれている。観光地のただ中にいて、

二人は周囲の楽しげな雰囲気から取り残されて

いる。奥さんも苦労したのだろう。

寅一さんは今は一人暮らしのようだが、あの展示室の感じからして、あそこは娘さんの部屋だったのだと思う。奥さんはお亡くなりになられたのだろうか。それとも何か事情があつて、別居しておられるのだろうか。

ホテルの泊まり勤務があつて連絡が遅れたといっていた。一人暮らしの大変さに加えて絵の

管理もあつて、つい投げやりになっているのだろう。でもいつかは、絵を見る者の感慨をちゃんと受けとめてくれる日が来ないとも限らない。あの家族は苦労の連続だったのかもしれないが、未之助の絵には希望が満ちている。苦しみも哀しみも打ち負かすようなエネルギーがある。

自分にしたって、未之助の絵に出会って何かが変わった。有志が集まって美術館をという運動が起きるもの当然だ。資金の集まり方はまだまだ予定額にはほど遠いといっていたが、画集の出版から一年しかたっていないのだから無理もない。寅一さんは諦め顔としても、有志は定期的に集まつて知恵を絞つていてとか。

関は「未之助美術館を創ろう」というチラシ

をバッグから取り出し、何度も裏にし表にして眺める。

あの絵の数々は、どんな人にとっても懐かしいのではないだろうか。違う地方の出身者でも、若い人びとでも、日本中の人にとって、未之助の絵はふるさとの肖像たりえるのではないだろうか。

小川未之助美術館が出来たら、喜ぶのはあの町の人だけではない。観光に訪れた人びとだって、鑑賞して充実した時間を過ごすだろう。

「冬の停車場」のマントの青年は、多くの日本人に愛されるだろうし、雪国の風景に惹かれるのは、暖かい地方の人だって同じだろう。あの絵の世界は日本の原風景だ。

ひとつの町だけで資金を集めても、限界がある。首都圏でも訴えた方がいい。その方面のこととで、自分ができることがあるかもしれない。今日の日は暮れていくけれど、明日になれば、明るい元気のよい陽射しがよみがえるだろう。そう信じていよう。

関はチラシを持ったまま、安心したように目を閉じた。

ひときの町だけで資金を集めても、限界がある。首都圏でも訴えた方がいい。その方面のこととで、自分ができることがあるかもしれない。あの町の出身者に支持を訴えるとか。多くの人びとの気持ちが集まつたら、美術館創設の可能性が見えてくる。

関は、すっかり勇む気持ちになつていて。自分はもう教壇には立つまいと思つていたが、やる気さえあればまだ働ける。働いて資金を送るということ以外にも、美術館創設のために、

自分は何かやれるだろう。

美術館ができたら、未之助の絵がずらりと壁に掛けられるだろう。その真ん中に立つたら、自分は若い頃にもどつて、父や母もそこにいて、走り回った町や学校の校庭に帰れるだろう。

自分には、日本中の人にびとに誇れるふるさとがあったのだ。

窓の外では、低い山々が黒くつづいている。

その向こうに今日の終わりの弱々しい日が沈もうとしている。山のふもとに連なる水田に、残照が白く映っている。

今日の日は暮れていくけれど、明日になれば、明るい元気のよい陽射しがよみがえるだろう。そう信じていよう。

関はチラシを持ったまま、安心したように目を閉じた。

## 入選 縁側のナツさん

大館市 M O K A

ナツさんがそう言つて立ちあがろうとするのを、山内さんは止めました。

「いひつていいって、ナツさん。やってやるから。ついでにお茶つこも飲ませてもらうからさ」

「んだが？ 悪いなあ、したら頼むな。その代わりいっぺ飲んでけれ」

「ナツさん、いだが？」  
と大きな声で玄関を開けたのは、向かいの家の山内さんでした。

「こっちだあ。縁側さいるよ」

ナツさんの声が縁側の方から聞こえてきましたので、山内さんは開けかけた玄関の戸を閉め、庭づたいに縁側に向かいました。

縁側では暖かい日差しを受けて、フローリングの板が明るい色に染まっていました。その一角でナツさんがお茶を飲んでいます。

「なした？ 山内さん」

「ワラビ採ってきてゆがいたから、ナツさん食べるかなと思って」

「ワラビは大好きだあ。初物だよ。いつも助かるなあ」  
とナツさんの目が細くなりました。山内さんの両手からこぼれそうなほど、ワラビが見えました。

「どれ、水さ浸けておくが」

ちょっと嬉しそうな顔をしました。  
「このお茶は長年飲んでいるけど、一番美味しい気がするものなあ」

結婚当初は、とにかく安いお茶を買ってきて飲んでいました。そうでもしないと少ない給料をうまく切り盛りできなかったからです。でも、

唯一の贅沢としてお茶を選ぶようになっていました。ナツさんは憲一さんと一緒にお茶を飲む時間がとても好きになりました。

憲一さんというのはナツさんの旦那さんの名前です。朝、憲一さんが起きてくると、食事よりも何よりもまず一杯。お茶を片手に新聞に目を通し終えた頃、ふたりは一緒にB Sに入る朝の連続ドラマを見ながら朝食を食べます。食べながら、ナツさんがドラマの内容に一喜一憂する姿を憲一さんが黙つて見てています。これが朝の日課でした。

ナツさんは隣に置いてあつた厚手の座布団に座るよう山内さんに勧めましたが、山内さんはそれを断つてフローリングに直に座り、縁側から足を落としました。その様子にナツさんはそと微笑みました。山内さんの気持ちがわかつたからです。

山内さんが足を縁側の縁からぶらぶらさせて

「由美ちゃんは新しい仕事うまくいってるのが？」

と聞きました。由美ちゃんといふのはナツさん

の長女です。自分の娘ながら、五十になつても

「ちゃん」付けで呼ばれるというのも、なんだ

かいいものだなとナツさんは思いました。

由美は最近、熟年離婚をして戻ってきていま  
した。

「子供たちも手元を離れ、それぞれ結婚もした  
ので、いい頃あいだと思つたのよ」

とナツさんに話していました。ナツさんは内心

「離婚するのにいい頃合いもなんもねえべ」と

思いましたが、そっとしていました。戻つてき

てから働き口を探していましたが、なかなか  
見つかりませんでした。でも最近、パートで土

日も働くことができるというのが良かつたのか、  
新規にオープンしたコンビニエンスストアで働

いているのです。

由美は、専業主婦業にどっぷり浸かって生き  
てきました。店長から細かいマニュアルを指導  
されても、いざ実際の営業時間となると戸惑う  
ことばかりでした。オープンして一週間はとて  
もじやないけど（ナツさんが見てられないな  
と思うほど）、由美はげそっとした顔で帰宅し

ていました。顔色もどんよりして覇気がなく、  
帰宅した途端に布団に潜り込むといった日々が

続きました。ナツさんは、内心ハラハラしながら見つけていたが、じっと我慢して見守っていました。余計な口出しはすまいと思っていたの

です。昔からナツさんは我慢強いところがあつたのです。離婚して戻つてくるというときも、何も言わずに受け入れました。由美にとって、それはなんともありがたい行動だったことでしょ

う。

しばらくして、だんだん仕事にも慣れてきた  
ようです。朝食に出されたナツさん名物目玉焼きを見て

「わあ、目玉焼きだあ。母さんの目玉焼き美味  
しいんだよね。わたしが焼いてもこんな風にぶ  
るんと美味しそうにならないのよ」

と明るい声で、たつた今気が付いたように由美  
が言いました。その声と顔を見て、ナツさんは  
もう大丈夫だなと思いました。この一週間の間に何度か食卓に上った目玉焼きです。それなりに、今朝になって気が付いたのです。それだけ気持ちは余裕がなかつたのだなとナツさんは思いました。

食べないとな」

「母さん、もう若者じゃないんだからね。いつ  
ぱい食べたらでぶでぶに太つてしまふよ」

「何言つてる、お前はまだまだいけるよ」

ナツさんの「いけるよ」に、由美が噴き出し

そうになりました。

「母さん！ いくら娘だからって、今何歳だと  
思つてるのよ。もう下り坂一直線なんだからね」

「由美、それは違うべ。若くねって思えば若く  
ねし、まだまだ若いって思えばちゃんと若いも  
んだ。気の持ちようだ」

ときどきナツさんが言う言葉には、納得させ  
られるものがあります。このときの由美もそう

でした。離婚を経験して、なんとなく自分に自信が持てなくなつてきていました。働き口だつてすぐに見つかるものだとばかり思い込んで意  
気込んでいたのが、鼻っ柱を折られるようなこ  
とばかりが続いて、自分は何もできない人間だつたんだと思い知らされた気がしてました。

ここに来て、ようやく慣れない仕事にも少しずつではありましたが、手ごたえを感じているところでした。ナツさんの「いけるよ」という言葉がなんだか嬉しくて、でも嬉しいけど素直に喜べなくて、といった感じの受け答えになつ

ていたことに、ナツさんもちゃんと気づいていました。

「自分のことをここでお終いだって決めたら、そこが終点なんだよ。自分の終点はずっと先にあると思っていた方がやる気が出るべ?」

ナツさんが笑いながらご飯の上に目玉焼きを乗せ、黄身を箸でくずしてお醤油をたらりとかけるのを、由美は黙って見ていました。

「わたしはいつもこの母に背中を押されて生きているなあ」と思いながら……。

今朝の由美との目玉焼き問答を思い出しながら、ナツさんは山内さんの問いかけに答えました。

「なんとか頑張ってるみたいだよ。若い者に交じって働くのも由美にとってはいいことだべ」「そうかあ、由美ちゃんコンビニ店員か。昔はコンビニもなかつたしな。女の人気が働ける場所なんてあまりなかったよな」

「なんだ。働くたって、家で内職するぐらいが関の山だったべ」

「そういうえばナツさん、内職も上手かったよな。よく配達の人が新人を連れてきてナツさんに教えてもらえて言っていたもの」

「ああ、あの頃はいつも何人か家に来て内職し

たもんだ。山内さんも少しやつたべ?」「わたしは仕事は早いばって、雑だから返される数が多くてな」

「今は女性が働く場所も増えた気がするよな。外で働くことが当たり前になってきたしな。孫も都会でぱりぱり働いているみたいだ」

「あ、由美ちゃんの娘さんか。子供生まれたって言ってたんでねが? はあ? もう働いているってが?」

「なんだ。五ヶ月でもう預けて働いているんだと。なんでも四月入園させないと中途半端なんだと。しばらく現場から離れれば仕事があるかどうかわからないからって、結局預けて、働く時間を減らしてもらうことにしてたらしいよ」

「昔は家で子育てするのが当たり前だったけど、今は働きながら子育てするっていうのが普通になってるもんなあ」

「都会は夫婦だけで暮らすのが多いから、預けて子育てるしかねえべな」

「仕事を持っていると、子育てと両立させていくのが一番難しいな」

「テレビの二時間ドラマになりそうだな」とナツさんが笑って言いました。笑いながら、

憲一さんが言っていた言葉を思い出していました。

「母さんはいつも『ドラマの女』だな」ナツさんがあまりにもテレビ通で、ドラマに

りできるけどな。由美なんか、孫に何かあっても、すぐ飛んでいって世話できるって距離じゃないものな」

「なんだな。そばにいればたいした良かったのに。んだばって、みんなしてこっちさ来ても働く場所がなければ来いつても言えねしな」

ナツさんと山内さんは、話題がちよつと残念などころに落ちたのに気が付き、軽くため息をつきました。

目の前のモクレンにサッと小鳥が飛んできてキヨロキヨロしましたが、ナツさんたちに気づくと一目散に飛んでいきました。

「モズって知ってるべ? 可哀想な鳥だよな」「なんでだ?」

「カツコウが巣に卵を置いてモズの卵を落として自分の卵を育てさせるんだけど」

「んにゃそんたらひでえことするってが。人間だとすれば恐ろしいもんだな」

「テレビの二時間ドラマになりそうだな」とナツさんが笑って言いました。笑いながら、

憲一さんが言っていた言葉を思い出していました。

「母さんはいつも『ドラマの女』だな」

夢中の様子を見た憲一さんが炬燵に入っていたときには笑って言つた言葉でした。そのときからナツさんは「ドラマの女」と、ときどき呼ばれるようになつてました。

しかもニュースで殺人事件が報道されたりすると

「父さん父さん！　この人（と、テレビでインタビューされている近所の人だというその人を指差し）知らねふりして犯人だつたりして……」と、興奮した顔で話しているのを憲一さんが目を細めて見ているといつたことが多かったのでした。ドラマの見すぎだといえばそれまでなのですがね。

そんな他愛ない日常のことが時折ナツさんの脳裏に浮かんできます。そのどこでも憲一さんは笑顔のままでした。

「この間うちの父さんの服、処分したよ」

「なんだってが。捨てたのが？」

「父さんの服は案外綺麗なものが多くてな。その中でも綺麗なものを選んで、甥っ子にあげたよ」

「あんたの父さんは瘦せていてスタイル良かつたものな。男前だし」

そう言われてナツさんはまんざらでもない顔

をして、ふふふと小さい声を立てました。

「由美がな、中学生の頃バス停に立つていたら、やつてきたバスの一番前にうちの父さんが座つていたんだと。そしたら一緒にいた同級生の子が「由美ちゃん、あの人外国人みたいだ、鼻高くて」と指さすから見たら、それが父さんだつたって教えてくれたことがあつたよ」

「由美ちゃん喜んだだろ？」

「いや、なんだか恥ずかしくて父さんだつて言えなかつたってさ」

「それだけはあ、由美ちゃんもお年頃だったんだべなあ」

山内さんの笑い声が明るい空に響いていきました。

「ナツさん、ナツさん！　どした？」

縁側の網戸をガタガタさせると、網戸が開いて中のガラス戸も開くことに気が付きました。

急いで中に上がり、ナツさんのそばに行くとナツさんの顔からひどい汗が出ていました。

そのまま救急外来に駆け込み、受診させたところ、食あたりだが、身体が弱つていて抵抗力が衰えていたので、症状が重かったということでした。憲一さんが亡くなつてから気を張つて過ごしてきたナツさんですが、どこかに無理が

ありました。すぐ近くにいたら色々できたであろうことも、遠くにいたから何もできなかつたという後悔の気持ちが常に山内さんの中にはありました。それがあつたから、ナツさんのことも気になつたのでしょうか。

ナツさんが急に具合が悪くなつた時も、病院に連れてつてくれたのは山内さんでした。朝からナツさんが外に出てこない日がありました。なんだか胸騒ぎがして、山内さんは縁側から中を覗きました。目を凝らしてみると、点けっぱなしのテレビの前でナツさんが前かがみになつてうなつています。

しました。あのときのことを思い出すと、山内

さんがいてくれて本当に助かったなと、いつも思い出すのでした。他人なのに自分のことをこんなに心配してくれる人がいるということ、それがナツさんにとってどれだけ心強いことでしょう。

ふいに冷たい風が通り抜け、山内さんの伸ばした足に触ってきました。

「由美ちゃんもこれから大変だと思うけど、ナツさんがいるから大丈夫だべ。あんだけの父さんみたいないい男の選び方をちゃんと教えてやれな」

「うちの父さんよりいい男はいねよ。テレビの

リモコン取って渡したり、ちょこっとしたことしてあげても〈ありがとう〉って言ってくれるつけもの。男の人でみんなにありがとうって素直に言える人はいねと思うよ」

「んにゃ、ナツさんだばはあ。わたしのだんなよりいいってが？」

「当たり前だべ。自分のおやじが一番でねくてどうする」

「それもそうだな。へば、わたしのだんなもわたしには最高だつてが！」

「そうだよ。山内さんのだんなさんぐらい朝か

ら晩まで動きまわって働いてける人もいねべ。

あんたもまたいいだんなさん見つけたもんだよ。ほんと、いつも感心して見てらんだよ」

山内さんが照れくさそうに鼻の頭をこすりました。

「それにしても、あんだけの父さんはほんとに人っこよさそうな笑い顔だったよな」

そう言われると、懐かしい憲一さんの笑顔がすぐ目の前にあるような気がしてつい座布団を見てしましました。山内さんが

「ナツさん、今年は高校野球の応援するべ。あんだけの父さんの替わりに。テレビの前で大声立てて応援するべ」

と話しかけると、我に返ったナツさんが

「なんだ、父さんの分も応援しねばな。高校野球が入るときは、父さん専用のテレビだつたものな。毎朝新聞で野球の記事をチェックして〈今日の対戦はここが絶対勝つぞ〉と言つてな。いつもそれが地元に近い高校の名前で。地元びいきっていうか、だんだん地元に近い高校が残らなくなっていくと、○○は俺が若い頃住んでいたところだから勝つ、とか、仕事で行ったことがあるからあそこの高校はいいはずだと

残るって言つてたもんだよ」

「あんだけの父さんらしい話だなあ。誰も野球部に入つていなかつたべ？」

「なんだ。子供たち全然野球部と関係なかつたけど、練習しょっちゅう見に行つたりしたもんだ。あの当時だばまだいいばつて、今だつきや下手すれば不審者に見られるかもしけねがつた

な」

「今はいろいろあるがらな。うつかりよその子供のそばに寄つたりできねつて言う人もいるよ」

「昔は考えられなかつたなあ。そんな考えられないことがこの頃は多すぎてな。年を取るものを考えものだなつて思うときがあるよ」

「ありやあ、ナツさんでもそう思うか？ ナツさんみたいな人が長生きしてくれなきや、世の中も終わりだよ。若い人にあれこれ教えてくれなきや」

「わたしなんかなんも教えることなんてねえよ。今はネットとかで何でも分かるつていうんしゃ」

「はあ？ ナツさんからネットつて言葉が出るとは思わなかつたな。そうでもねうしいよ。ネットに書いてあることが全部合つてるわけじやねつてよ」

「ほお、なんだつてが……あ！」

「なした?」

「ネットでねけど、この間珍しく電話かかってきてな」

「誰から?」

「それが〈憲一だけ〉って」

「はあ!」

「間違い電話だべなと思つて切ろうとしたら、〈母さん、憲一だけど事故起こしてしまつて……〉って言つんだよ。何バカなこと言つてこの若者が、つて思つたけど、なんだか面白くて、そのまましゃべるだけしゃべらせておいたんだ」

「そしたら?」

「最後にお金を振り込んでくれつて言うから、〈憲一さん、よくあの世から戻つてきてくれたしな。しかも息子になつて戻つてきたってが〉つて言つたんだ。その途端、電話の向こうの声が止まつてヅツッ! もう腹抱えて笑つたよ」「流行りのオレオレ詐欺でねが! よく怖くねがつたな」

「なあ~に、電話だもの。目の前さいるわけですね。それにしてもどうせ電話するならちゃんと調べてから電話しろつて。なあ、んだべ」「なんだ。それにしても詐欺にまんまとはまつ

てしまふ年寄りが結構いるらしいな。ナツさん

とこに何かあつたら、すぐわたしさ教えてけれよ。由美ちゃんもいるけどさ」

「ああ、由美より山内さんに話した方が安心だな」

とコロコロと笑つて言つた。

そうこうしているうちにお昼が近付きましたので、山内さんはお暇をし、お昼の支度に向かいました。ふと、縁側の方を振り返ると、ナツさんがあの厚手の座布団の方を向いて何やら笑つていました。

それから数日後、由美が

「今日の夜、友だちと会つてくるから。数年ぶりだよ。昔通つていた店で待ち合わせなんだ」と言いました。こっちに来てからずっと家と仕事を先だけの往復だった由美です。たまには羽を伸ばしてほしいと思つていましたので

「久しぶりだべ。ゆつくりしてくるといいよ」と嬉しそうな顔で送りだしました。

由美が友だちと会つてきた次の日。

「母さん、昨日誰に会つたと思う?」「誰つて友だちだろ?」

「うん、友だちにも会つたんだけどね。その店で父さんのことを知つてる人に会つたんだよ」

「えっ、そんな人がいたのか?」

「父さん、野球が好きで毎日つていうほど、わたくしが中学の時にグランドに通つていたでしょ?」

「ああそだよ。あの頃、近所の山田スーパーの息子がいいピッチャーで、そこのおやじさん

と二人でよく練習見に行つっていたものだよ」

「そうそう! その山田スーパーの息子さんが来ていたのよ。休暇でたまたま帰省していたんだって」

「ほお~、なんだってが。その子のことなら母さんもよく覚えてるよ」

「その人と少し話したんだけどね。自分たちの父さんでもない人が、毎日練習を見に来てくれていることがすごく嬉しくて、励みになつたつて言つてくれたんだよ」

「……へえ、そうなのかな?」

ナツさんは山内さんと話したことを見出しました。練習を見に来る人をうさんくさく思つていなかつたのかなと、ちょっと不安に思つて

いたのです。それがそつではなく、憲一さんの応援が素直に球児の心に届いていたというのです。

「父さん、お前たちが野球部に入つていなくても山田スーパーのおじさんと一緒になつて応援

していたものなあ。そうか、わかつてくれていたのか……」

ナツさんは仮壇の方を見て

〈父さん、良かったな。正くん、今じゃ立派な社長さんだつて。応援して良かったなあ」と、心の中で話しかけていました。

それからしばらくして、ナツさんが居間にいると、ピンポンと玄関のチャイムが鳴りました。滅多にならないチャイムです。山内さんなら声をかけて入ってきます。由美は仕事に行っています。よいしょっと重い腰を上げよたよたと玄関に行きました。

グレーの作業着を着た男が立っていて、

「今、奥さんの家を見たんですけどね。大変ですよ。お宅の床下、シロアリにやられてますよ。早く駆除しなくてはこの家も危ないことになります」

と言います。ナツさんが

「あんた、人の家の床下勝手に覗いてみたつてが。それって不法侵入ってことになるんでねが?」  
と言ふと、男は一瞬たじろぎましたが、  
「いやいや、専門家から見れば外から見てもこの家は白アリにやられているって予想がつくんで

ですよ」

「へえ、そりやたいしたもんだな」

そう言われて、男はちょっと顔を緩めました。

そして

「奥さん、今やっておかないと後で後悔しますよ。今なら格安で駆除できますから」

と言いました。ナツさんはちょっと考える素振りを見せて

「したばつてなあ。昨日、市の職員がやってきて、今週の土曜にここいら一帯シロアリの検査をするって言つてたしなあ」

慌てたようにして男が

「今やつておいた方が安心ですよ」

と言います。そこへ山内さんがやつてきました。

「ナツさん、どした?」

「ああ、今この人がシロアリをやつつけてやるつて言つてるんだ」

「したつてシロアリいるつてが?」

「いるんだと」

「へえ……」

体の大きな山内さんにジロジロと上から下まで見られ、男は少しおどおどとした態度を取りました。それを見ていたナツさんは少し微笑んで

「兄さん、役所の人が来るっていうから、悪い

ばつて私のところはいいから。あんたも仕事があるべ。こんたどこに長居してねで、他あたつた方がいいんではが? 役所で駆除の相談もしてくれるって言つてるしな」

と言って、山内さんに

「さつ話は終わった。山内さん、お茶っこ飲むべ」

と声をかけ、さっさと家中に入つていきました。山内さんは男を玄関から出すとピシャヤッと戸を閉め、ナツさんの後を追いました。

居間に入つてきた山内さんが

「ナツさん、役所で見に来るつていつ分かっただ? いつの間に回覧板回つてきていたんだべ……知らなかつたな」

と言いました。ナツさんはクスッと笑いながら「なんも。そんたらごど、一つもねえよ」と言いました。

「はあ、ナツさんだばたいしたもんだ。嘘も方便つてが」

ナツさんの笑い声が高く響きました。山内さんは（ナツさんなら大丈夫だな。かえつて由美ちゃんの方が心配だわ）と思って、苦笑いしました。ナツさんは、山内さんに新しいお茶を入れて勧めました。ゴクッと一口飲むと

「はあ、やっぱりナツさんが入れてくれるお

茶は最高だわ。うちで飲むのはこうはいかねものなあ」

ごくごく美味しそうにあつという間に飲み干してしまいました。

「ああ、そんたに急いで飲まなくとも……仕方ね、二杯目入れてやるか」

ちょっと嬉しそうな、あきれたようなそんな

顔でナツさんが山内さんを見ました。山内さんが恥ずかしそうな顔で見ています。縁側の網戸

から、涼しい風が入ってきました。その風を受けながら、山内さんが  
「ナツさん、もう一年たつてしまつたんだなあ。早いもんだな」

と言いました。ナツさんは相槌を打ちながら、ごくっとお茶を飲みました。少し生ぬるくなつていたお茶が、優しく喉を伝わって体を巡つていくような気がしました。

（憲一さんの大好きだったお茶だねえ）

「あのときは、まだうちのシロも生きていたんだよな。シロはナツさんの家の犬みたいにして、いつもナツさんの玄関で留守番していたもんだった……」

「なんだな。あんだえの犬だのにな。うちの父

さんも、帰ってきた時に家の前でシロが待つていてくれると、とっても喜んだもんだよ。よく縁側の方にシロがやってくると、父さんが、ほら！ 母さんの友だちが来てるよ！ ってわたしを呼んだもんだった……」

ナツさんの目が遠くを見ました。山内さんも庭のモクレンの枝先を通り過ぎ、青い空を見ていました。

（もう一年も経つたんだね……）

順調にいっていれば、金婚式にだつて出席で起きるはずでした。ナツさんは、憲一さんには話していませんでしたが、地元新聞に毎年掲載される金婚式の様子を見るたびに、いつかは自分たちもこの場所にいることができたらなあと思つていました。そんなナツさんの夢も、今は消えていました。

憲一さんが帰らぬ人となつて入院先から戻つてきた日、シロは一晩中玄関に横になつてキューんと泣いていたのでした。それから三ヶ月後、

後を追つようにシロが亡くなりました。ナツさんは、シロは自分の代わりに憲一さんのそばに逝つてくれたのだと思っています。お茶をごちそうになつた山内さんが

（それじゃ父さんが待つてるから）

と腰をあげました。

厚手の座布団の上に一筋の光がモクレンの葉

の間から差し込んでいます。そこだけ誰かがいるかのようによくスポットライトを当てている……そんな風にも見えたのでした。ナツさんのこれからが、決して悲しいものではないと山内さんには思えました。大丈夫、ナツさんなら大丈夫だ。山内さんは胸の中につぶやきを落として、

向かいの家の中に入つていきました。  
庭は緑で溢れています。この頃になるとナツさんが植えた色々な植木が、青々とした姿を見せてくれます。ナツさんは、緑色つてほんとにたくさんの色があるんだなといつも思います。

絵具の色とは違う微妙な色加減、それが光に当たるとまた変化してみえる、その美しさを縁側に座つて味わっているのが、ナツさんにとって最高のひとときなのです。それは憲一さんと一緒に見ていた時間を思い出させるものでもありました。

どちらかというと寡黙な憲一さんでしたが、いつもニコニコしながらナツさんのおしゃべりに付き合つてくれていました。こうして縁側に二人で座り、お茶を飲みながらナツさんがテレビの話やら近所の話やら子供たちの話やらを楽

しそうに語るのを、時に頷きながら聞いている、

それが一日のうちの最高にしあわせな時間だったなど、ナツさんはいつも思うのでした。

隣に置いた厚手の座布団、その上に座っています。はずの人を思いながら、じっくりとお茶を味わっていました。憲一さんが亡くなる前には、体の弱い自分が先に逝くだろうといつも思っていました。まさか父さんが先に逝くなんて……なんで自分じゃなかったの？ といった思いがしばらくありました。でも、今はこう思っています。

〈父さんの世話をわたしがやってきた。着る物も食事も。父さんはわたしが勧めるままに喜んでくれた。でもわたくしがいなくなったら？ 父さんは自分のことをやっていけただろうか。お日おでんばかり食べてもいられないだろう。父さんの方が先に逝って良かったのかも知れない。ひとり残されても何をどうやつたらいいのかわからなくて途方にくれてしまっていたに違ないい〉

（憲一さんという他人と寄り添って生きてきた時間は、振り返れば親と過ごした時間よりも長いなあ。きっとこれがわたしのご縁というもの、

そのご縁が今も続いているんだなあ）と。

由美が前に一度

「母さん、父さん以外の人と付き合ったことあるの？」

と聞いたことがあります。そのときナツさんは、遠い昔、憲一さんと見合いする前に、自分と一緒になつてくれと言った人がいたことを思い出しました。その人は仕事で地方に来ていましたから、都会に戻ることになつていました。結婚したら生まれ故郷から出て都会暮らしです。ナツさんは、田舎から出て、ずっと離れた都會に住むことは、とても想像がつきませんでしたし、その人に付いていこうと思えるほどの気持ちを抱いていたわけでもありませんでした。あの人に付いて行つたら今頃はどんな生活をしていただろうと、由美の質問にふとを考え巡らしましたが、憲一さんと見合いし、こうして由美たちを育てたことに満足していました。

憲一さんは、今から二十数年ほど前、定年間

近に重い病気が発覚し、入院しました。手術をしましたが、ナツさんは先生に

「うちの父さんは病名を告げないでくれ」と頼みました。病気に対し人一倍神経質なところのある憲一さんは、病名を告げると病状が悪化してしまうと思えたからです。憲一さんは、幼い頃に両親を病氣であいついで亡くしていました。親の愛情を知らずに育ってきたのです。

病氣をするということは、常に死と隣り合わせだという思いがあるよう見えました。だから、先生には病名を隠してほしいと請わずにいられなかったのです。昔のことですから、こういふお願いもできたのです。今では本人に告知するのは当たり前になっていますからね。そのこ

す。そんなことを思い出しながら

「いや、なあんもねがつたよ」

と笑って答えました。由美が

「なんと！ 天然記念物みたいなもんだな！」

と嬉しそうに笑っていた姿が目に浮かびました。なんだかんだ言つて由美にしてみれば、両親が両想いで暮らしていたと思えることが嬉しいのでしょう。このときナツさんは、やっぱり憲一さんが一番だと思っていました。

とを思うと、ナツさんはいつも憲一さんの手術が昔のことで良かつたと思うのでした。

大変な手術でした。憲一さんは胃潰瘍だと教えていましたが、実際は食道がんでした。食道と胃の一部を切除するという手術でしたが、手術は成功し、憲一さんは全く胃潰瘍を疑つていませんでした。憲一さんの性格が素直で良かつたなど、振り返るとナツさんはいつも思います。疑うということがなく、言われたことをそのまま受け止めてしまうところがあるのです。しか

もお医者様の言うことには、全幅の信頼を寄せているのでした。そのお医者様が手術は大成功で後はしっかり養生すれば大丈夫だと、太鼓判を押してくれたのです。だから、退院後の通院も一度も欠かしたことはありませんでした。よ

く、容体が良くなつてもう行かなくていいと自己判断で通院を止める人もいるようですが、憲一さんにはそんなことは絶対考えられないことでした。毎回「大丈夫」という言葉をいたぐと、帰ってきてからナツさんに

「先生に今回も大丈夫だって言われたよ。俺もまだまだバンバンたるものだな」と嬉しそうに話すのが常でした。

そういう素直で純粋なところがある憲一さん

を、ナツさんは、結婚してからずっとあれこれとフォローしてきたのでした。

ナツさんにとって居心地の良い家庭を作るとということは、自分への至上命令でした。見合いで一度しか会ったことのない人との結婚なんて周りにはたくさんあった時代です。父親からは、憲一さんのためにお前が家庭を守らなくてはならないのだぞと言い聞かされて嫁いできたのです。

憲一さんの給料はそんなに多いわけでもなく、むしろ少ない方だったでしょう。長屋暮らしをしなければなりませんでした。ナツさんは農家の娘で、兄弟も多く家の手伝いをしてきましたので、家事をするのは苦ではありませんでした。長屋暮らしは何家族か一緒でしたが、当時は専業主婦が多く、長屋の玄関先に備え付けられた大きな水場に洗い桶や、たらいや洗濯板を持ちこんで、長屋の奥さんたちはそれぞれの作業をしました。

井戸端会議という言葉がその態を表すように、

奥さんたちのかしましい話題は夫や子供のことだけに限らず、地域限定の話題だったり、流行りの映画やラジオの連続小説の話だったりしました。晴れた日は奥さんたちの賑やかな声が、

高い空に吸い込まれていくような気がしました。幼子たちはそばでてんでに遊びますし、道路を通る車も滅多になく、今ほどの危険はどこにもないといった長閑な空気が始終溢れている、そんな時代でもありました。

そんな中で、ナツさんはいつも長屋の奥さんたちの話の聞き役でした。まあ相談される側といつた方がいいでしょうか。同じ年頃の中で、どこか落ち着いた印象を与えるナツさんには皆、年上のようないい信頼感を抱いていたようでした。そんな奥さんたちの中には、旦那さんが鉱山勤めの方もおり、いわゆる転勤族で、都会育ちの奥さんも入っていましたが、ナツさんはその方から、料理を教えてもらったり、都会の話を聞くのがとても好きでした。田舎でずっと過ごしてきたナツさんにとって都会は未知の場所であり、憧れめいたものがありました。でもそれは単なる憧れで、そこに住んでみたいという思いは一つもなかつたのです。憲一さんとの家庭を大事にすることが一番でした。

ナツさんが昔を振り返るときにいつも思うことがありました。それは、昔はどうしてあんなに穏やかに過ごせたのだろうということでした。食いつめたりしても、それさえ楽しめました。

どちらかというと憲一さんも高価な物を買うのを嫌う方でしたので、いつも電化製品を購入するのは、近所でも最後の方でした。出始めの頃に買って自慢をしたがる人もいましたが、憲一さんは

「後になった方が、進化したものを安く買えるものだ」

という持論を言うのでした。ナツさんは子供た

ちが欲しがっているテレビを本当は買ったかったのですが、憲一さんに持論を出されると黙ってしまいました。その頃は、長屋でも月賦で物を購入するという人が多くいて、ナツさんにも勧めるのですが、ナツさんは月賦で買うということが苦手でした。どうせならお金を貯めて、現金で買うようにしたかったのです。あれこれと物を月賦で買い、その支払いに四苦八苦し、果ては長屋の住民にお金を借りに来るといった姿を見ていると、自分の考えが間違っていないと思えるのでした。

そんな一人でしたから、家財道具も電化製品も少なく、簡素な住まいでした。

ナツさんは料理も上手でしたが、裁縫も上手でした。結婚前に裁縫教室に通っていたのが、役に立っていました。年老いてからも若い頃の

服をリメイクしてお腹周りを隠したり、布バッグを作ったりするのはお手の物です。ナツさんは色々なことが出来ましたが、裁縫をしている時が、自分には一番合っていると思いました。憲一さんは瘦せていましたので、既製品を少し手直しなければなりませんでしたが、そういうこともお手の物でした。そんなナツさんを憲一さんはいつも

「母さんはすごいな。これも直してくれたのか?」とびっくりしたように目をくりくりさせて言うのでした。それを見てナツさんは気恥かしそうに

「なあに、こんたことなんでもね。裁縫習ってればだれでもできることだあ」とわざと言った。

そういうえば父さんは、わたしの悪口を言ったことがあったかな。結婚してから喧嘩らしい喧嘩をしてこなかつたように思います。思い出の中で憲一さんに何かを強く言われたことがあった記憶つて……そうだ、一つだけありました……。あれは、憲一さんと一緒にナツさんの田舎に行つたときでした。その当時、兄が結婚し実家を継いでいましたが、田植えや稲刈り時季には手伝いに行つたりしていました。憲一さんがナ

ツさんと子供たちを送つて、何日か後にまた迎えに行く手はずになつていきました。迎えに行つた帰り路のことでした。後ろで子供たちはすっかり寝込んでいました。ナツさんは珍しく興奮しながら憲一さんに話していました。

「雪子の母さんだば、なしてああなんだべが」雪子の母さんというのは、兄嫁のことです。

兄嫁とはそんなに年の差がありませんでした。

ナツさんは、兄嫁が手伝いにいったナツさんに、みんなの前では食事の支度とか家の手伝いを何もさせないと。それは、自分がこんなに一生懸命働いているのに、ナツさんは何も手伝わないということを他の人たちに暗に見せつけているのだと、ナツさんは言うのでした。それを聞いた憲一さんが

「母さん、人のことをそんな風に思うもんじゃない。人の悪口を言えば必ず自分に返つてくる。悪口は言うだけ損なものだ。だから母さんは絶対言うな。子供の前では絶対言うなよ。物事は良いほうに受け止めるもんだ」

とそれまで見せたことのないほどの強い口調で言ったのでした。それを聞いてナツさんはハッとした。なんだかそれまで興奮しながら話していた自分が、恥ずかしく思いました。そし

てそっと、運転している憲一さんの横顔を見て、改めてこの人の頬もしさを発見したような気がしました。普段は物静かでいつもにこにこしてゐる穏やかな人という印象の憲一さんのどこにこんな声が潜んでいたのでしょうか。そんなことを知つたのもまたナツさんにとっては嬉しいものがあつたのです。この人はわたしのがいなきや何もできない、そんな驕った考え方を持っていた自分が恥ずかしくなりました。そして、こうも思いました。

〈憲一さんは、両親を早く亡くして色々人に言えない苦労をしてきたのだろう。でも人の悪口を言うまいと決めて生きてきたから、今の憲一さんがあるんだな〉

そして、長屋住まいから一軒家に住むようになつていきました。憲一さんとナツさんは二人の子供がいましたが、二人とも家を出てそれぞれの生活をするようになると、ナツさんは内職を始めました。近所には内職をしている主婦の方が結構いましたが、その中でもナツさんは覚えが早く綺麗な出来でしたので、よく内職を始めたばかりの人が習いにやってきました。思い出してみるとナツさんの周りにはいつも人が集まつてきました。新婚当初の長屋で

も、一軒家に住むようになつてからも、ナツさんの近所に住む人たちとは自然とナツさんの所に足が向いているのでした。そこでは特別なことなど何もなかつたはずなのに、訪れた人々たちはどこかホッとする時間を過ごせたような気がするのでした。

そして、瘦せてひょろとした体格の憲一さんとぼちやつとして背の低いナツさんが、ふたりでゆっくり歩いている姿は、ひなたのようなんびりとしたぬくもりを見ている人に与えていたのでした。

そんな二人の仲の良さをいつも見ている山内さんはじめ近所の人たちは、憲一さんが亡くなつたと知り、一番にナツさんることを心配しました。あんなに二人一緒ではなくてはならなかつた二人です。これから一体ナツさんはどうなるのでしょうか。ナツさんが近所を歩いていると必ず誰かが声をかけてくれます。その度にナツさんは、ニコニコとありがたいことだと思いながら話をするのでした。自分のことをこうして気にかけてくれている人がいる、そのことがありがたいと思うのです。これも憲一さんがいてくれたおかげだ、あの優しい憲一さんがいたから皆わたしのことを心配してくれている、ほんとに

憲一さんで良かった……と何度も思うのでした。ナツさんは、憲一さんと過ごした日々を、この縁側でよく思い出します。今は由美がいてくれますが、それでも娘は娘です。憲一さんとは違います。呼んでも答えてくれない人ですが、こうして座布団をそばに置き、陽だまりの中でお茶をすすると、大好きな憲一さんが「やっぱり母さんがいってくれるお茶が一番美味しいなあ」と言う声が聞こえる気がするのです。

〈父さん、まだまだそちらには行きませんよ。由美のことも心配だしねえ。わたたちのことずっと見守っていてくださいよ〉

最後の一口を飲み干しながら、ナツさんは憲一さんに心中でお願いするのでした。

〈この縁側にて、木漏れ日がちろちろする景色を見ている、ご近所さんと触れ合う、そんな小さな何気ないひととき、そのどの時間も大事に生きていこう〉

ナツさんはそう思いながら、よっこいしょと腰をゆっくりあげ、台所に向かいました。後には、暖かな光を受けて、ふたつの座布団が寄り添うように、ふっくらと並んであります。

## 入選 びゅうついふる

由利本荘市 韶 月 生

し、自分が親の道具ではないと反発したが、今思えば、その言葉のおかげで反骨心が芽生え、志望校に入つてからこの一年間を何とか頑張つてこられたのだから、母には感謝しなくてはならない。

しかし近頃、何のため学校に行つているのか分からなくなる時があった。インターネットでは、同じような疑問を世界中の同年齢の人たちが投げかけているのを目にする。その答えは決まって、「思春期によくあることだ」というものだった。

そのやりとりを見ていると、私は病気じゃないんだなと安心するとともに嬉しくなった。孤独感も同時に癒されることで、学業を続けることができるとからだ。それでも、しばらくすると、またどうしようもない事実と向き合うことになるのだった。そのせいで、学校へ行くという行為が億劫になっていた。家から一步踏み出すまでが長いのだ。

私は、パンを呑み込み、準備を整えにかかる。ずっしりと重いバックパックを背負い、玄関を飛び出した。外には自分の心中とはかけ離れた、澄んだ空気が広がっていた。

母にそう言われることを思い出した。その当時は、『絶対』という私のすべてを知っているかのような言葉遣いに対して、苛立ちを覚えた遠くの稜線が赤く色付いてきた。山裾はまだ薄暗い。各家々の灯りがぼつぼつと点いていくのを見ていると、孤独感に苛まれず、安心できる。気晴らしに借りてきたDVDを深夜まで観ていたせいで瞼が重いのは気にかかるが、よれたパジャマを脱ぎ、ピシッとアイロンのかかった制服にそろそろ着替えないといけない時刻だ。始発電車が最寄り駅を出る時刻から逆算すると、遅いぐらいだった。

石油ストーブが私の足元で唸りを上げ、部屋を暖め続けていた。徐々に窓ガラスが曇り、自分の眼鏡と心をも曇らせていった。

「あんたがこの学校に入つても、絶対についていけないよ。ワンランク下がった方がいいんじゃない？」

母にそう言われることを思い出した。その当時は、『絶対』という私のすべてを知っているかのように元気になる自分の姿が、いつも不思議でならなかつた。要は気持ちの問題なのだ。

パンの焼ける香ばしい匂いが、ひっそりとした廊下に立ち込めていた。その匂いに引き摺られるようにリビングへと下りた。軋む床の音が心の中を揺さぶる。ここからは流れ作業で物事が進んだ。朝食はいつもパンだった。母の気分次第でサンドイッチになつたり食パンだけ置かれたりと様々だが、手取り早く済ませられるのが好む理由だった。

「おはよう。早く食べなさい」

母が急かした。ナイロン製のエプロンが擦れてシャカシャカと音を出していた。私は、パンを口にくわえたままテレビの電源を点けた。画面の左上に表示される時刻が、『急げ』と視覚に訴える。朝のニュースは、聴いているだけで現在の時刻が分かつてしまうので、ゆっくりしたい時にはただ不快だった。

私は、パンを呑み込み、準備を整えにかかる。ずっしりと重いバックパックを背負い、玄関を飛び出した。外には自分の心中とはかけ離れた、澄んだ空気が広がっていた。

乗り慣れた自転車を漕ぎ、駅へと急ぐ。住宅を通り過ぎるたびに、その家々の朝食の匂いがフッと鼻をかすめていった。

風が冷たくて目に染みる。悴む手を温めるよう袖口を引っ張る。もう桜が咲きそ�だが、朝晩の冷え込みはまだ衰え知らずだ。吐息は真っ白で、鍋蓋でも取ったかのように浮かび上がった。この時間は人に会わないので、挨拶をしなくて済むと弱気な自分がいた。それでも自然是1晩で疲れを解消し、生き生きと私に語りかけているようだった。水や風が名々の音を奏でていて、それが私を苦しめた。ただ単純に生きていればいいわけじゃないのに愚痴をこぼしたりが、彼らに対しても憧れを持っていることも事実だった。自然に近付けないことを嫌悪している自分とは、いまだにどう向き合つたらいいのか分からなかった。

私が『私』に気付いたとき、ひどく傷ついたものだった。しかし、それがどうにかなるものでもなく、地軸が逆転したって、タイムマシンで過去に遡つてみたって、同じ結果を受け入れしかねないのだ。自転車のギアを変えながら下校するように、うまく調整しながらこれまで歩んできた。いずれ自分に嘘のつけない日がやってくることを思い描きながら、今日の夕暮れを想像していた。

電車は意外と混雑していた。大きな荷物を抱えた老女や携帯電話を操作しているサラリーマン、もちろん学生もいたが、自分の知り合いがないことでホッとするのだった。

いつもと同じ座席で、昨日の続きの小説を読んだ。国語の教科書に載っていた『檜櫟』を読んで、文庫を買った。この時間は読書が定番となっているが、知り合いに会ってしまうと話しかけられて、本を読んでもいられなくなるのだった。

電車から見える風景は、時期によって移り変わり、ふと顔を上げたときにその時の季節が飛び込んでくるのが心地良かつた。そういう座席を私は選んだ。白と銀を混ぜたような色合いの内装に錆色の椅子、中吊り広告はさほどない中で、地元の名産品のポスターが至る所に貼ってあった。電車が揺れるリズムで本を読み進めることに慣れ、空想にふけつてしまふこともしばしばだった。

電車は終点の合団を告げた。プラットホームが学生で溢れている様子が目に入ると、現実に引き戻された感覚になつた。考えないようにしていることを思わず考えてしまうと、いつの間にかマイナス思考になつてしまう。今の私がそうだった。私は、乗客のほとんどが降りたこと

かし成長するにつれて、他の男の子と何かが違うことに気付き始めた。感覚的なものだろう。気付く前は笑つて返せたが、その日からは心から笑えない自分がいた。

絶望……この時はそんな感じだったと思う。

女の子が好きだという感情はまだ湧いていなかつたが、身体能力や声変わり、発達する身体に嫌悪感があつた。異性同士を意識する年齢になると、遊びたいのに遊べなくなり、したくもないサッカーや取つ組み合いをした。そんな時は、悔しさが荒波のように押し寄せてくるのを感じと我慢するしかなかつた。そういう類の感情は、外には出してはいけないと感じていて、私の中だけに収めておこうと決めたのだった。

その時から、まるで私の心中に、時限爆弾を置き去りにしたみたいな危なつかしい生活が始まつた。

物心がついた頃から、女の子とばかり遊んでいた。男の子が夢中になつて戦隊ものやおもちゃには興味が湧かなかつた。姉と妹に挟まれて育つたので、そのせいだと思っていた。し

を確認してドアに向かった。外は乗った時よりも明るくなつていて、日差しも強まつていた。

駅の構内は落ち着いていた。出遅れたような生ばかりが急ぎ足で、各々の所属する学校へと向かつていった。それはまるで、蜂の巣のように見えた。蜜を探しに外に出て、収穫して戻つてくる。私は、遅刻覚悟でゅつくりと羽ばたき出した。朝の街並みが輝いて見えることが、一時の潤いを持たせ、心に余裕を生んだ。見過ごしがちの現実にこそ、大事なものがあると私は信じていた。

学校に着いた頃には、開始のチャイムが鳴り始めていた。校門に立つ体育教師二人が、私を掴まえて注意してきた。

「だらだら歩くんじゃない。走りなさい」

「遅刻だぞ。お前、何年何組だ？ 担任に注意しておくからな」

寒い中ずっと立っていたから、少々苛立つているのだろうか。怒号のアーチをくぐり抜けながら私は何度も頭を下げ、「すみません」と謝りながら、その場から教室へと急いだ。弱々しく見えるのか、教師に標的にされることが多かつた。並立し、ドシッと構える桜の木々に見下ろ

されていると、急いでいるのが馬鹿らしく思えてならなかつた。朝が慌ただしいと、電車内の空間がより貴重なものとも感じられるのだった。学校生活は、比較的何もなく過ぎていつた。学業中心に回つていたためか、個人の性格や感情にまで興味の対象が及ぶことは少なかつた。教師も生徒も朝から晩まで黒板の文字と机上の教科書に向き合つていた。それが私には幸いした。当たり障りのない付き合いをすることで、余計な摩擦や深入りする関係が生まれることはなかつた。成長するにつれて、広がる心と身体のバランスを保ち続けることは容易ではなかつた。それでも、何かに集中している時は忘れられたので、なるべく勉強ばかりするようにしていた。たまに、男子からカラオケやスポーツの誘いがあれば、激しく動搖した。異性としての意識と表面上は男性だという自覚の板挟みにあい、断る理由もないのだが、何かと理由をつけて断り続けていた。

こんな私が、ここまで踏ん張つてこられたのは、秘めた思い出があるからだ。

私は心と体が一致しない葛藤からかたまに情緒不安定になつた。それは成長するとともに他の人のとの隔たりみたいなものが大きくなつてしまつた。

て、社会から弾かれた気分になつたりもするし真っ逆さまに気分が落ちてしまうときさえある。自己嫌悪に陥ることもしばしばあった。私は不安定になるたびにすぐるものがあった。それは安定剤のように、一時的に自分を救つてくれるものだつた。

私は教科書に挟んだしおりに息を吹きつけてみた。吹いた分だけ揺れた。ラミネートされた端はブサブサで、もうすっかり時間が経つてしまつたことを感じさせた。

悲しみがあるのなら、その裏側にはきっと喜びがあるのだと『彼』の遠い呟きが聞こえた。

中学三年の受験勉強の最盛期、母から発破をかけられて、勉強に奮闘していた。その時は他の人以上に時間を費やさないといけないと考えていて、がむしゃらにやつていた気がする。樂しみであつたテレビドラマですら我慢し、先生から勧められた問題集の問い合わせ何度もノートに書き連ねて解いていた。

毎朝早く登校し補習を受け、帰りは残つている先生に分からぬ問題を教えてもらうことを繰り返していた。

夏が過ぎ秋になろうという頃、彼はやつて来

た。少し肌寒く、衣替えの季節にも慣れ始め、模試の成績や志望校の話が具体的にちらほらと出始めた時期だった。

「教育実習の先生が来る」

そういう話を耳にしたが、三年生にはあまり関係のない話で、主に二年生の授業に顔を出すと聞いていた。私は、それどころではなく焦っていた。成績は徐々に上がっていたが、校内ですらまだ中の上ぐらいだった。

「尚じやない？」

私がいつもの通り図書館で勉強していると、出入口の方から声が聞こえ、足音が近付いてきた。

「う音が、耳に入ってきた。

「聴兄ちゃん？ どうしたの？」

「今日から教育実習で、この学校にお世話になることになったんだ。俺が通っていた頃は、違う校舎だったから、母校に来た感覚はまるでな

いけどね」

笑うとできる笑窪が懐かしく感じられた。

「へえ、先生になつたんだ。じゃあ、この問題教えてください」

私は、わざと分かっている問題を聞いた。

「意外と難しい問題やつているんだな。これはね、対角線の性質を使えばすぐ解けるよ」

ヘアワックスの香りだろうか、傍に来ると微かないい香りがした。髪型は短髪で、昔の面影

私はハッと思い出した。昔よく遊んでもらった記憶が鮮明に浮かぶ。

滑り台。階段を上っている時、足を踏み外して落ちそうになったことがある。その時に、優しくキヤツチしてくれた人が聴兄ちゃんだった。

女の子とばかり遊んでいてからかわれた時に、助けてくれたり泣いていたりすると泣き止むまで付き添ってくれたこともあった。

力が抜けて、握りしめていた鉛筆が右手からこぼれ落ち、スチームヒーターのカチカチという音が、耳に入ってきた。

「聴兄ちゃん？ どうしたの？」

「今日から教育実習で、この学校にお世話になることになったんだ。俺が通っていた頃は、違う校舎だったから、母校に来た感覚はまるでな

いけどね」

ダーラインをずっと見つめていた。

それからの日々は、彼の先生としての素質を見せつけられる日々だった。

彼は常に笑顔でいて、その笑顔の周りには生徒が集まっていた。先生と生徒というよりは、

仲の良い兄貴に甘えていた感じに見えた。人を惹きつける何かを彼は持っているらしかった。

それは私も体験済みだった。それを遠くから見ていたると胸が締めつけられるように切なくなつた。既に自分の内面を把握していた時期であつたので、それが単純に懐かしさだけではないことはすぐに自覚した。昔から大にをしていて、

を残していた。

「ありがとうございます。この学校で僕が最初に教えてもらつた生徒だね」

私は、不自然にならないように笑って言った。

図書館は、私の上のだけ蛍光灯が点き、窓から入る光はあるもののまだ薄暗かった。

「そろそろ、職員室に挨拶をしに行つてくるよ。尚、勉強頑張れよ」

彼は、背筋を伸ばしながら図書館を出て行った。突然現れたという驚きと懐かしさの念が交錯し、いまいち勉強しても頭に入つてこない状態だった。彼が、問題集に書き残した薄いアンダーラインをずっと見つめていた。

それからの日々は、彼の先生としての素質を見せつけられる日々だった。

自分の一部と化したものを見失っていくような気持ちになっていたのだ。そして、順調だった勉強が手につかなくなる恐怖心もある中で、時間の制約がより一層私を苦しめた。いかに自分が弱い人間か思い知られ、勉強の足かせをはずす鍵を持ち合せていないことに焦りを感じていた。机に置かれた時計の秒針の、時を刻む音が、いつもより早く大きく鳴っているように思えてならなかつた。本棚に立て掛けられている参考書の数々が目につくたびに、やらなければという気になるのだが、ふと気が付くと、しばらく拭かれていなくて窓の外をぼんやりと眺めているのだった。苦しまぎれに、音楽を聴いてみるけれど、どの曲も心の底まで響かずむしろ苦痛を広げるだけだった。

ノートや教科書をめくるようには簡単にいかない未来を見据えると、私は絶望感で息が止まりそうになつた。学校にいても家に帰ってもバランスを崩している私は、なかなか起き上がることができずにもがいていた。

そうしている内に、校内模試が始まつた。受験対策として定期的に行われているもので、私は十位以内を目標にしていた。

眠れない日々が続き、ご飯も喉を通らない状態だった。目に見えるように頬が痩せこけ、鏡に映る醜い自分を真正面から見られなくなつていた。しかし、思考回路までは影響を受けておらず、苦しい胸の内は同じだった。

試験が始まると、時間はあつという間に進み、科目が終わることにこんなはずではないという焦りと自分に対する苛立ちが重なつて、最後の理科はほぼ空欄のままの提出となつた。終了のチャイムが鳴つた瞬間に周りから発せられるどよめきとくだらない冗談が、私の心を激しく揺さぶつた。

結果は明らかだつた。この後、担任に呼び出されることは間違ひなく、親を納得させるどころか失望されることになるのではないかという不安が過ぎつた。

私は放課後の教室で一人、ノートを見つめていた。幾度となく書いた英単語や漢字、歴史上の出来事……すべて自分でやつたことではないような気がしていて、自分で付けた赤丸が嘘みたいに映つた。涙が頬を伝つた。それが悲しくて、情けなくて、流れ出てきたことはすぐに理解した。傾いた太陽の光がくすんだ窓から差し込み、ノートの半分を覆つた時に私の中で何かが壊れた。

おもむろに立ち上がり教室を出た。教室の隅にたまつた埃や壁に無造作に刺された画鋲などを客観的に見つめている自分がいて、すべてが偽物のような気がしていただ。細長い廊下は、息を潜めて獲物を狙う猛獸のように気配を消していた。窓のない箇所は薄暗く、図書館や美術室の表示が見えるだけだった。夢と現実の境目といつた感じが私の中にあつたと思う。

かかとを潰した上履きを引き摺りながら、階段を上つた。一段一段踏みしめるたびにキュックュッと音が鳴つた。

の壁伝いに延びる非常階段がそこにはあった。

眩しいぐらいの西日に一瞬目が眩んだが、私の足は物ともしないで階段を上がつていった。オ

フホワイトの外壁は、所々が薄汚れていて、様々

な天気を乗り越えてきたと思われた。

階段を上り終えると、だだっ広い屋上に着いた。何度か来たことはあるが、普段は入ることを禁止された場所だった。

ただ外にいるよりも、自然を感じることができるこの場所は、至る所から部活動の音が聞こえた。ボールをバットが捉える音、大き過ぎて何を言つているのか分からぬ声援、セパレートを駆け抜ける靴音……一音一音が、生命感に溢れ、私を苦しめた。両耳を塞いだとしても、脳に響いてくるぐらいた。

私はふらふらしながら、四方に設置されている手摺りにつかまつた。絶体絶命のレスラーのように膝を曲げながら、交代の選手などいない奥の方へ進んでいった。足下のコンクリートは、ざらざらしていて掃除がされていないようだつた。ちょうど正面玄関の真上ぐらいまで来ると、膝がガクガクし出し、一度深呼吸をした。肺が空気を弾くように咳き込んだ。目を閉じると、自分の弱さを露呈してしまうようで怖くなつた。

私は、胸の高さの手摺りによじ登ろうとした。下を覗くと、校舎の影になつて植え込みや校章の形に埋めつけられたタイルが見えた。

飛び降りる。

その行為は何を意味するのか理解できない自分が、もう一人の内面を覗き込むより怖くないと思っている自分を見ていた。「止めろ」と叫んでも、届かないもどかしさは、次第に恐怖心へと変わつて行った。手摺りは僕の手汗で濡れていて、錆の匂いが漂つてきた。

私が手摺りの向こう側に足を伸ばした瞬間、後ろ襟を引っ張られた。かなりの強さと勢いだったのだろう。コンクリートに後ろから倒れ込んだ。乾いた砂が空中に舞っているのを大の字になりながら見つめていた。

「痛いな……誰だよ」

「尚、お前何やってんだよ。危ないじゃないか」

聴兄ちゃんだった。息絶え絶えに私の顔を覗き込んでいた。彼の息づかいしか聞こえなかつた。

「僕、何やってたんだろう……」

いつもの自分に戻つていた。客観的に見ている感覚はもうなかった。制服は茶色く汚れて、彼はそれを丁寧に払つてくれた。

涙が流れた。止まらなかつた。羞恥心を隠せず、自分を責めるばかりだつた。彼は何も言わず、ただただ背中をさすつてくれた。彼が帰ろうと校門を出た時に見つけて、駆けつけてくれたらしかつた。

既視感だらうか。その行為は、昔遊んだ公園でもあつたような気がしていた。幸い生徒に見られていないようで、部活動はいつものように行われていた。風も冷めにくくスープのように前の温もりを保つていた。

「勉強のことか」

「友達から何かされたのか」

「家族から何か言われたのか」

立て続けに見えない疑問符が続いた。悩んでいることを整理できないために口ごもる自分がいた。そのたびに、彼は困った表情を浮かべて

いた。まどろむ風が時を止める。彼の声以外は耳に入つてこなかつた。

「楽しいこと、いっぱいあるだろう……どうし

てこんなことするんだ……。俺だって死にたい時ぐらいあるさ。でもみんなその気持ちを乗り越えて生きているんだ。逃げるなよ」

彼は大きな声を出した。天を見上げながら。それが雨にでもなつて降つてこないかと懇願で

もするようになつた。

私は空想した。もし私が落ちていたらどうなつていただろうかと。この世界は、私一人の命が絶たれても変わりはしないだろう。しかし、後味の悪さは、チョコレートの包み紙を噛んでしまった時のように余韻を生みながら残るだろう。彼が発した言葉は、簡単に降っては消え、私はしこりだけ残したまま死ぬことを考えるとゾッとしていた。

「僕、怖いんだ。将来のことを考えると。楽しいこと？ 日々何かに追われることが楽しいなんて思ったことがないよ。先生は、乗り越える力があるかもしれないけど、自分より背の高いハードルを目の前にその先のことまで考えられない」

私はぶつけた。大人にとつては、ただの甘えに聞こえるかもしれないが、正直な気持ちだった。

「……ごめん。俺も実は怖いんだ。尚が屋上の手摺りに手をかけているのを見た時、自分が実習中に生徒を失つてしまつたら教師を続けられるだろうかと思ったんだ。そんな風に、自分のことしか考えていない俺に、ものすごく腹がたつているし情けなくも感じる。弱い人間は俺の方

だ」

彼は震えていた。自信に満ちあふれていた顔が歪んでいた。そんな彼を見ると、私は不思議と安心感を覚えた。ずっと向かっていた風が、ふっと背中に当たったような気がした。

「先生は悪くないよ。現に僕を助けてくれた。ありがとうございます」

感謝の言葉を口にすると、覆っていた心の闇が徐々に澄んでいった。自分にしか向けられていなかつたベクトルが、他に向き始めた瞬間だった。

その後私は、彼から深く事情を問われることはなかった。それが救いだった。手摺りに足を掛け、助けられたことで、私は生まれ変わったような気がしていた。

もちろん、テストのことで担任や母親からは深く問い合わせられたが、私の目は次に向けられていた。彼がそう後押ししてくれたのだ。

「今まで何度も思い返してきた記憶は、しおりのようにはろぼろになつていて。私はその記憶に頼り過ぎていたのかもしれない。そう思つた。それに対しては、もう何も感じなかつた。もちろん好意は消えてはいなかつた。蓄積された感情がすべて流れてしまつたかのように

穏やかになつていて。彼には感謝してもしきれないぐらいだった。そして、惜しまれながらこの学校からいなくなつた。去る前に彼は私の所まで来て、このしおりをくれたのだった。胸に残る一言を添えて。ビニールの包装紙にくるまれたしおりは、それから私の宝物となつた。

私は、彼の言葉を反芻していた。苦みも甘みも超越したものが、心に残つていて。懐かしさと愛しさが込み上げてきた。

波打つカーテンが目に入ると、現実に引き戻された。逃げるわけではないが、目を閉じて耳に神経を集中させた。何も聞こえなかつた。教室に誰もいないことを確認して、孤独を噛みしめた。奥歯ですら噛みきれないぐらい強固なものになつていて。気にならなかつた味も、苦く不快な味へと変わつていて。今初めて兆候があつたわけではない。私は気付かないふりをしていたのだった。

彼は、学校で会つてもいつも通り接してくれた。彼の周りには、あいかわらず生徒が集まつていた。それに対しては、もう何も感じなかつた。それに対する好意は消えてはいなかつた。もちろん好意は消えてはいなかつた。蓄積された感情がすべて流れてしまつたかのように

常に心の中にあるような感覚が、続いていた。

私も『普通の』高校生活を送りたいという思ひがそうさせているのだろうか。

自分なりに努力をして、ここまで歩いてきたが、いまだに隙間を埋めることはできずにいた。西日がカーテンの隙間から差し込んでいた。光の筋でチョークの粉が舞っているのが、はっきりと分かった。乾いた土の香りが微かにしてきた。外は春らしい空気に包まれているのだろう。

私は、机に放り出された教科書を閉じた。立ち上ると、引き摺る椅子の音が反響した。廊下に出ると、ひっそりとしていた。壁に貼られたA3判の紙には、校内模試の結果が記されていた。私の名前は載っていない。上位五十人が列挙されているだけだった。吹き抜けの高い窓は、木漏れ日のように光と影を作っていた。

後悔する気はさらさらないが、それが逆に重荷になっている気がしていた。歩きながら、他の教室を覗いた。誰も残っていないようで安心した。ゆっくりと階段を上っていくと、徐々に足取りは重くなつた。見えない足かせが邪魔をしているのだ。

それでもようやく着いた屋上の扉を開けた。鍵はかかっていない。

鉄製の固い扉がキーンと音をたてて開いた。

その瞬間、風が私にまともにぶつかってきた。まるで開けるのを待ち望んでいるかのようだつた。私はそのまま歩みを止めず進んだ。足の裏には、久しぶりの感触が伝わってきた。中学校の屋上でも感じたあのざらざらとした感触だつた。

ここは、主に垂れ幕を下げるために使用されていた。この場所は中学校と違い手摺りがなく、誰も来ないことを前提にされた場所だと思われた。ぎりぎりまで足を運んだ。膝が震えているのが分かった。怖いのだ。私は目を閉じた。風が体をふらつかせるが、向かい風のせいで前にはいかない。私は息を吸い込みながら目を開けた。ぱっと目につくところにはいなかつた。晴れているせいか、かなり遠くまで見渡せた。

私は一步下がり、しゃがみこんだ。校舎の端

でこっちを見つめている少女がいた。さらさらと長い髪を揺らし、ドット柄のワンピースを着ていた。小学生ぐらいだろうか、視線を逸らさずに近付いてきた。私はその少女に引き込まれそうになつた。ふくよかな頬を赤らめた日本人形のような顔立ちが、不思議さを際立たせていた。校庭の中央に植わっている銀杏の木の下で

彼女は止まつた。美しさとどこかで会つたことがあるような感覚が、彼女への興味に変わつた。「ねえ、そこで何しているの？ お名前は？」遠いからか大きな声で叫んでも、彼女は答えなかつた。というよりも聞いていない風だった。

屋上に立つ私がいる。本当に落ちる氣があつたのだろうか。誰かが助けにくると期待していのではないだろうか。あの頃は外の景色を見余裕などなく、内側のモノクロームばかり見ていたようだ。そのまま歩みを止めず進んだ。足の裏で自らも色を失つてしまふと思うと、その考えに吐き気がした。

今の私は、そのモノクロームに無理やり彩色しようとしていたのではないだろうか。過去の思い出にすがり、甘え、周りを拒み続けたことで絵の具が固まつてしまつた。

私は一步下がり、しゃがみこんだ。校舎の端でこっちを見つめている少女がいた。さらさらと長い髪を揺らし、ドット柄のワンピースを着ていた。小学生ぐらいだろうか、視線を逸らさずに近付いてきた。私はその少女に引き込まれそうになつた。ふくよかな頬を赤らめた日本人形のような顔立ちが、不思議さを際立たせていた。校庭の中央に植わっている銀杏の木の下で彼女は止まつた。美しさとどこかで会つたことがあるような感覚が、彼女への興味に変わつた。「ねえ、そこで何しているの？ お名前は？」遠いからか大きな声で叫んでも、彼女は答えなかつた。というよりも聞いていない風だった。

微笑みさえ浮かべず、無表情のまま私を見続けていた。青々とした銀杏の葉が代わりに揺れて答えていた。

「家は近く？ 今下りていくから待ってて」

私は、後ろを振り向き、玄関に向かった。体は軽やかだった。心の中の雲は、いつの間にか散らばっていた。

私が玄関から飛び出すと、そこにいるはずの少女の姿はなかった。近くを探しても見つけることができなかつた。彼女がいた場所まで戻ると、雨ざらしで色あせたベンチに座つた。そこからさつきまで私がいた屋上を見上げた。

かなり高い。この銀杏の木よりも高いのだから、落ちていたら一溜まりもなかつただろう。

私は、彼女が見つめていた理由を探していた。彼女は、何も気にせず女の子と遊んでいた昔の自分が抱いていた理想と似ていた。

私が理想としていた「私」を見ていたのではないかと思うほしかつた。

銀杏の葉が揺れる。それを合図にして桜並木も揺れた。

忘れていた感情が湧き上がつてくるのを感じていた。

来週にはテストが控えている。

日常は待つてくれない。でも私は、微笑みを添えて、少しだけ明るい未来が見えていた。

西の空は真っ赤に染まっていた。

太陽はもうすぐ沈み、夜の帳が下りるだろう。

私は、素直な自分を抱えながら誰もいない教室へと駆け出していた。

詩

# 詩

最優秀賞  
**殯**もがり

秋田市十田撓子

しずかで、かなしげな音楽がきこえてくる

霧がたちこめ

きよらかな露をたたえる葦の草原を  
旋律が一音一音歩むようにして渡る

天上にあるかのような此の世の原の  
白の世界を鳥の影がかすめた

影の色は灰ばんだ青み　鳥か鶲か  
見てはならない黒い鳥

魂をはこぶ鳥

いよいよあなたを見送るのか

さいごの旅のための舟をととのえる  
互いの顔かたちを見るとも  
じかに語りかけることもできなくなる

即ち空は暮れゆき、夜の実体が漂い流れ  
青ざめた無言の月が雲間に覗く

夜の船出

どこからか、あの音楽がきこえてきた  
それはしめやかな舟歌であつた

沖つ国へ向かうあなたのさいしょの旅に  
あなたの魂を水に委ねよう

海陸風が帆を孕ませ、船は自ら解纏した

船脚が重くどんより進むのは

乗り手の魂が無傷ではないあかし

波路の果てから一羽の白鳥が現れて  
うつろの櫓杭ろくいをトトトと三度、突いた

迎えのおなりで目覚めたこの天鳥船は  
いま抜錨したかのように、するすると

夜の水平線の深みに消えていった

私にはその先を見つめる勇気はなかつた

樹上に引っかかった濡れ羽の

それは、ただ黒い塊となつて事切れていた  
あなたはどこにいるのだろうか

途切れがちになる息をようよう繋ぎあわせて

たどりついた或る日の朝

見たこともないような水の色、  
天色あまいろが

何気なく離陸していた

水辺でうつくしい小石を拾つた  
青い玉さふくであった

やがて雨雲が空をすっかり覆いつくし  
幾日幾夜も吹き降りた

緑青の浮いてきた自分の骨身をさすり  
私は昏々と眠りつづけていた

あなたは海を渡りきつただろうか

ゆめうつつに、碟にされた鳥を見た

夜嵐の過ぎた薄明に菩提樹がうなだれて

奨励賞 さくら

井川町 小林康子

こもりて いた魂をふつふつと  
湧かせ

沈める さくら

軽いのか  
重いのか

幼子の ようにふわふわ浮かび

老いた母の ように重きものを抱き  
自在に漂つ  
揺らいでいる

軽いのか  
重いのか

さくら舞い落ちる

ことば寸前の何かであふれんばかり  
満たされて波打つて いる

空っぽの空に新しいいのちを広げ  
いのち響かせ

花のめぐりで笑い興じたひとたちを  
幻を見せる

古き巨木

老いきわまつ 桜木一本

透きとおる花を咲かせ

見尽くしてきたこの家の移ろいに

今年も新たな時を加えていく

## 奨励賞 赤 卵

東京都昭島市（東成瀬村出身）

佐 藤 清 助

それでも ぼくは風邪をひき高熱を出した

母は村のペラコ婆様からでも聞いたのか

希少な地鶏の赤卵を

他の兄弟姉妹に隠して

ぼくの手に宝物のように渡してくれた

ぼくは生卵が好きではなかった

罰当たりなことに 飲んだふりして

庭畠の菊花や野菜の根元に

そっと隠しておいた

秋になり収穫した菊花や野菜の根元から

色あせた赤卵がごろごろ出てきた

無言だった母の寂しそうな顔

私はよく夢を見る  
故郷の泣けるような夕焼けと子供の頃の夢だ  
八人兄弟姉妹の中で  
ぼくが一番病弱で瘦せていた

アフリカの戦乱下にある欠食児のように  
目ん玉だけが大きく

アバラ骨ではピアノが弾けた

道行く村人は ぼくを見ると

「メシ 食ってるガ！」

憐みと驚きの声をかけた

ぼくが一人欠けても良さそうなものだが  
母は心配した

食欲がなく朝食抜きで学校に行こうとする  
ミソおにぎりを持って追いかけてきた

降雪の中をマムシの粉を求め町にも出かけた

私はあわてて頬を拭う

私の大好物は地鶏の赤卵である

しばし 尾根道をゆるゆる歩もうと思う

今 私の屋台骨は痛みよろめいているが  
人前では逆らって元気さを演じ  
「絶好調」と叫び弱音を吐かない  
遠くなつた故郷  
それでも故郷で過ごした子供の頃の夢を見る  
頬が涙で濡れている

# 入選 忘れ水

秋田市 矢代レイ

水よ

あなたは

鳥や虫のコトバを

忘れているのだろうか

花といのちの交感をするのを

忘れたのだろうか

木とあそんだ<sup>とき</sup>時間を

忘れてしまったのだろうか

森の裏葉色の空に

滲されてくるのは

乳色の光

ホーホー ホッホー

時折

キジバトの声

いっそうの静寂

おもむろに  
わたしは

水に手をひたす

指先に

水の意志を感じる

わたしのなかを流れていた記憶

と共に鳴する

茂みのなかに  
鮮やかに咲くアザミ  
紫紅色の鈴といっしょに  
唄っている

ふさふさした髪のような草の波  
のかたわらを  
忘れ水の開放弦をつまびくと  
向かいの山は

緑が滴ったような

まばゆい色合いをみせ

恍惚とした雲は

夢みごこちの風情でたゆたう  
忘れ水

## 入選 野鳩が鳴くよ

あなたは ただゆつたりと私を見ているだけ  
幾年も前に別れたあなたが ここに今いる。  
静かに端然と 今ここにいる。

横手市 宮 野 栄 子

今日は昨日までの続きだから

もしかして 母さん

朝まだき

あなたは

私の側かたわらに居ましたよね。

私の中に来ていましたよね。

何と気持の穏やかな目覚めだったことか

ほんのりとあなたの気配を感じて

確かめようと 私は自分を探していました。

家族の寝室だった部屋の匂いの中に

あなただけが静かに確かに居ました。

目覚めた筈の私は ただうれしくて

笑っていた筈です 安心して

身体はゆっくりと伸びて 胸は高なって

眼を閉じたままの私は いつまでも

くつくつと笑えました そのあとから

思いがけない清冽な大きな波が

私の胸に寄せてきました。

苦しみを一人で抱えきった母さん。  
四人の子を父に託した時の母さん。  
その母さんが 今朝 私を溶かしてくれた。  
きれいだった母さんが まなうらで笑ってる。

私も生き切る。

あなたの気配が私の中にはのかに入った時  
明け始めた雑木の中で

突然 野鳩が歌う

ポーポーッポッポ

ポーポーッポッポ

低く柔らかく優しく 何回も何回も

ポーポーッポッポ

ポーポーッポッポ

ああ なんて心地よいリズムだ。

お前の歌が 私の元に

母さんを連れてきたのだ。

体調を崩している私の元にー

でも 心配しないで

私の不調など物の数にも入らない母さんの  
すさまじい鬨いを私は全て見て知っている。

入院 手術 傷包帯 そして遺書：

## 入選 愚者の知

北秋田市 武 藤 幸 雄

私は絆も連帯も赤い糸も  
早晚風化するだろうと思う  
時間と駆けっこしたところで  
無駄骨にすぎないと思う  
戦うという術を持ちあわせていない  
老春の黄昏が闇へ急降下する

月と朝日が同居する日  
綬帳があがる

役者はそろった

粗雑な書き割りと

不可解なアンソロジー

過去も現在も未来も

不眠症の男には一本の線に過ぎない  
直線だろうが 曲線だろうが  
それは不快なこと

だらりとした両手

焦点の定まらぬ眼

腐敗した魂

霜月の葦のように

かばそき老骨の直立不動

これ見よがしに咲く植物に  
醜悪さをおぼえ

腐敗した魚に太古をしのぶ

肉のない骨をしゃぶり

薰り高い果肉を捨てて種子を食む

私は敵対することを拒絶する

そんな馬鹿げたことがあるのか  
ある 心臓の端っこに

ポリープのように

私が誕生したその時から

心臓の端っこに

天文学的時間をかけて

解凍された時には

この自己という『孤』の

思考する全てが

再生する物は

否定から始まっていた

私のかぎられた時間と空間のなかで

たかが知れている

## グリーン賞 偏頭痛

由利本荘市 菅原聖美

たすけて たすけて  
だれか たすけて

あたまのなかで だれかがあはれているの  
わたしの ほやほやの脳みそを  
ぎゅうぎゅうにつまつた脳みそを

なぐつたり けつたりして こわしているの

きらきらのおほしさまに眩んだ右目に  
けらけら笑うあなたを傷つけた左脳に  
心臓をひとつずつとりつけて

酸素をいっぱいいまわして  
まっかな小道を 大行進

どく どく どく どく

どっどっどっ

だれかに うつればいいのに

となりの あなた

あそこの ことり  
とおくの おやま

いたいの いたいの とんでいけ

でも  
いたいのはかなしいから

とおくのおそらでほしになれ

短  
歌

# 短歌

奨励賞 川

由利本荘市 佐 藤 榮 悅

溪流に釣り人立ちて萌えいざる木々のあわいに一木となる  
増水におぼる少年救いしはあの瀬のあたり何処に生くる  
空に澄む五日の月は川の面に生きいるものごとくにゆるる  
仮眠とる人らの船は夜明け待ち月に明るむ河口に並ぶ

過ぎし世に船積みの米背負いたる男の声聞く雄物川岸  
夕の日に耀う子吉の河口へとオールととのえボート漕ぎゆく  
終の日もやさし瀬音を聞かすとぞ語りて流るふる里の川

奨励賞 朝 夕 抄

能代市 塚 本 佐 市

移りたる日向に筵引き寄せてせんまい揉みぬ膝を正して  
短夜のいちめまじりの夢なればすべてを赦し朝を迎へぬ  
川音もすがしく合歎の花咲きて朝な夕なの空に色足す  
遠目がちに帰船を待てば梅雨明けの強き海光家深く入る

朝顔のしほまぬうちに学習をしやうと子に添ふ家事の間に間に  
つつがなく家路につけり蜩を父の声とも母の声とも  
同郷のちちはは守りし山畠に葛がはびこり花咲かせをり

## 奨励賞 職人の日々

男鹿市 三 浦 善 隆

生業の木の香も良しと半生にいくたび研ぎし両の手力  
刃こぼれを直しつつ研ぐ初夏の櫻大樹の木漏れ日のもと

切れ味を指の腹にて確かむる朝餉の前の鉈一丁

良き縁の巡りあわせの遠のきて娶らず老いて子はゆくばかり  
研ぎ汁はごつき十指に染みゆきてなまはげの手と吾を揶揄する

真夏日の滴る汗を拭きもせず浴びたるままに大鋸屑纏う  
国敗れて山河ありと学びたる吾が中学の昭和貧しく

## 入選 白木蓮

横手市 佐々木 ヨリ子

嗜み合はぬ会話のあとに姑の打つ朝の柏手凜と響かふ  
亡き舅の名刺の裏に姑の文字塩四合ニ茄子一貫メ

米作り戦中戦後は良かったと姑は呴く夕餉の後に  
亡き姑の使ひ残せし歯磨のチューブを絞るミントの香り

池の面を枯葉のいくつ風に揺れ姑逝きて早七ヶ月過ぐ  
姑逝きし年には一つ今年五つ天仰ぎつつ白木蓮咲く

秘め持てる宝の包み解くやうに白蓮ひらきははが顯る

## 入選 義足の子

男鹿市 真野ミチ

義足にて子の十六年の過ぎにけり心乱れし時も遙けく

くれなるに極まるけふの夕の空義肢を付けかへ走り居らむか  
溜まりたる切抜き今日は綴ぢて置くメダルを下げしどきの写真も

義肢の子の会見記事を読み返す「走れるがうれし」の立ち直り  
寡黙なる吾が子を支へ来てくれし友と職場のありやう思ふ

日常の汝の事など知らざれば明るいままの母を続ける

「まだやれる」と髪をかき上げ義肢の子の四十三歳大き夢追ふ

## 入選 子を悼む

仙北市 大山文穂

癌告知受けしと来たるは二年前余命二ヶ月を二年耐へたり  
喘ぎつつ「大丈夫だよ」といふ声をテレビ電話に涙して聞く  
末の娘の大学進学を見届けて五十二歳の命尽きしか

人の世の僥幸縁さまざまと壯年の子の命終に遭ふ

来るたびに庭に洗車をしてをりし健やかなりし姿世になし

玄関に稀なる螢明滅す亡き子の魂のごとくにも見ゆ

癌ゆゑに帰省かなはず逝きし子のメールは消さず折りをりに読む

## 入選 小苑

由利本荘市 小田敏

不況にて苦しむこころなぐさめて新芽の萌ゆる小苑に立つ

茂り合ふけやき若葉を打つ雨のしづく音なく土にしみゆく  
庭池を群れつつめぐるあざら鯉不況といへど手離し難し

華やげる牡丹の蔭に咲く海老根野生のはなは紫あはし  
わがこころはげまし伸ぶる今年竹<sup>あした</sup>朝の風にそよぎてひかる

名も知れぬ鳥の声に目の覚めて今日の仕事の手順をおもふ

朱き鯉沈める池をめぐりきて牡丹の花の傍らに坐す

## 入選 お稻荷様を祀る

横手市 小 西 誠太郎

里人の信心厚いお稻荷様を祀る二月の初午盛る

法螺貝の鳴るやきりと伊達男の梵天唄に若衆等勢う

米の値の下がるこの世も怯むなく雪蹴り恵比須の俵かかげる

梵天の頭飾りも技競う若衆等の粧雪空に映ゆ

梵天を先手に翳し恵比寿俵ジヨヤサジヨヤサと押し合う若衆

恵比須俵解かれて神の御利益を受ける人等の喚声上がる

お稻荷様を祀る里村犬飼わぬならわし今に睦ぶ鄙の地

## 入選 父の手

秋田市 渡 部 栄 子

朝まだき父倒れるの電話ありわれ冷静に仕度しております

わが行けばベッドの上で手を延ばす両掌に包み声に励ます

現し世と彼の世行き來し十日余り祈り届くや昏睡より覚む

言葉失くし動くは右手のみとなる職人たりし父の手堅き

熱き湯でタオルをしぼり利かぬ身を懇ろに拭き満たされており

孝行をさせんがために一年半消え入りそうな命火ともす

九十五の父の命終告ぐる医師まだあたたかき掌さする

## 入選 仙人米

秋田市 西 山 和代

山深き県南東成瀬村の仙人米とどくふるさと納税

東成瀬の知人教え子交流のつづく嬉しさともに老いつつ

思い秘め教壇に立つ助教員夫の歩みのはじまりし郷

父の死は夫の進路を変えしならん一家背負いし十九の春に

青春の夫のつとめし東成瀬石斧出でし地嘗みつづく

少子化を憂えるときに東成瀬の子らの学力眩しく聞きぬ

仙人米の香ただよい炊き上がる時雨れる夕べさま、ご飯だよ

## グリーン賞 夏一色

大館市 柴 田 京 香

自分ならどう鳴かせようホトトギス考えながら向かう机

課外中ふと向ける視線その先に三十度ごえの温度計

自転車を一心不乱に漕いでいく霞む景色と重いペダル

葉桜を手折りて散りゆく我が涙別れを惜しみ揺れる心

頬撫でる風は少し露を含み降り出す夕立走り出す私

青い花が散りばめられた波の上に浮かび仰ぐ空の青

椅子に腰をおろして耳と鼻をきかせゆるりと待つのは秋の便り

俳  
句

# 俳句

## 最優秀賞 石山抄

能代市 塚本佐市

巨石割る鑿は一列燕来る

露天掘り列ととのへて鳥帰る  
初蟬や石工の昼餉石に座す

雲の峰石打つこだま身に環る

七月のたがねを打てば銀の音

石山に神棚一つ喜雨いたる

## 奨励賞 天鷺村

にかほ市 宮本秀峰

城門の甍に辻る夏落葉

軒低き城下の村や夏つばめ

提灯に藩主の家紋城涼し

一村を見守る鰐に青葉光

藩政の栄華の舞ひか夏の蝶

曲屋に木馬嘶く青あらし  
甲冑に武者の体臭堂薄暑

## 奨励賞 孟蘭盆会

三種町 三浦 静佳

墓洗う巡業相撲待つ父と

じいちゃんとばあちゃんになる盆帰省  
臨月の娘の祈り墓参

真ん中に古きアルバム盆の家

海苔巻きの甘めの飯や生身魂

盆踊母に及ばぬ手の撓り

置みたる夜具の静けさ盆行けり

横手市 高橋

遙

## 奨励賞 蔵

横手市 高橋

初謡声の籠りし文庫蔵  
梅かをる内蔵までの通し土間

蔵巡る堀り割りの水温みけり  
盥漕ぐ蔵の若勢や花吹雪

往年の酒蔵凜と天高し

米蔵の大き鏡前小鳥来る

りんご挽ぐ眼下に展く蔵の町

## 入選 田螺鳴く

秋田市 柴 田 和 蕾

捨てられし村の溜池田螺鳴く  
水門を閉じて久しき鳥貝

御手洗の神の遣ひの水馬  
水澄右利きらしき水輪かな

乗込鮎群来て沼の岸激つ  
沢蟹の棲む渓流と見て取りぬ

数多より選り分けられて屑金魚

## 入選 子吉川

由利本荘市 佐々木

成

引かんとす鴨の込み合ふ中州かな  
川縁の貝塚遺跡かげろへり

コックスの太き声飛ぶ川薄暑  
夕焼や鷗付き来る大漁船

御番所の礎石の崩れ蘆枯るる  
街暮れて水ふくるる子吉川

## 入選 四季雜詠

湯沢市 麻 生 白 風

余寒なほ上吉の塚は石ひとつ  
檜扇の持つ手に見えず古代雛

一院の門廡濡らしむ余花の雨  
肝煎の邸跡てふ牡丹の芽

一喝に饒舌の止む日雷  
萩の句を走り書きする端紙

忽ちに街の灯奪ふ雪しまき

## 入選 風

秋田市 宇佐見 レイ子

五月来ぬ風にも色のあるごとし  
風薰るゆっくりまはす万華鏡

風といふ一語の辞典ひらく夏  
秋近し教会の鐘夕空に

コスマスが揺れて風呼び吾を呼び  
すゝき原分け銀色の風の道

父の倍生きて九月の風を聞く

## 入選 夫の面影

秋田市 佐 藤 美 代

突然に残されし日の芋嵐  
語る子に夫の面影天の川

一人では半人前や墓洗ふ  
入学を告げれば潤む遺影の目

吊り橋に似たる一生柳絮飛ぶ  
一灯を求め彷徨ふ螢の夜

事ごとに墓前に立つ子雲の峰

## 入選 北限の茶摘み歌

大潟村 池 田 鄉 太 郎

茶山守る翁の意氣のなほ盛ん  
茶摘みする老いも若きもボランティア

摘み取りし茶の香にふはり包まるる  
北限の檜山に流る茶摘み歌

茶畑に三百年を語る夢

茶園からすらりと伸びし秋田杉  
北限の檜山新茶の精啜る

## 入選 夏 衣

秋田市 加 藤 トシ子

单衣着て終の住処にひとりきり  
古稀すでに秘密を持たぬ夏衣  
蚕豆をむくや肩書なき軽さ  
紹をまとひ母と見まごふ鏡かな  
涼しさや母の遺愛の帶を解く  
羅を脱ぎ他所行きの貌を脱ぐ  
余命など知らず浴衣を肌に着て

## 入選 男鹿・真澄路

秋田市 鈴 木 栄 司

古地層の崖ひかり見ゆ初景色  
坂多き男鹿のむら訪うやぶ椿  
暮れ残る緯度標岬に春惜しむ  
男鹿の山太き湧き水どよめけり  
真澄路を辿れば岬オガフウロ  
草の絮飛ばす真澄の島風に  
なまはげに真澄端座す遊覧記

## 入選 戰後七十年

秋田市 鎌 田 光 江

聞き取れぬままの玉音戦終ふ  
空爆をくぐり八十路の終戦日  
蚤しらみDDTと餓ゑの過去  
教科書を墨で消したり新学期  
疎開児童集ふ縁の終戦日  
英靈の幼き面輪盆灯籠  
八月の祈り戦後も七十年

## 入選 老 母

秋田市 寺 田 秋 悅

おかあちゃん寝の母を呼んでみる  
母の背を越した卒業記念写真  
ていねいに交はす挨拶門涼み

爪を切る握り鉄や日向ぼこ  
喜寿金寿桃の節句は誕生日  
母の日や還暦の子も子は子供  
可愛いね貴女のひ孫こどもの日

## 入選 武家屋敷

秋田市 神 成 石 男

屋根石の焼けて密なる長屋門  
西日さす氏神堂の羽目の穴  
番傘の家紋にはじけ白雨来る  
円相に海芋の花や付書院  
啞蟬や長押の上のたんぽ槍  
蜩やそつと触れたる糸車  
長櫛の涼しく光る螺鈿かな

## グリーン賞 夏 の 幻

由利本荘市 佐々木 晴 佳

玉の音が夢幻を誘ふ暑き夜  
夏の星天翔る君溶け込んで  
熟れぬ想ひ抱へ一人の蓮見舟  
亡き笑顔褪せた浴衣に染み透る  
頬にじむ汗か涙か離別し時  
花火散り涙の果ての酸っぱし実  
ひとときの思い出枯らすな水中花

川  
柳

# —川柳

奨励賞 青い空

最優秀賞 花の降る街

五城目町 石井 トモ子

秋田市 藤 咲子

正座してひとつ風に裁かれる  
凛とした母の背より満ちる海  
けん命に生きても答えまだ出せぬ  
ビー玉を転がしてみる明日の策  
不確かな路です幕はまだ引けぬ  
山越えて胸奥で鳴るファンファーレ  
あと少し踊ろう花の降る街で

曲がり角どうにかぬけた青い空  
忍の字を掲げ家族を丸くする  
忍耐に馴れてしまつた笑い顔  
ごった煮が一番美味しい大家族  
父の手のつっぱり弱くなるばかり  
無愛想たけど確かな思いやり  
とわの愛農の十指を見ています

奨励賞 忘却の中で

五城目町 佐藤 ちづる

残り火を消さず女は風を待つ  
過去の花咲かせて亀裂埋めていく  
黄昏の魔法にかかりゆく手足  
悔恨の深さ写経を絶さない  
残照の温みに溶けた呪縛糸  
追憶の炎を抱いて病む夜明け  
忘却という字の重き花万朵

## 入選 ノスタルジー

秋田市 高島 ゆみ子

あの人チャリの荷台をねらつてた  
ちょっと隙つくつているの気づいてよ  
見つめられ自滅しましたいい男  
邪魔をする知識がなくて素直です

雨上がり里の香りが強くなる  
君想う涙が朝の露になる  
丸くなる体に比例する心

## 入選 父と母と

大館市 近藤桃春

父の書架 浮いた心を戒める  
寡黙でも凜とした背がよく語る  
力抜き病む子を想う細い腕  
しがらみの軋轢に耐え母の笑み  
逝く日まで母が綴った日記帳  
正忌には何処か菊の花  
信じ合い耐えた証を語り継ぐ

## 入選 命ある限り

五城目町 加藤円心

火を足して心の熱い子に育て  
書き足して応えに迷う戻り梅雨

残骸に妻が噴火す夜勤あけ  
コンセント探しチャンスを取り逃がす  
躊躇して生きる手立ての猪口を受け  
麦青し余生に遠いスケジュール  
こんなにも僕を待つてた旗の波

## 入選 生きる

秋田市 藤本あき子

その時は悪女にだつてなるつもり

悪性の癌ですと言う軽い声  
神様の言う通り静かに眠る  
花畠ホントにあった気がしたわ  
右上の白い光で目を覚ます  
病院のベッド這い出す影法師  
生きている微かな呼吸温かい

## 入選 本の虫

秋田市 谷口心平

空に雲わたしの手には文庫本  
言語美の世界 ゆたかに並ぶ書架  
ふつふつと心にひびく本の壺  
心読をかさねて真価知る古典  
志賀直哉 秋の夜長によく似合う  
綴じ糸の切れる幾多の愛読書  
おこたうず読書と子らに言い遺す



エッセイ

# —エッセイ—

## 最優秀賞 緑色の時

秋田市 佐々木 真知子

昨年、今年とわが家にとつては今までになく重い年が続いた。

去年の初夏、姑が病を得て長期入院し、ようやく落ち着いてきた今年の五月に、今度は夫が突然発病して入院した。

夫の病気は即命にかかるものではなかつたが、入院期間は長くなつた。最初はリハビリも含めて二か月弱で、一度退院してから、手術のため再入院して一か月かかった。

春から夏の生命力旺盛な季節を、ずっと病人と過ごして、その季節の印象がうすい。

夫の入院の日から、病院へ通うことが毎日の生活の中心となり、それまでの暮らし方が大きく変化した。日常生活が変わったからといって、特別不自由になつたわけでもなく、一人で過ごす気楽さもあるのだが、居るべき場所に居るべき人が居ないという変化に慣れず、何事にも気

持ちが向かない。  
年齢とともに順応性がなくなつてゐることを実感する。ささいな変化にも対応しにくくなつたせいか、家で夫の世話をしなくていい分だけ時間はあるはずなのに、一日が短い。

幸い、夫の症状は軽い方で、入院当初は別として、病状への心痛は少ない。病院へ行つて、退屈している夫の話し相手になつたり、体力の維持のため一緒に院内を歩いたり、リハビリの自主トレーニングに付き合つたりと同じようなただ回復を待つ日々が続いた。気持ちは忙しい毎日なのに、時間が遅々として進まない気がした。

入院してから一か月が過ぎた六月の初めころ、夫が病院のすぐそばにある千秋公園に散歩に行きたいと言ひ出した。

それまでに、夫は一度外泊を許されて自宅に戻つているのだが、その時に体力の減退を感じじみ感じたようで、どれほど歩けるか確かめてみたいと言う。

その日は天氣もよく、それほど暑くもない散

歩びよりだった。早速許可をもらい、昼食後に

出かけた。

病院前の道路を渡ると堀があつて、もうそこ

は公園の入り口だ。夫は、木々の葉影を映して深緑になった水面を興味深げに眺めて、小さな魚がいると、笑顔になる。

それから、ゆっくりと坂道を上る。

六月の緑は濃い。木陰を選んで歩いていると木漏れ日がゆらゆらゆれる。夫も私も木の葉の色に染まつて。気分がやわらいでくる。日差しがそぞろ広場は避けて、みずみずしい枝葉がおおつて涼しげな石段を一段一段時間をかけて登る。

夫はこの近くの街中で生まれ育つてゐるので、子どものころ、この公園はよく遊んだ身近な場所だつたらしい。しかし、大人になつてからはほとんど来ていらない。

ゆつたりと緑色の風や木の葉のそよぎを感じながら歩いていると、遊びまわつた昔のことが思い出されるようで歩みが早くなる。

石段を登りきると、再建された表門が見える。だいぶ前にできてゐるのだが、夫は初めて見たと言う。思い出の中には、あまり親しみが湧かないようだ。そつけない。

市街地が見渡せる高台のベンチに腰をおろした。この日は、土曜日だというのに、公園の中は人がまばらで、ベンチの近くには人気もなく

驚くほどの静けさだ。

私たちの上には大きな桜の木が枝を広げて日差しを遮ってくれている。よく見るとその木はかなりの古木で、幹は太くて広く張ってはいるが、あちこちに苔がむし、表皮もでこぼこに荒れている。葉つきがよくないのも老いのせいだろうか。若木は、この季節、勢いのある葉が重なりあって茂っている。

風は気持ちよく吹き抜けていくが、葉すれの音が弱い。葉がまばらの老木の姿は淋しげで切なくなる。この桜はどの樹も年老いてひつそりと息をしている。ただそこにいてくれる。今私たちには、押しつけがましいまでのエネルギーを発散させる元気な樹より、やさしいだけの古木が似つかわしい。

遠くに見える街や公園の木々を眺めながら、歳を経た大木のゆるゆるとした息遣いを感じてみると、気持ちがどんどんほどけていく。ぽかんとこころが広がった。

時間はあるのに急かされている落ち着かない

暮らしの中ではむずかしい。日々の些末な出来事にいつも振り回されている気がする。その時は、忙しない日常から浮遊して異空間を漂っていた。静かな老木の木靈こだまのおかげかもしない。しばらく、とりとめのない話をしてから、茶室のある一画まで歩き、来た時とは別の道を通って病院に帰った。

夫は、疲れているはずだが、初夏のすがすがしい風と、思い出の中の腕白坊主だった自分に励まされたのか、顔色がよくなっていた。

夫が退院して、日常生活がもどつてからも、私は時々あの日あの場所で過ごした時間を思い出す。見慣れた風景が、いつもと違つて見えたのは、その時の私の目が、私自身が、いつもと別だったのだろう。

次に見るときは、あの日の景色はきっと見えない。それでいい。

## 奨励賞 左に曲がつて

大仙市 豊 島 香 織

秋田に戻つて来てから、夜の散歩が日課になつた。星がひとつひとつきりと輝く夜空、何層にも重なつて共鳴する蛙の声に、さらに重なるフクロウの声。ネオン看板もサインボードも、商談も駆け引きもない田舎の、田んぼだけがあるシンプルさはとても心地良い。

散歩中、野良猫にはしばしば出くわすけれど、人に会つたことは一度もないし、車も夜はほとんど通らない。懐中電灯は持たないから、月影と、まばらな街灯と民家のカーテン越しの明かりを頼りに、歩き慣れた道で一人、夜を堪能することが、散歩の目的である。

家を出発して駅の方向に進んで行く。運動靴を履いているから、昼間よりペースは早い。三分ほど行くと、「入口」と呼ばれるT字路に突きあたる。そこを左に曲がつてだいたい三十分。何年か前に通つた林道とぶつかる信号までひたすら歩く。わき道はなく、したがつて道に迷うことなく、どの道を行こうか迷うことすらな

い、一本道。  
この道は、もう二十年も前、片道約三キロの所にある小学校へ通つていた時の通学路でもある。

最初に散歩をした夜、田んぼ五枚分ほどの距離を歩いて「入口」にさしかかった。私の家は、西側を田と山に、東側を川と山に縁取られた、南北に細くのびる集落にある。この集落への入口だから「入口」と呼ばれている場所。駅の方から来る人も、反対側の温泉やスキー場がある山間部から来る人も、集落へ入るにはこの「入口」を経由しなければならず、また、集落の中の人間にとっては、どこへ行くにも必ず通る出口でもあるわけだ。

秋田に帰つてまだ日の浅い、三月末の夜、この出口としての「入口」歩いて通りかかったことが、ある古い記憶を呼び戻すよすがとなつたのだった。

それは、ほんとうに他愛のない記憶。小学生の頃、両親とも仕事の帰りが遅かつたせいか、家に家族が揃つていることに入一倍の安心と幸福を感じる子だった。だから、平日の毎朝、出勤前の両親を後に残して、畠仕事に出る前の祖父母に見送られて家を出ていかなければなら

ないことが不本意で、目覚めた瞬間からナイーブな気分に浸つていた。雨の日と月曜日はもちろん、朝食にチョココロネが用意されていても、ナイーブの波は私をすっかりのみこんではなさい。とはいって、近所の子等と一緒に班を組んで出発しなければならないから、皆を待たせてぐずるわけにもいかず、かつ年少の子を無事学校へ連れていくという、子どもなりの使命感もある。葛藤を抱えたまま七時十分には歩き始めるのであつた。それでも、ナイーブな朝の私は、歩きながらどうにかして家に戻る方法はないかと画策する。重大な忘れ物をしていて、せめてもう一度、一瞬だけでも家に戻る用事はないか、家で重大なことが起こつて、まだ出勤前の母が車で私を連れ戻してくれないか。自分の知つている狭い世界と、自分ちっぽけな願望が、この世のすべてだった幼い私は、そんなことを心から願いながら、田んぼの中の一本道を、ぱとりぱとり歩いて行くのだった。

しかし、どういうわけか毎朝、「入口」を左に曲がると、ナイーブの波はさつと引いていくのである。これは、今の私が当時の自分を想像してのことだけれど、「入口」を過ぎるということは、集落を出していくということ、集落を出

た以上は、家の子としてではなく、一小学生として振る舞わなければならないというスイッチが、無自覚のうちに入っていたのだと思う。そのスイッチの切り換えが立てる、学校へ行くより他に仕方がないという落胆とあきらめの香を、

人知れず嗅ぐことで、私はあの道のりをずんずん歩くことができたのだ。三月の夜、今まで思い出しあしかったこの懐かしく慕わしい香りが、「入口」に通りかかった私を一瞬捕らえたのであった。

遠くの大学に通うために県外で一人暮らしをしたり、家族以外にも心を碎く対象ができたりして、さらには今日の前にある現実的な悩み事が防波堤になりもして、ナイーブの波は、くるぶしをかすかにかすめる位に、相対的に低いものになってしまった。ここ数年は休暇があつても家に帰っていなかつたし、自分が本質的に求めているものに鈍感になっていたのだと思う。色々考えてUターンを決意し、今年私は「入口」を通って集落に戻った。けれども、永久にとうのではなく、私はまたすぐに集落を出ることを選ぶだろう。

私という個人を成す、重要な本質のひとつに、この集落への、この家への帰属意識がある、と

知っていることが、次の自分の支えになるはず、と希望を持って、今度は出口としての「入口」を左に曲がって、波を感じながらずんずん進んでいくのだ。

## 奨励賞 父の外套

由利本荘市 坂 本 愛 子

しつかりしている上に、四隅の力布も傷んでおらず、この家が建って三十年余りの間ここに眠つていただらうことが想像された。

行李のふたは意外にもなめらかに開いた。折り目が変色した「秋田魁新報」の下から出てきたのは、黒いオーバーコートであった。父なら「外套」といったであろうそれは、一枚で

「二月またぎ」を嫌う、といつて、忌明法要は葬儀の翌月中に、というのがこの地の慣わしである。五七日に四十九日の法要を済ませると、あとは片付けをするだけになつてしまつた。

父は晩年まで足腰が達者だった上、その世代の人らしく物を捨てることができなかつたので、屋根裏の物置きは壁が見えないほど段ボール箱が積み上げられていた。季節も素材も雑多な衣類がつめこまれた箱からごみ袋に移し、空いた箱は置んでひとまとめにする。十枚一組のごみ袋はあつという間に底をつけ、あわててスープーに走つた。四方の壁が姿を現したのは、傾いた日差しが小窓から斜めに射し込むころだつた。

舞い上がつた埃が光の筋を描くその先、垂木にぶら下がっているのは柳行李であった。

縛つてある真田紐は、埃とも油ともつかない汚れがべつとりとつき、結び目がどこかもわからない。紐を切ると予想外の重さで、ようやく抱えおろした。行李は汚れてはいるが、造りも

七年三月四日の新聞というからには、翌月の婿入りに備えて、父の母が荷造りしたものであろうか。

父は近在の農家の三男である。

ただでさえ冷や飯食いと言われるその上に、跡取りが若い嫁と二男二女を遺してみまかつた。親戚一同協議の結果、遺された嫁に遠縁から婿を取り、長男までのつなぎにしようとしたが、よほど相性が悪かつたと見え、一子を残して離縁となつた、その一子が父である。

父の母はその後二人目の婿をもらい、末娘をもうけて終生をともにした。この婿は穏やかな人柄で、外孫の私も可愛がつてもらつたが、父は跡取り息子と実の子に挟まれた上、離縁した男の息子である。居心地を云々する前に居場所がなかつたことであろう。

小学校を終えた父は、実父の兄の家に「若勢」という奉公に出る。伯父甥のゆえだけでもなく、食事にしろ風呂にしろ、家族と奉公人を隔てるらしい。鰻採りの仕掛け、盆踊り、兎ワナ、闇鍋……。機嫌のいいときの父の昔話は「太郎右衛門の家さ居たころ」に始まつた。

昭和二十年春、海軍に召集されたものの乗るべき船はすでになく、間もなく戦争は終わつたから故郷に帰れと言われた。初めて見る倉庫には砂糖やら毛布やらがうず高く積み上げられてゐた。背負えるだけ背負つて、松島から鳴子、雄勝と、歩いて帰つて来たという。

この外套も軍用品の一つだったのであるまいか、と思うがもはや確かめるすべもない。

戦後は、農地改革で失職した「若勢」仲間と工事現場を渡り歩いていたが、三十歳を前に、いつまでもそうしてはいられまいと母親が勧めたのが、婿入りの話であつた。

近くに、東京大空襲で焼け出されて実家に疎開してきた家族がいる。田畠こそないが二親はどうらも近在の出で氏素性が知れている上、父親は役場勤めで食うには困るまい、その三人娘

の長女の婿に、と言う話である。

「釣り合わぬは不仲のもと」という。

父は額に汗して働くよりほかの生き方など想像もできない人であった。対して母は、娘時代を「今日は三越、明日は帝劇」と暮らしたお嬢さんで、田舎暮らしに馴染むことを拒み、権高に孤高を保っていた。

どちらが良いとか悪いというのでもない、優劣でも高低でもなく、住む世界がまったく違っていたのだと思う。

気の合わぬ妻や隔てのある舅姑に鬱屈した思いを抱いていた父は、若勢仲間と出稼ぎに行くようになり、六十歳の声を聞くまで、気ままな飯場暮らしを止めようとしなかった。

昭和三十年代には神武以来という好景気で、事物はことごとく新たになった。外套は雨合羽に、やがてアノラックが普及するようになる。

父の言い方では「アノラック」は「アマラック」で、「雨楽」と聞こえた。風雨も寒さもものもしない「雨楽」は、父にとっては、新時代の象徴のようなものであったのである。最晩年、

通院にもデイサービスにも「アマラックを着る」と言い張ったことが思い出される。

だが、父の外套が婿入り以来日の日を見なかつたということは、着る必要がなかつたということにほかならない。

気の合わない夫であり、不足な婿であつたとしても、最新のアノラックを着せるだけの心遣いはあつたということではあるまいか。

父の外套は、迷いつつもごみ袋行きとなつた。大サイズのごみ袋は、その一枚だけでいっぱいになつた。

行李に敷かれていた新聞紙の裏は、秋田大学の合格者一覧であった。個人情報もプライバシーもない、のどかな時代であつた。

学芸学部の合格者に友人の父上の名を見つけた。後日、手紙を添えて友人に送つたところ、とても懐かしがられたという。

父の外套も、思わぬところでひとさまを喜ばせることになつたものである。

## 奨励賞 マリア観音

秋田市 石山 敦子

湯沢市寺沢・平方山林の小高い丘に、子どもを抱いたマリア観音が安置されている祠がある。駒形の雲岩寺にも秘仏として普段は見せて貰えないマリア観音があった。

どちらも目鼻立ちちは日本的であるが、坐した姿でヴェールを被り、左手で子どもを支えている。今まで見てきた観音像とは明らかに違った雰囲気を持つ。

雄物川の北西に築かれた山城・小野城址の中腹にも切支丹の遺構があつた。石を積んだ土台の上にある祠の中には鉢まさがりを持った「山の神」が鎮座していた。しかし、石で作られた祠の裏側にはくつきりと十字が彫られていた。

いずれも江戸時代、マリア像の代用として隠れ切支丹が密かに礼拝をしていったのであろう。ごそごそとした石に柔らかな曲線が施されて霞がかかつたような表情を見ていると、静かな祈りの声が聞こえるような気がする。

湯沢市周辺には、江戸時代初期から開発され

た院内銀山を始めとする鉱山がいくつもあった。隆盛期の鉱山には全国から多くの人が移動して来ていた。その中にキリスト教の伝道師も信者もいた。

『秋田県史』によれば「キリスト教が秋田藩領に伝道されたのは元和元年（一六一五）以降であつて、西日本で開教された時から六〇余年の遅れがあり、しかも江戸幕府が全国的に禁教令を交付した時点を契機としていることに特色がみられる」とある。

禁教令が敷かれて伝道の自由が失われると、鉱山が布教の中心となつた。唯一鉱山は藩の支配を受けない特権を有するところだった。流通経済が発達して、商人や鉱山稼働人の往来が割合自由だったといふ。

「出羽国の佐竹殿領仙北地方を巡回して、二〇〇人のキリシタンを発見した」という『日本年報』の記録を県史は記している。『日本年報』とは秋田藩領に潜入した宣教師が、マカオにいるイエズス会に送った報告書である。西暦で記されているため年月日に多少の相違があるが、数字や人名などの記述は詳しい。

翌日から図書館に通つて県史、市史、郷土資料などから関連事項を探し求めた。秋田藩の家老・梅津政景日記に短い一文があつた。「六月三日 一、御城御鉄砲にて罷出候 一、きりし

たん家三十二人火あぶり 内二十一人男、十一人女 一、天氣よし

政景日記にはこれ以後この件には一切触れていない。

県史には『日本年報』による詳細が記してあ

越えて人とともに運ばれてきたのであろうか。鉱山の多かったこの地は切支丹の隠れ家として恰好だった。

寺沢にある祠の麓に慰靈碑があった。「(略)

寛永元年（一六二四）、雄勝町寺沢在住の切支丹信者一五名逮捕され同年六月二十日久保田城外東三里谷内佐渡に於て処刑さる（略）

昭和四三年、当時の雄勝町町長が勤したものだった。裏書には一五名の名前があった。

「谷内佐渡」の地名に息をのんだ。私の住む

近隣である。そしてマリア観音は谷内佐渡に向かって北向きに置かれているのだという。谷内佐渡という地名が、今まで感じたことがなかつた殉教という生命の犠牲を重く受け止めるきっかけとなつた。

る。この頃久保田の獄中には堅信の四二名が捕えられており、内二〇名は武士だった。一三歳

の子どもとその家族は火刑に処せられ最初の殉教となつた。その後六月一日、各地で捕えら

れ獄中にあつた二二名にその妻三名を加えた二五名が久保田で斬首。同日、院内銀山の二五名

が三日かけて徒步で久保田へ送られ斬首。同年七月三日、善知鳥の二三名が横手で斬首。同年

七月二二日、寺沢の一四名は久保田に召し上げられ、投獄されて拷問の末斬首。同年八月六日、

仙北地方薄井で捕えられた四名斬首。名前もしつかり記録されている。

処刑の地については「久保田城外」とある。『日本年報』に Iamai と記されて「ヤナイ」と読み、谷内佐渡ではないかという推量をたてたのであろうが Janai は Innai の誤りだとするならば、谷内佐渡に連れてこられたのではなく院内から連れてこられたという解釈のほうが私としては、すつきりする。当時の城内及び城外図を見ても谷内佐渡という地名は見当たらない。

「城外三里」は「草生津」ではないだろうか。湊に於て火刑し、同月四日、市街草生津にて斬首」という記録があった。

今からちょうど三九〇年前、この地秋田で大勢の切支丹が命を失つたことを知つた。そこに至る光景をその迫害をマリア観音は見ていた。

人々の語りかける声や願いを聞いていたのだ。神の下では皆平等だと説く教えに希望を抱いた人々の心の拠だつた。小野城の山頂へ至る遊歩道の他に、古来はもつと南側からづら折りに登る道があつたという。今は訪れる人もなく、ただひつそりと「山の神」として佇んでいる。

雲岩寺のマリア像はどのような経緯でお寺に運ばれたのか住職もご存じなかつた。弾圧、迫害によって切支丹は減少したが、秋田藩は訴人に賞金を与える高札を出して監視を強めた。さ

らに、檀那寺に切支丹ではないという証明をさせた寺請制度や類族改めによって切支丹は元より、棄教した人も子、孫、玄孫にまで至るまで厳しい規制を受けたはずである。

「踏絵」を用いて「転び」を強要したお寺が、マリア観音を秘仏として安置しているのは解せない。

居心地が悪くはないかと心配するのは邪推であろうか。

(参考文献)

『梅津政景日記』東京大学史料編纂室

『秋田県史 第二卷 近世[編上]』編集秋田県

（昭和五二年発行）

『秋田市史 上巻』編集秋田市（昭和五〇年発行）

『秋田切支丹研究』武藤鉄城著 翠揚社

『八橋・寺内・川尻・千秋公園道しるべ』飯塚

喜市編著

『秋田市歴史地図』渡部景一編著 無明舎出版

『秋田県地名大辞典』角川書店

## 入選 M君に誘われて

秋田市 加 藤 トシ子

「野口英世記念館」に着いたのは、五月も末のある日の夕刻だった。秋田から車で、不慣れなタブレットをナビにして、ついに辿り着いたのだ。間もなく閉館という時刻だったから、明日ゆっくり見学することに決め、その日は近くのホテルに泊まることにした。

してやることもできないのだった。  
そんな時、研究授業をすることになり、その題材が「野口英世の母の手紙」だった。  
野口英世について私は、小学生の頃、「偉人伝記全集」で、子供向けに書かれた伝記を読んだ程度の知識しか持ちあわせていない。参観者も随分多いというのに……

図書館で野口英世に関する数冊の本を借りて読むうち、私はすっかり、英世にのめり込んでしまった。

日本が世界に誇る偉人としての英世とは別の、嘘つきで女が好きで、借金王、等々、人間的で、

思えば、担任のクラスの国語の授業で「野口英世の母の手紙」を学習してから、二十五年も

の時が過ぎている。その私のクラスにM君はいた。

M君は眞面目で誠実、温厚で人なつこく、数学が得意で、スポーツも音楽も好きな生徒。しかしM君には難治性の持病があり、そのうえ、

その病気は進行性のものであることを、ご両親から聞いていた。頭のいい彼は、病気を十二分に理解し、明るく振る舞っていたから、いつそ

う氣の毒でならなかった。少しづつ、しかし確実に進行する病状を心配しつつも、私にはどう

たのかんのんさまに。さまで。ねんよこもり

(毎年夜籠り)をいたしました。べん京なぼで

もきりがない。(中略)ドカはやく。きてくだ

され。(中略)はやくきてくたされ。はやくき

くたされ。はやくきてくたされ。いしょのたの

みて。あります。にし(西)さむいてわ。お

かみ。ひかし(東)さむいてわおかみ。してお

ります。きたさむいてわおかみおります。みな

みたむいてわおかみ。しております。(後略)

読めば読むほどに涙を禁じえない。切々とし

て真情溢れるこの手紙こそ、名文中の名文といえる。

極貧の農家に生まれ、幼くして両親と別れ、祖母の手に育ち、七歳で他家に雇われ、終生、働きづめに働き、囲炉裏の灰に字を習ったという英世の母。逆境と辛苦に耐えたこの母の、子を思う至純の愛に、生徒達も感銘を受けたようだ。

この学習も終わり、次々に題材はかわって夏休みに入る頃には、M君の病状は更に進んでしまった。中でも視力が目に見えて落ちていたのだが、私は本当に無力であった。

さて夏休みも終わり、二学期始業式の後、M君が照れながら、にゅっと紙袋を渡して、「お

土産です」という。

英世の母の手紙が面白かったから、両親と夏休みに英世の生家を見学に行つたのだという。両親にとって彼は、正に「掌中の珠」だ。

私が貰ったのは、「野口英世の母の手紙」巻紙全文の複製で、白い筒に入つたものだった。リアルな筆跡も痛々しい。

全く思いがけないことだったので、私がすぐ感激した事はいうまでもない。が、それにもまして、まだ彼の目が僅かに見えるうちに、英世の生家を見てることができて、本当に良かったと、心から思つたことを思い出す。

その後、私は転勤してM君とは離れてしまつたが、ある会合でM君が亡くなつたことを知つたのだった。彼はまだ、二十三歳になつたばかりのはずだ。

葬式はとっくに済んでいたけれど、すぐに県北の彼の家を訪ねた私をお母さんは、涙とともに迎えてくれた。仏壇と生前のままの彼の部屋に案内してくれ、その後の事を、止めどなく話してくれたのだった。親子で行つた野口英世記念館とその生家は、想像以上に熱心に見ていたということ。

以来、私はM君がそれ程に思いを込めて訪ねた記念館に、いつか行ってみたいと、心のどこかにずっと秘めていたような気がする。

記念館の場所をまず確認した翌日、ほぼ開館と同時に、勇んで入館した。

四月にリニューアルしたばかりという鉄筋一階建ての堂々たる記念館。隣には、記念館とはあまりに対照的な英世の粗末な生家。生家には英世が火傷した囲炉裏もそのままだ。

今にも消えてしまいそうな弱い視力で、あの子は、どんな思いで見て回つたのだろうか。

不思議なことに、ゆっくりと巡りながら私は、ずっと隣りにM君の気配を感じていたのだ。それは気のせいなのかもしれないし、単に感傷なのかもしれない。しかし確かに、彼と会話をしながら巡っていたのである。

そうしてあらためて、野口英世という人が、どんなに素晴らしい、非凡で、努力の人だったか、人としても偉大な人だったかということを、心底、思い知らされたのだった。

苦境の英世が、いつも励まされたという、彼の故里の磐梯山と輝く猪苗代湖を見て、心満たされて、秋田への帰路についたのだった。

なにより、ここに私を誘い、一緒に歩いてくれたM君に、心から感謝しながら。

## 入選 三十九の一

大仙市 佐々木 容子

東日本大震災から四年が経った。二〇一五年の初めにはテレビや新聞から、東日本大震災の風化という言葉が聞こえてきた。

甚だな被害に強い緊張を強いられてきた。肩に力を入れて被災地を日本中が、いや世界中の人が見守ってきた。時間の経過や、はっきりと見えてこない復興が、風化という言葉になっているのかも知れない。

しかし、伝えたい。心の底から、被災地のこと、被災されたみんなのことは見守っていると。四月二十二日から二泊三日の、宮古市田老保育所でのボランティアを、今回も無事に終えた。昨年の七月と十月に行って、三回目だった。この活動は、田老保育所支援ボランティアをしている友達に誘われて始めた。

両親、姑の介護から離れて、少しは社会貢献を考えていた時期だった。気になっていた東日本大震災の被災地でのお手伝いを、やっとすることができた。

大仙市から田老町までは、車で約五時間をする。

昨年の七月に、初めて訪れた時の印象が強く残っている。

「仮設住宅前」という表示のバス停を曲がり、ずらりと並んだ「仮設住宅」に到着して、被災の一部にふれただけなのに何とも気が重くなつた。

テレビ、新聞で目にして、聞いていた「仮設住宅」。突然につきつけられ戸惑つた。隣家とは壁ひとつで区切られ、室内は四畳半が四つの広さの正方形な中に、台所、トイレ、洗面所・浴室、居室二つがコンパクトに配置されていた。「仮設住宅」の一軒を拠点にして、これから始まる保育所での手伝いに身が引き締まつた。

時刻は、十一時四十分なので、とりあえず持つてきたサンドイッチと果物の昼食を摑って、仮設団地から一分ほどの所にある保育所に向かった。

定員六十人の田老保育所で、保育の裏側の仕事を午後一時から始めた。  
こどもと向き合う保育士、その裏側にはさまざまな作業がある。日々の保育を展開する前に、

環境の構成・準備として細かく段取りをする。仕事は三つあった。一つめは九月の運動会に向けてのものだった。壁に貼って雰囲気を盛り上げる壁面製作と、会場を飾る緑と黄色のはなし紙での花作り。二つめは、水遊びの足ふきマット用として使う、バスタオルの四隅に幅広ゴムの縫い付け。そして三つめは、ダンボール箱を利用してのボックス作り。

私が保育士として働いていた時は、これらの作業は、こども達が昼寝をしている時や、こども達が帰つてからの仕事だった。環境構成に少しでも手伝いをもらうと助かる。

保育所のボランティアと、保育士のサポートと考えられるがちだが、ひと月に一回、毎回違つたメンバーが来て、こども達と触れ合い二泊三日で帰ると、こども達は落ち着かない。

そこで裏側の作業のボランティアを考えたことは妥当だ。

重い気持ちで保育所に入ったが、こども達の「むすんでひらいて」や、「大きなないこドーンドン小さなないこトントントン」と歌う声を聞いたり、喧嘩したりして泣く声を聞きながら、はさみや糊で造形する仕事はとても心地よかつた。

三歳以下のこども達が、ビニールプールには  
られたぬるま湯で、水遊びを楽しむ声に癒され  
ながら針を運んだ。

被災直後は、泥のかき出し、炊き出し、物の

整理と重労働作業があつたと思う。被災から三

年経つて、ある程度落ち着いたところでのボラ  
ンティアに携わって、不謹慎かもしけないが、  
保育所の裏側、以前にした仕事をこども達の声  
を聞きながらやることは、とても嬉しい作業  
だった。

夕方、こども達が少なくなり陽がかけつてか  
ら、職員達が鎌を使って雑草抜きをしていた。  
私はにそのことをさせずに、自分達のできるこ  
とはしようとしていることに頭が下がった。そ  
の姿は、以前の自分達の現役の時の姿と重なつ  
た。出られる職員で園舎の雑草抜きをしたこと  
がよみがえった。

毎回のボランティアで、心がけていることが  
ある。朝食前の散歩で、ベンチに腰掛けている  
お年寄りに出会つたら、「おはようございます」  
と早めに挨拶するようにしている。それ以上の  
言葉を発することはためらわれる。「仮設住宅」  
の周辺で出会つた方に、「こんにちは」の挨  
拶はでるのだが、それ以上の言葉はかけられな

い。自分に今できることは、出会つた人達に元  
気に挨拶することだけ。

二〇一一年三月十一日を語るには、私の持つ  
ている言葉は単純過ぎて語り切れない。深く大  
きな悲しみを体験した方達に、寄り添う心は持つ  
ている。できることはそれだけ。

プレハブの「仮設住宅」は、一から四十二棟  
あり全部で二百四十八軒。

私達が一泊三日を過ごした家は、三十九の一  
だった。

## グリーン賞 先生と私

すると家に来ていた先生が、「うちに練習しにきたら?」

「言ったのがきっかけだ。ピアノを

「先生。この着物どうすればいいですか?」「置むのよ。自分で着たんだから」

「え?」

由利本荘市 森 山 比 路

習っていたもう一人の友人を説き、それから先生の家に足繁く通った。

幼少の頃を思い出すと、ずいぶん「おばあちゃん」にお世話になつたように思う。

それは、自分の血が繋がつたおばあちゃんに限らず、そうじゃない、近所のおばあちゃんもだ。

近所に住む、一人で暮らしていたおばあちゃんに、私は大変お世話になった。小学生の頃の時間を、ほとんどそのおばあちゃんの家で過ごした。そのおばあちゃんは、近所の人から先生と呼ばれていた。昔学校の先生で、とても博学だったから、町内の困ったことはみんなそのおばあちゃんに相談していた。私も例にならって先生と呼んでいた。

しかし先生は、おばあちゃんと呼ぶには背筋はしゃんとしていて、年齢の割に若く見える人だった。

そもそも、先生の家に通うようになったのはピアノの練習の為だった。当時、私はピアノを習っていた。が、全く練習しない子どもだった。

洗濯物でさえ自分で畳んだことがないのに、ましてや着物なんてと、尻込みする私たちを気にせず、先生は広げた着物の近くに立つた。

「いい? 襟えりをそろえて衽おぐみと衽おぐみを合わせて」

「おくみつてここですか?」

「違う違う。そこじゃなくて、そこの細長いところよ」

うまくできると先生は、

「着物を上手に畳める子なんて、最近あまりいらないんじゃないかな?」

と、自慢げにいつも言つた。ついでに、着物を包む風呂敷の正しい結び方も、しっかり覚えている。

先生は口癖のように、「知らないよりは知つてることがいいんだから」となんでも聞かせてくれた。

今になるとそれがよく分かる。経験は何にも勝る。成長すればする程、自分の経験値の少なさと不甲斐なさを痛感する。いろんな場面で緊張するし、もっとうまくできる近道が知りたい。

でもそれは、いろんなことを経験して、やっと

知ることができる。先生に促され、一から十まで教えてもらつてやつと取りかかるようなことはいけないのだ。昔のようにはいられない。

そう思うと、当時は先生のもとで贅沢な時間を過ごしたと思う。先生の言葉や教えは、私の人生をきっと豊かにしてくれた。ピアノも練習せず、ただ友達と過ごしただけの時間では手に入らなかつた。

その先生とは、中学校に入つてから段々疎遠になつてしまつた。今でもたまにお会いするが、先生は瘦せていき、私の背は少し伸びた。

先生が教えてくれたことは、直接生きていくことに関係することではないだろう。でも、確かに私の血や肉になり、今の私を作る一部になっている。

グリーン賞 『おくのほそ道』に記された  
今はなき郷 象潟

秋田市 渡辺芽衣

高校の古典の授業で『秋田ふるさとの文学』という本を使い、松尾芭蕉の『おくのほそ道』の象潟章段を学習した。教科担任の先生が、その本の松尾芭蕉の部分の執筆者であり、また、私たちの郷土に関わる文学であることもあって、とても興味深く授業を聞いた。その授業を聞いて、さらにそこで考えたことをまとめてみたい。

授業で、当時の象潟を再現した象潟の歴史資料館にあるジオラマの写真を見た。横に一キロ、縦に一キロの潟に大小約百の島が浮かぶ、非常に美しい風景で、日本有数の景勝地である松島と似通っているだけでなく、さらにすぐそばに鳥海山がそびえていたかと思うと、これを見たであろう松尾芭蕉がうらやましく、なおかつ「これが今のお田に残っていたならば……」と、隆起のきっかけになった一八〇四年の地震を恨めしくさえ思つた。実際、後日家族とともに象潟を訪れたが、象潟の道の駅の展望台から

見た風景は、当時をしのばせるものがあり、なおさらその思いは強まつた。

非常にすばらしい風景だったからこそ、授業中に解説してもらった『おくのほそ道』に、どうしても引っかかる箇所がある。それは、

佛松島に通いて、また異なり。松島は笑うがごとく、象潟は憾むがごとし。

という表現である。松島に対する賛美は同じ東北に住む者としてうなずけるところだが、郷土の象潟が「憾むがごとし」と表現されることには少々納得いかず、教科担任の先生と一緒に考へていたら、面白いことが見つかつた。象潟の風景に対する芭蕉の記述は、それを単独のものとして考えず、松島を語った章段との比較で考えると、非常に対照的な書かれ方をしているということである。

松島章段では、松島の島々を、

そばだつものは天を指さし、ふすものは波にはらばふ。あるものは二重に重なり、三

重にたたみて、左にわかれ右につらなる。

芭蕉が象潟を「憾む」と表現したのは、松島の美しさを映えさせるためのネガティブな表現ではないとも思う。むしろ、「わび」「さび」「しおり」を追い求めた芭蕉にとって、「笑ふ」

それに對し、象潟章段では、象潟の風景を、風景一眼のうちに尽きて、南に鳥海天をさへ、その影映りて江にあり。西はうやむやの閑道をかぎり、東に堤を築きて、秋田にかよう道はるかに、海北にかまへて、波うち入るる所を汐越といふ。

と表現している。松島とは逆にそれぞれの表現が持つベクトルは外に広がるものではなく、むしろ閉じたところから内に向かうものであり、閉鎖性や内向性を持つているように思われる。

このように、松島は外向、象潟は内向的な表現がされていることを、人間の感情と重ねてみると、松島は、笑ふ=明るさ=外交的心情、象潟は、憾む=暗さ=内向的心情といった重ね合せが可能であろう。芭蕉が二つの光景に対し出した結論「松島は笑ふがごとく、象潟は憾むがごとし」は、その風景の表現に支えられて、読者の胸にすとんと落ち着くのではないだろうか。こう考えたとき、素直にこれを描いた芭蕉は天才ではないかと思つた。

また、芭蕉が象潟を「憾む」と表現したのは、松島の美しさを映えさせるためのネガティブな表現ではないとも思う。むしろ、「わび」「さび」

松島より「憾む」象潟の方がフィットしたのではないかと思うのは、私が郷土に対してひいき目にみているせいだろうか。

大地震による隆起で陸地となつた郷土の象潟が、以前は松島と並ぶ景勝地であったことは、秋田に住む私たちでさえほとんど知らず、風化つつある。しかし、松島が、象潟同様に先の東日本大震災で大きな被害を被りながらも奇跡的に姿をとどめていてくれることと、芭蕉が、象潟を松島との対比で語り、その『おくのほそ道』が現在も広く読み伝えられることにより、私たちは象潟の美しい風景を思い起こすことができる。奇跡的にも象潟は当時の姿を後世に残すことができたのである。

私は文学を学びたいと思っている。『おくのほそ道』に限らず、それぞれの文学作品には、まだまだ解き明かされていない大きな意味と伝わり切っていらない筆者の思いが残されているのではないかだろうか。

秋田に住む私たちは、自然が残してくれ人々が大切に守り抜いている松島の存在と、先人（芭蕉）が残してくれた文学に感謝しつつ、この郷土の素晴らしい風景を今度は自分たちの手で後世へと伝えていかなくてはいけないとと思う。

# 最優秀賞受賞の一ひとば

## 受賞によせて

## 楽しい継続

## 叶う夢

詩部門　十田撓子

俳句部門　塚本佐市

川柳部門　藤咲子

昨年に続き、このたびも最優秀賞をいたぐことになり、そしてこのようない表彰式を催していただき、誠に光栄に存じます。

今回の詩は、現代ではみることのない水葬を扱っています。個人的な喪失つまり人の死を最終的に受け容れること——殯<sup>もがり</sup>を、類想の誤解を恐れずに、私自身が或る歌に没頭することを得た、その内的体験としての水葬を描いています。

三八八八　奥つ國領く君が染屋形黄染の屋形神  
が門渡る（萬葉集卷十六　怕しきもの）

おそろしき！みてはならない／みることのない

ものを歌った三首のうちの一首です。

選考にあたり丁寧に作品をお読みくださった審査員の方々に、心より感謝申し上げます。

この度の賞は傘寿のお祝と受けとめ、仲間の

皆様と喜びあいたいと思っております。

秋晴の空に白神山地があおあおと翼をひろげており、世界遺産になつてからはなおのこと莊嚴な存在感が増したように思われます。

山には里山から名山に至るまでさまざまですが人間生活には欠かせない宝であり、その活用以上に沢山の恩恵に浴しております。

今回は石山を題材にしました。従つて客観的な描写に終始しましたが選考の先生方からひろいあげていただき御礼申し上げます。

「あきたの文芸」の存在はありがたく、応募することは楽しみの一つです。昭和四十五年の初めての応募でいきなり秀逸になり驚きました。

以後四十六年間でけるだけ応募して落選もしました。一人よがりの作品を反省しながらこの後も継続して参ります。

過分な評価をして頂きました先生方及び川柳を愛する仲間の皆様に感謝申し上げます。

いつか、子供が大きくなり私の手を離れたら詠んでみたいと思っていたのが川柳でした。そんな夢を心に抱いていました。

## おもいを文字に

エッセイ部門 佐々木 真知子

気持ちが波立つて収まらない時や、不安や悲しみがたまってしまつた時に、そのおもいを文章にすると落ち着きます。そして、後で読み返すと力づけられることがあります。

この作品も、いつもとは違う、平常ではなかつた自分たちの心持ちを言葉にしました。家族にとって今までになかった状況を乗り切りほつとした時に、記録に残しておきたいと考えたのです。

そんなおもいをただ文字にしたものが、このような賞をいただくことができて、驚きとともに格別の喜びです。これからも書き続けなさいという励ましたとらえました。

ありがとうございました。感謝いたします。

# 選評

## 小説・評論



### 作品の質を 高めるには

渡 辺 修

今年の応募は三作減の十二作と、やや寂しい状況だった。

奨励賞を受賞した二作は、応募作の中でも突出して巧さを感じさせる佳作であった。

「ナメクジと七色の羽の鳥」は、一番に押した作品。構成力、表現力とも高く、また読みやすさという点でも高く評価した。

コンプレックスの故にいじめに怯え、クラスの女王的存在の生徒に支配されていた主人公が、創作の悦びに目覚め、自立していくというストーリーは正直ありきたりだが、みずみずしい感性が感じられる独特の語り口で気持ちよく読み進

めることができた。

主人公はタイトルのとおり女王を美しい鳥に、自らをナメクジに例える一方で、女王にへつらう女生徒を「みみず」と即断する。卑屈になりきれない心の抵抗を感じさせる瞬間で、その表現には大いに感心した。

結末には復讐というカタルシスが用意されて

いるが決して陰惨にならず、特にラストの一文は秀逸である。読後感の爽やかさは特筆してよいだろう。

残念なのは、主人公のコンプレックスの原因が「三日に一度しか風呂に入れない」という設定の弱さである。頭髪は水でも十分洗えるし、身体は絞ったタオルで拭けばよい。電気やガスが止まつてまず困るのは、明かりや風呂ではなく、食の問題だ。困窮描写にリアリティがないのは、経験の不足だろうか。

「ふるさとの肖像」も評価が高かった。「ナ

メクジ」がライトノベル的な巧さなら、本作は本格派の巧さである。

主人公が希望と静かな闘志を抱くラストの割には、本作の読後感はやや暗い印象だった。

入選は二作。「びゅうてぃふる」は性同一性障害という難しいテーマに挑んでいる。興味本位にならず、真摯に向き合った内容が好評価を得た。ただし、主人公が「素直な自分を抱える」に至る、赦しの理由づけとして、少女を出現させたラストはあまりに強引で、成功していない

れていく。そして美術館設立の構想を知り、その実現に尽力しようと決心する。

作中で描写される未之助の絵は、イメージが鮮烈に伝わってくる。審査員が三人とも実在のモデルがあるのではないかと疑うほど、迫真的描写力である。絵に寄せて語られる寅一の回想は、切なく胸に迫る。

主人公が美術館設立にまでのめり込んでいく背景には、彼が歩んできた人生、家庭環境に何らかの陰があるので、と思わずにはいられない。そこをもっと丁寧に描いてくれたらと、残念に感じた。

また、父親の絵の価値や美術館の実現に懷疑的な寅一が、主人公と会ったことをきっかけに、何らかの救いや希望を与えていたら、読後感が明るいものとなつたと思う。

主人公が希望と静かな闘志を抱くラストの割には、本作の読後感はやや暗い印象だった。入選は二作。「びゅうてぃふる」は性同一性障害という難しいテーマに挑んでいる。興味本位にならず、真摯に向き合った内容が好評価を得た。ただし、主人公が「素直な自分を抱える」に至る、赦しの理由づけとして、少女を出現させたラストはあまりに強引で、成功していない

と感じた。

「縁側のナツさん」は、ほのぼのとした雰囲気がよく伝わってくる作品。次は雰囲気だけではなく、小説としての面白さにも心を碎いてほしい。応募原稿には、表記の基本ルールを逸脱している部分がみられた。書き慣れていないのではなかと思う。次作に期待したい。

選に漏れた作品では、「幻影・港祭り」、「藤棚の下で」、「ヤマボウシ号」の三作に光るものがあった。諦めずに挑戦を続けてほしい。

今回も応募作中、多くの方の原稿に誤字・脱字、構成の破綻が見られたのは残念だった。

推敲は作品の質を高める上で重要だ。一度で

完全な原稿を仕上げることはプロの作家でも困難である。時間の許す限り推敲を重ねるべきだろう。

書き上げた作品のあらすじを、自ら「百字程度にまとめてみると、冷静に振り返ることができる。初心者の方は試してほしい。

「縁側のナツさん」と「びゅうていいふる」は、同様の構成で、どちらも物語の構成が巧みで、登場人物の性格がよく描かれていた。特に「縁側のナツさん」は、物語の構成が非常に優れており、物語の展開がスムーズで、登場人物の心情や心理が丁寧に描かれていた。

「縁側のナツさん」は、物語の構成が巧みで、登場人物の性格がよく描かれていた。

「縁側のナツさん」は、物語の構成が巧みで、登場人物の性格がよく描かれていた。

「縁側のナツさん」は、物語の構成が巧みで、登場人物の性格がよく描かれていた。

「縁側のナツさん」は、物語の構成が巧みで、登場人物の性格がよく描かれていた。

「縁側のナツさん」は、物語の構成が巧みで、登場人物の性格がよく描かれていた。

「縁側のナツさん」は、物語の構成が巧みで、登場人物の性格がよく描かれていた。



## 何に焦点を当てるか

加賀谷 真澄

今年度初めて選考委員を務めることになり、緊張と期待をもって応募作品に向き合った。

全作品に共通して言えるのは、着想の良さである。身近な素材であっても、他とは違う角度からテーマに取り組もうとする姿勢が見られた。しかしながら、その良さを生かしきれていない作品が多い。核となる部分に焦点を当て、掘り下げるに意識を向けて欲しい。

今回、最優秀賞は出なかったものの、構成、

人物造形とともに巧みな作品が奨励賞に選ばれた。「ナメクジと七色の羽の鳥」と「ふるさとの肖像」の二作品である。

「ナメクジと七色の羽の鳥」の主人公は、家庭環境に問題があり、それが学校生活にも影響しているマイナスポイントだらけの少女。しかし彼女は、クラスの女王に、得意な創作で打ち勝つ。自信を持つことで、心理的な隸属状態から脱するのである。学校を舞台にした物語にあまりがちな図式だが、巧みな構成と文章力によっ

て既視感を感じさせない。また、作中作である幽霊の居酒屋の物語も、少女の繊細で大人びた感性を映し出す効果的な装置となっている。

「ふるさとの肖像」には、同年輩の男性一人が登場する。一人は数年ぶりに秋田を訪れた男。もう一方は人生のほとんどを地元で過ごした男。小川未之助の絵よって呼び起こされる両者の内面的な動きが対照的に示される。前者は、故郷を想うノスタルジー。それが、生き甲斐へとつながっていく。後者は、痛みを伴う家族の記憶。物語には、二つの視点があるため、深みが生まれ、さらに、画家の生涯を、両面的に捉えられる仕掛けとなっている。

入選作は「縁側のナツさん」と「びゅうていいふる」。「縁側のナツさん」は、タイトル通り、縁側の日だまりを感じさせるような物語。近所の人との交流や娘との会話、亡夫との思い出から見えてくるのは、「ナツさん」の穏やかな人柄である。やや平板なストーリーだが、あたたかみがある。

「びゅうていいふる」は、性同一性障害という難しいテーマを扱っている。追いつめられた「私」が、ある出来事をきっかけに精神的に成長する。視覚的なイメージは、主人公の内面を

知る手がかりとなるが、もう少し厚みのある肉付けが欲しい。

選に漏れた作品にも触れておきたい。

「春雄くん」は、家族三代の物語。未来への明るい展望があり、読後感がさわやか。ただ、肝心の「春男君」の影がやや薄い。「幻影・港祭り」は、土崎港祭りを復活させた人々の思いが伝わってくる作品。空襲の場面や、爆撃後の惨状が迫力ある描写。謎の少女「カオリ」を生かす工夫が欲しい。「青春の旅—秋田3」で紹介される小野源三の伝記的記述や、イザベラ・バードの紀行文からは、時代とともに変容していく秋田の姿をたどることができる。引用を短くし、

テーマを絞るとよいだろう。「ヤマボウシ号」

は、語り手と子供たちとの、ほのぼのとした会話で始まる。後半とはギャップがあり、意外性があるが、読者を惑わせてしまう危険もある。

「藤棚の下で」は、偶然の出会いがきっかけとなり、主人公が過去を回想する。結末で、人生の選択に納得するのだが、もう一つ説得力が欲しい。「Etude～楽譜は語らない～」は、衝撃的な事件が前半で配置されているが、ストーリー全体に関わる要素ではないのが残念。アイデアを盛り込みすぎている印象。「私」は、説明的

な描写が多い。主人公をめぐる出来事の、どれか一つを深く描いた方がよい。「鉄道の交叉」は、激動の昭和史と、秋田出身のたくましい女主人公の人生を紡ぎ合わせた意欲的な作品。描く範囲が広いため、展開が急ぎ足。長編向きの

テーマだと思われる。

(秋田県立大学)



## 原風景

高 橋 貢

誰しも、心の内奥に、「原風景」とでも言うべきものがある、と私は思っている。自分の精神世界の真の出発点となつた出来事、その光景…。私は小説や詩を読むたびに、この主人公の、またはこの作者の、「原風景」は何であろうかといつも考える。書がざるを得ない何かと苦闘し、これを浄化し、昇華し、超克しなければ一步も前へは進めない、そうした思いが込められた作品が好きだ。別に自分の人生でなくともよいのだ。誰かの人生の代弁者に成り切り格闘する、それもまた作家の力量であろう。

「ナメクジと七色の羽の鳥」は、シンプルで歯切れのよい文章が心地よい。比喩的表現も巧みで、非常に新鮮さを感じた。工夫された表現が所々に散りばめられている。教師や友達等、主人公の人生を紡ぎ合わせた意欲的な作品。描く範囲が広いため、展開が急ぎ足。長編向きの人物造型は型どおりの感はあるが、逆にそれが明確な役割を与えた登場人物として精彩を放っている。内容的には「いじめ」を扱っているが、恐らく意図的に深刻さを回避し、軽い文体にしたことが成功していると思う。特に、最後の一行為秀逸。書く力には、そして創造力には、苦悩を浄化する力があるという主題に惹かれた。

「ふるさとの肖像」の末之助のモデルが誰であるかわからないが、もし筆者の独創であるならば、絵のイメージが実に具体的で素晴らしい。実在しているかのように、眼前に彷彿とする。ただ若干気になったのは、主人公があまりに簡単に末之助美術館創設に心を動かしているような印象を与える点である。主人公を駆り立てた内面的な衝動の源泉が、彼自身の人生にあつたはずである。欲を言えば、そうせざるを得ない主人公の過去の苦悩がもっと深く描かれていれば、その過去を背負った現在の主人公がより魅力的に立ち上がり、モチーフも更に鮮やかになつたのではないかと思われる。反面、画家の息子

である寅一は、大変よく描かれている。父を回想する彼の独白部分は、読み手に静かな感動を与える。

「びゅうていふる」は、個人的には一番好みの作品である。とにかく、文章表現が抜群に個性的で巧みである。

：遠くの稜線が赤く色付いてきた。山裾はまだ薄暗い。家々の灯りがぼつぼつと点いていくのを見ていると、孤独感に苛まれず、安心できる…。書き出しの数行であるが、こうしたセンスのよい詩的な感性を感じさせる表現が随所にある。非常に独創的な感覚が漂う文章で、最も魅力を感じた作品であった。性同一性障害を自覚している少年の苦しみと心の微妙な揺らめきが、周囲の情景と溶け合って、陰影豊かに表現されている。ある意味、心象風景と言ってもよいだろう。非常に現代的かつ難しいテーマであるが、説明をしない詩的な文体が軽妙さを生みだし、それが救いになっている。

「縁側のナツさん」は、平凡だが、そこに確かな人生がある老人の日常を淡淡と描いている。私はつい、昨年死去した自分の母を思い出してしまった。母のところへも、近所の老人が毎日集まり、いつも同じ話を繰り返していた。この

作品に描かれた世界は、今や秋田県内の田舎のどこでも日常的に見られる光景である。地味だが、しみじみとした佳作。ただし、語り手の不統一や、方言と標準語の叙述の乱れなどは少し気になった。

その他、「幻影・港祭り」は、素材に魅力があり、モチーフも際立っていた。ただ、語り手の視点や構成が今一步であると思う。現代の私を主に、戦後の私を描いた方がよかつたかもしれない。作品の完成度は物足りなかつたが、あらためて、人には書かざるを得ない何かがあるのだ、ということを感じさせてくれた作品で、印象に残った。

—詩は個人的な感慨から発動して、人類普遍の真実を描き出すものであると思う。ある詩人は、それを記録することの大切さを、繰り返し説かれていた。

それでも、多分、詩は消えていくものなのである。に、してもある。いつかどこかで、だれかの胸に小さな溜め息のごとく届くのであればと、願わないでいられない。……あ古書店や図書室の本棚の片隅で、じっと永遠のごとく今も息をひそめて眠っている、僕たちの想念。その、生きることに根ざした、悲しさ、いとおしさ。



## 詩

### 宿 命

見 上 司

詩には、そうした宿命がある。また、詩人には、そうした宿命があるのだと思う。

詩は消えていくものなのかもしれない。廃道の草群の中に埋もれた、古い碑に刻まれた文字

が、もはや誰にも読み取れなくなるよう。

—父が亡くなって、最初の夏が終わろうとしている。思い出を書き残そと、いくつかの詩句をなぞらえてみるけれども、思いは儘くちらついては霧散するばかりである。

僕は、何を詩にしていくべきであろう。僕の詩は、一体どこへ行くのだろう。

—詩は個人的な感慨から発動して、人類普遍の真実を描き出すものであると思う。ある詩人は、それを記録することの大切さを、繰り返し説かれていた。

## 最優秀賞「殯」

私は昨年の二月に祖母を、この三月に父を亡くした。かけがえのない肉親であった。そのことを未だ詩にできないでいることを悲しんでいた。そして、この人の激しく痛く渦巻く感受性を羨むほどである。この人とともに、私も、水辺で「青い玉」を拾い、胸が淨められ、泣ける思いを噛みしめる。今年度、群を抜く秀作であった。

## 奨励賞「さくら」

桜は、その花びらは、風のごとく軽く、命のごとく重い。数年前、亡父と最後に見た桜の花びらが、靴もとに幾重にも散り敷いた、あの田舎道の景色が思い出された。今は、分かる。人の命は本当に桜のようになくなっていくこと、それが、はっきりと分かる。…この古雅な抒情小曲が、私は好きだ。

## 奨励賞「赤卵」

この人の故郷と母を思う心に、私は胸を打たれる。「赤卵」を渡してくれた母の思いに打たれ、今も母の思い出を抱きしめて生きる作者の思いに打たれる。それを、私は、詩であると思う。言葉に稚拙さが残るが、それも味わい深い。

## 入選「忘れ水」

古い思い出を静かな口調で物語るような、独特の詩法である。比喩にも、独自性があり、表現力も豊かである。が、モチーフの弱さを感じる。古今東西の優れた詩や詩論を、さらに読まれることを勧めたい。

## 入選「野鳩が鳴くよ」

私は、こうした挽歌に心を惹かれる。私も、こうした詩を書きたく思う。散文的な表現であるが、私は、この詩の中に、人間の普遍の真実を見る。それは、かぎりなく尊いものであると思う。

## 入選「愚者の知」

萩原朔太郎は、詩はただ傷つき、悩む者の慰めであると書いた。そして、そこから、人間の生きることの真実を描き出そうと呻吟したのだと思う。この詩にも、それが強く感じられる。多少、言い古された表現が垣間見られるのは残念である。

## グリーン賞「偏頭痛」

多分、優れた感受性の持ち主なのであるう。

若い作者のユーモアとペースのセンスに、脱帽である。語り口調の言い知れぬリズム感。ひらがなと漢字の使い分けの見事なこと。さらなる作品に期待したい新人である。

三種町在住。県現代詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。「北五星」所属。



今、表現したい、  
人の為に

何故「詩」なのか。定型の中で言葉が暴れる場所を求めるなら文章という選択肢もあるのに、介な表現形態に魅入られた者は自然にその地を歩み出す。一度歩み出したなら、一步を確認して歩まねばならない。初めの一歩は「書きたい」で良い。書きたいテーマを見出し、或いは好きな作家の影響を受けて書く、そこから自分だけの言葉を探り、振り返り先の方向を定め、作品

が生まれたら描かれた表現地図を確認する。詩作は旅に似ている。どうせ一人の道、と滅茶苦茶な地図を描いて許されるのは文学史に名を連ねる様な詩人か文芸など必要とせぬ人間のどちらかで、一旦歩み出したら自分の言葉に責任を持たねば、次に腰をおろす石すら見えなくなる。自分で当たり前に長年使って来た文字や言葉の間違いが多い。書きつ放しでよし出来た、ではないけない。読み返し良しとした作品でも今一度、言語を確認してほしい。また、詩というものは作詞でなく、作文でもない。冒頭が詩でも、結びに向かうにつれ作文に傾く作品が多かった。七五調から抜け出せば優れた詩になる可能性を秘めた作品もあった。明らかに作詞だったものや、「秋田」を強調すれば良いかというとそうではない事を今後はご理解頂きたい。惜しい、と感じた作品には必ず「伸びしろ」がある。書いて推敲する事を重ねれば、言葉は自分の長旅の水になり、目の前の荒れ野に道がひらける。若いと感じた詩には抒情や独特の手法や反抗心、想像、素直な思いがあり、いずれも今後の可能性を感じた。逆に年配者と思われる人の作品には年輪ゆえの時代背景があり、それを詩の形態でどう伝えるかが課題になる。

全体的に応募数が著しく減っている。応募費用も一因と思われる。応募料に頼らずとも成立する方法はあるのではないか。教育現場で「あきだの文芸」が広がらないのも現実問題だ。文芸部が減っている中、ネットに自作発表している若者は多い。表現形態は違つても、演劇やダンス、音楽や美術などで自己表現する若者の中には「書きたい」人がいる。例えば盲学校の様な特別支援校の十代から六十代の学生の中には表現したい生徒が存在しているが、残念な事に「あきだの文芸」は知られていない。大学や短大、専門学校、サポート校にも沢山の原石が光を放っている。文化の振興を思うならその問題を、表現に関わる私たちも何とかしなければと思う。明日の日本文化を担う表現者が秋田から産まれる可能性を潰してはならない。

最優秀賞「殯」表現、技巧、構成全て、まさに「詩」。神道的な独自の世界観に音と色が際立つ。平仮名と漢字の使い分けなどに言葉と向き合う作者の姿勢がうかがわれる。

奨励賞「さくら」言葉の切れやリズム、構成が的確で詩的観察眼に人間の営みも浮き立つ。所々の文語に課題が残る。「赤卵」少年時代の苦い記憶が映画の如くリアルに胸を打つ。表現

に抽さが残る箇所を一考し、削る事で完成度が上がる作品。

入選「忘れ水」書き慣れた人だろう。佳品だが何か物足りない。「私」の内面と言葉を掘り下げればより良い詩になるだろう。「野鳩が鳴くよ」母と娘の愛情が静かに浮かび上がる。後に、削りを入れれば言葉はより深まる。「愚者」の知「自己」の内面をどこまでも負の方向でシニカルかつロジカルに表現した異色作。個人的に嫌いではないが難解。既存の表現は今後の課題。

グリーン賞「偏頭痛」結びはメルヘンチックだが、苦痛でしかないテーマを独自のリズムと新鮮な言葉で表現している。若い感性が心地良い。

詩誌「左庭」「北五星」同人

秋田県現代詩人協会会員  
日本詩人クラブ会員



## 多様な詩に ふれる試みを

石川 悟朗

にまとめた。

「忘れ水」は作者自身に重ねたのでしょうか。

幻想的な風景の中で「忘れ水」に語りかけてい  
る。おもむろにわたしは水に手をひたす

れ水」「野鳩が鳴くよ」「愚者の知」以上の六篇  
が選ばれた。「殯」は最優秀賞、「さくら」「赤卵」「忘  
卵」が奨励賞、「忘れ水」「野鳩が鳴くよ」「愚  
者の知」が入選となつた。「殯」は最初から最

後の連まで筋書きが明確でことばが洗練されてい  
る。死者を送る情景が静かに語られどこかナゾ  
めいてそれが余韻として残る。やや古風な描写

は現代ではめずらしい詩として異色に見えるか  
もしれない。「さくら」は軽いタッチで書いて

いるが、内容はとても重い。それをさらりと書  
いている。散っていくさくらに老いた母をイメー  
ジさせて巧みである。空っぽの空に新しいい  
のちを広げ」は、目の付けどころは並みの表現

ではない。こもりていた魂をふつふつと……  
この連にすべて凝縮されて秀逸である。「赤卵」

は亡き母への悔恨の情がじみ出ている。過去

の自分の振舞いを悔いて、嫌いだった赤卵を今  
は愛おしく食する心情がうかがわせてよい作品

たい。

どうしてわたしは詩を書くのだろうと思う時

がある。詩を書かせるものは何であるか。わた  
しの場合は、今現在の自分と違った自分になる

というか、自分の本当の姿が見えてくる。その

行為が詩となって現れる。現実から抜け出して  
自由になるという快感である。

そこで他の詩人たちは詩の中でどう生きてい  
るか、とても興味がある。だからたくさんの詩

を読むのは意義がある。

やさしい詩、ややむずかしい詩、とてもむず  
かしい詩などあるが、やさしい詩でもひつかか  
ることのある詩でなければならない。そのひつ  
かかるところがその詩人の骨であることが多い。

多様な詩を読んで自分の詩と比較してみる、  
いろんな問題が出て来る。このように他の詩を

読む経験を通して自分の詩はどうであるか、成  
長の手がかりとなるだろう。

最後に表記について気の付いたことを述べた  
い。詩にはどんな文字や記号を使用してもよい  
が、そのことばがその詩の中で効果的かどうか  
検討してほしい。カタカナをやたらと使用して  
いたり、むずかしい漢字を入れたり、判読でき  
ない文字を並べていたり気になった。

いろいろな詩を拝見し楽しませていただきだいた。  
年齢は十代から七十代まで幅広い年代の詩に接  
することができた。

詩を書くということだけでもすばらしい  
行為である。機会をとらえて詩を書いてもらい

今回、賞に入らなかつたけれども次回にかけて書いていただきたい。継続は力なり、ご健筆を期待している。

「密造者」同人。秋田県現代詩人協会、日本現代詩人会、各会員。

## 短歌



### 一首一首

#### 独立した歌を

塚本瑠子

応募期間の短さもあってか、今年は五十六点という少ない作品の中での選となつた。

歌全体を読み終えて感じたことは、歌の完成度の低さである。題名にもたれ過ぎ、題名が無いと歌の意味が通らない歌や、誤字、仮名づかいの誤りが多く、このことによつて歌の評価を下げる結果となつた。

話し合いの結果、残念ながら今年は最優秀賞を選ぶことができなかつた。

### 奨励賞「川」

渓流に釣り人立ちて萌えいざる木々のあわいに一木となる

空に澄む五日の月は川の面に生きいるものごとくにゆるる

渓流の歌に始まる一連の歌「川」には、作者独自のものの見かたがあり、自らの言葉をもつて表現され、歌は地味ではあるが独自性があり、極めて完成度が高い。できれば対象として詠む川をひとつのかに絞つて欲しい。

### 奨励賞「職人の日々」

刃こぼれを直しつつ研ぐ初夏の檉大樹の木漏れ日のもと

切れ味を指の腹にて確かむる朝餉の前の鉋二丁

職人として働く作者の日常が、いきいきと詠まれており作者の実直な人間性の表出した佳い作である。言葉の組み合せに於いては、今すこし推敲の欲しい歌もあり残念である。

### 奨励賞「朝夕抄」

移りたる日向に筵引き寄せてぜんまい揉みぬ膝を正して

川音もすがしく合歛の花咲きて朝な夕なの空に色足す

### 入選「小苑」

一連、憂いの漂う歌である。「不況」「仕事の手順」などの言葉から、職人あるいは自営業の人であろう。「あざら鯉」は、鮮らか、または

情景が、目に見えるような臨場感をもつて読者の心を誘う。前の五首の歌に対し、最後の二首はいささか力の脱けたきらいがある。

### 入選「白木蓮」

木蓮の花のひらく様子に作者独自の捉え方がある。木蓮の花を介し、姑をしのぶ作者の心が率直に詠まれており共感をよぶ。四首目の歯磨きの歌も実感があつて佳い作である。

### 入選「義足の子」

ゆえあって義足となつてしまつた子を思う母の心情が切々と詠まれており、読み手の方も切なくなる。二首目、三首目の歌は題名があつて意味の通る歌であり、歌一首の独立性に欠ける。

### 入選「子を悼む」

情感ゆたかに詠まれ、痛いほど心にしみる一連の歌であるが、「題名」を除いて読んだ時、誰を詠んだのか対象の明白でない歌が四首ほどあり惜しまれる。「題名」に凭れすぎず、連作であつても歌は一首一首意味を通して詠みたい。それが歌の独立性であり、基本でもある。

### 入選「朝夕抄」

鮮らけしの活用で、あざらかなる鯉、あざらけき鯉となる。六首目の二句の字足らずは歌の調べを損なっている。

### 入選「お稲荷様を祀る」

古くからの習わしを守る村人のこころの繋がりが詠まれており、風土性のある歌の一連であるが、報告歌となっているのが惜しい。

### 入選「父の手」

九十五歳の父と死別の歌であるが、推敲によつてはまだまだ奥の深まる歌である。

### 入選「仙人米」

ふる里納税の仙人米を介し、作者と東成瀬村との係わりが回想を含めて詠まれている。

### グリーン賞「夏一色」

短歌を詠む作者の今後の可能性に期待する。

### N H K 学園「短歌講座」同人

現代歌人協会会員



## 選歌寸懐

します。  
「職人の日々」

○切れ味を指の腹にて確かむる朝餉の前の鉢一丁

○良き縁の巡りあわせの遠のきて娶らず老いて  
子はゆくばかり

作者ならではの具象に依る生活感に充ちた一連。然し、抄出二首目、下句の「子」の位置はこれでいいのでしょうか。

### 「朝夕抄」

○移りたる日向に筵引き寄せてぜんまい揉みぬ  
膝を正して

○川音もすがしく合歓の花咲きて朝な夕なの空  
に色足す

各々の結句が示す作者の人柄に心が和む一連ですが、七首中完成度から云つて今一步という作品が混在している点が惜しまれます。

### 「白木蓮」

白木蓮を通して亡き姑に対する作者の心情が過不足なく詠まれています。但、「姑」に前三

首は現在形を、後四首は過去形を用いています  
がどんな意図があつたのでしょうか。  
一連の構成に疑問が残ります。

### 「義足の子」

○空に澄む五日の月は川の面に生きいるものの  
ごとくにゆるる

「川」と題しての七首。難の無い一連と思う  
し、抄出歌の「一本となる」「生きいるものの  
ごとく」に作者の並み並みならぬ感性を見るが  
強いて言えば今少しのインパクトが欲しい気が

ハンディを持つ息子さんに対して、一定の距離を保ちながら7首にまとめ上げたことに作者の力量を見ます。然し、三首目初句、『溜まりたる』五首目結句、『ありやう』等の語は本当に適切な言葉と言えるでしょうか？

### 「子を悼む」

七首中特に心惹かれたのは『喘ぎつつ』『大丈夫だよ』といふ声をテレビ電話に涙して聞くと、『癌ゆゑに帰省かなはず逝きし子のメールは消さず折りをりに読む』でした。既成のものに頼ることなく自分の言葉、自分の感覚即ち、『実際』が胸を打つからでしょう。

### 「小苑」

一市井の人のつぶやきを街うことなく、ごくごく普通に表白していく好ましい。手離し難い・ざら鯉は作者のプライドの証なのでしょう。

### 「お稲荷様を祀る」

ローカル色、臨場感、躍动感をベースにしたこの七首、筆者にとっては共感度抜群の作品でした。共感、共鳴は少々の瑕疵を補って余りあるものと感じ入った次第です。仮名書きの『ジョヤサジョヤサ』は秋田ならではのもの…、効果的です。

### 「父の手」

父の最後に臨む作者の気丈さの底に在る哀しさが胸に響きますが、一首づつ切り離して見た時主語の曖昧な作品もあるので一考を…。

### 「仙人糸」

一首一首の完成度から言うとまだ推敲の余地があると思いますが故里に対する誇らしさと愛着の念が充分感じとられます。

### 「夏一色」

定型に納まらないのは若さの所以か。然しこの『夏一色』という表題の巧さには脱帽。

### 「朝夕抄」

・川音もすがしく合歓の花咲きて朝な夕なの空に色足す

・つつがなく家路につけり蜩を父の声とも母の声とも

・日常の何気ない生活、さりげない場面を点描して味わいがあり、共感を呼ぶ。



### 「選を終えて

#### 「川」

・渓流に釣り人立ちて萌えいざる木々のあわいに一本となる

・空に澄む五日の月は川の面に生きいるものごとくにゆるる

情景が、的確に叙情的に詠まれ、映像が目に浮かぶようだ。また丁寧で洗練された言葉運びにより調べも美しい。一首目の結句『一本とな

る』の隠喩も秀逸。

### 「奨励賞」「職人の日々」

・生業の木の香も良しと半生にいくたび研ぎし両の手力

・切れ味を指の腹にて確かむる朝餉の前の鉋一丁

自身の生活を詠んだ一連から、作者像が如実に伝わってくる。歌の形も調べも整っていて、鉋・なまはげの手・大鋸などの具体が生き生きと機能している。

### 「朝夕抄」

・川音もすがしく合歓の花咲きて朝な夕なの空に色足す

・つつがなく家路につけり蜩を父の声とも母の声とも

・日常の何気ない生活、さりげない場面を点描して味わいがあり、共感を呼ぶ。

### 「入選」「白木蓮」

・秘め持てる宝の包み解くやうに白蓮ひらきははが顕る

姑との懐かしい記憶を回想する歌の、ははを見る目に優しさが湛えられている。

掲歌は、静謐な情景の中の白木蓮を通して顕るははを導き出していく卓越。

「同」 「義足の子」

- ・日常の汝の事など知らざれば明るいままの母を続ける

義足の子を見守り続ける母の祈り・願いが切実に伝わる。

「同」 「子を悼む」

- ・人の世の儘き縁さまざまと壯年の子の命終に遇ふ

重い一連。逆縁の深い悲しみを、事実に即し時系列に、丁寧に、感情を抑えつつ詠む。一首一首に万感の思いがこもっている。

「同」 「小苑」

- ・華やげる牡丹の蔭に咲く海老根野生のはなは紫あはし

力まずに平易な言葉で、折々に心を励ましてくれる自然の生命力を詠む。

「同」 「お稻荷様を祀る」

- ・お稻荷様を祀る里村犬飼わぬならわし今に睦ぶ鄙の地

地方色溢れる歌。地域の若者の勢い、鄙の習俗が活写される。

「同」 「父の手」

- ・孝行をさせんがために一年半消え入りそうな命火ともす

手に焦点をあて死期近い父が亡くなる迄をみじみと詠む。掲歌の「孝行をさせんがために一年半」の把握に、作者の優しい人柄が偲ばれる。

「同」 「仙人糸」

- ・父の死は夫の進路を変えしならん一家背負いし十九の春に

夫のふるさと暮らしきを、深い感慨を持つて詠む。過ぎた歳月の重みを、読者も思う。

※他に「遺児」「お遍路」が、深く心に残った。

「グリーン賞」 「夏一色」

- ・自転車を一心不乱に漕いでいく霞む景色と重いペダル

全体に言葉が練れてないが、体いっぱい受けとめて詠む姿勢に、好感が持たれる。

七首とも字足らず等の破調なので、定型を心がけて、たくさん歌を作つてほしい。

・県高校文化連盟短歌部門講師

- ・秋田県歌人懇話会常任理事

・かりん・飯田川・寒流

- ・孟蘭盆を七句揃えたが、臨月の娘さんの墓参や特に古い写真に揃う親族の顔が見えて孟蘭盆

らしさに共感を得た。

## 俳句

有季定期型を  
厳格に



岡 部 いさむ

最優秀賞「石山抄」

巨石割り鑿は一列燕来る

雲の峰石打つこだま身に環る

石を割るには鑿で列を付けて割られる。鎌を打ち込む音へ燕が渡来してくる。

列整えて越冬して来た鳥が北方へいつか大群となつて高空を飛翔して帰る。雲の峰へ石打つ音が身内を貫き巡る重厚な七句揃いである。「石山の石より白し秋の風」松尾芭蕉の名句に適う。

奨励賞「孟蘭盆会」

臨月の娘の祈り墓参

真ん中に古きアルバム盆の家

- ・孟蘭盆を七句揃えたが、臨月の娘さんの墓参や特に古い写真に揃う親族の顔が見えて孟蘭盆

同「天鷺村」

軒低き城下の村や夏つばめ

甲冑に武者の体臭堂薄暑

由利本荘市のある岩城にある天鷺村は旧龜田藩二  
万石の城下町。城門の甍、提灯の家紋、鯱など  
全体として格調の高い俳句である。

同「蔵」

梅かをる内蔵までの通し土間

米藏の大キ錠前小鳥来る

蔵一本に絞った作品で、内蔵までの通し土間  
の奥床しさ、大きな錠前と小鳥の対比に創意が  
見られ巧く詠出されている。

入選「田螺鳴く」

捨てられし村の溜池田螺鳴く

最近の農村の風情を田螺鳴くに託したが鳴か  
ない田螺が鳴くと言わせる世相が反映している。

同「子吉川」

川縁の貝塚遺跡陽かげろへり

由利本荘市を貫流する子吉川。貝塚遺跡は指  
定史跡はともかく陽炎う遺跡に古代が伺える。

同「四季雜詠」

一院の門廻濡らしむ余花の兩

七句の中の春三句、夏二句、秋と冬一句の構  
成の四季である。一院の門廻、門の廂を濡らす

余花に夏雨が降り、門前の寂しさを際立たす。

同「夫の面影」

突然に残されし日の芋嵐

夫に先立たれた者の痛恨が芋嵐に、黍嵐とも  
言う葉を倒さんばかりの秋の風に嘆く。

同「風」

すゝき原分け銀色の風の道

六句は主題の風であるが一句は風で無かった  
のが惜しい。薄原の風の道は銀色、眩しい限り。

同「北限の茶摘み歌」

北限の檜山に流る茶摘み歌

檜山城主が下級武士の生活救済のために京都  
宇治から茶の苗を導入された起源を持つ檜山茶。

同「夏衣」

紹をまとひ母と見まごふ鏡かな

夏衣六句に蚕豆一句が混ざる。薄絹の紹を着  
こなす母親の凛とした姿が目に浮かび交感する。

同「男鹿・真澄路」

真澄路を辿れば岬オガフウロ

男鹿半島は地震で隆起した地層があり、貝の  
化石が出たり、男鹿に記念植物の風露草がある。

同「戦後七十年」

空爆をくぐり八十路の終戦日

今年は終戦七十年目の年。空爆を潜り抜けて

八十の傘寿、感慨深く、戦えの怨嗟があるう。

同「老母」

母の日や還暦の子も子は子供

老母の題であるからいくら子供が老いても子  
供は子供。その通りであるが少し寂しい。

同「武家屋敷」

長櫛の涼しく光る螺鈿かな

武家屋敷を遺憾なく俳句に詠んだ傑作である。

衣服や調度品保存の長櫛の螺鈿と歴史は深い。

グリーン賞「夏の幻」

玉の音が夢幻を誘ふ暑き夜

夏の星天翔る君溶け込んで

熟れぬ想ひ抱へ一人の蓮見舟

亡き笑顔褪せた浴衣に染み透る

頬にじむ汗か涙か離別し時

花火散り涙の果ての酸っぱし実

ひとときの思い出枯らすな水中花

グリーン賞対象の三作品を選考して一作を入  
選とした。来年は該当者の多くなることを願う。

最後に

八十五編の俳句作品を選考して気のついたこ  
とは、季語が無かったり、重ね季語、五七五を  
食み出した作品、文字を誤った俳句、新旧仮名

遣いの混同、題名に外れる作品、ルビの多い作品等の課題があった。

俳句の基本は、有季定型である。一句に季語を一つに絞り、五七五の韻律を保ち、読み、見る人に感動を与える俳句に精進願いたい。

公益社団法人俳人協会・同秋田県支部会員

秋田市俳句人連盟会長

ぶりこ・明徳・大正寺・俳句会主宰



### 推敲には推敲を

木 村 登 龍

従つて、「言葉は易しくして思いは深く」「句には常に新しみを求める」を重視しており、選に当つてはこれを踏まえ、「有季」「定型」「旧仮名遣い」を基本としながら、類想類句が無く、もとより誤字・脱字なども評価の対象として選に当つた。

この観点から、今回目についたのは次のことである。

無季語の句があること・誤字が多いこと・必要外のルビのある句が多いこと・季語ダブリの句があること・口語・文語が混在しているほか、それに伴う文法も軽視されて誤りが多いこと・難解な用語を使用して句を難しくしていること・一~二句は素晴らしいのに他の句が残念である場合や、その逆で七句中一~二句に問題があり揃っていないこと・県人でないと理解されない対象を詠んでいるものがあること・(「あきたの文芸」だからそれでも良いのか(?)等)等であった。

今回初めての選考の任を与えられ、これまで経験したことの無い緊張感と責任感をもつて選に臨むこととなつた。応募者数八五人の五九五句は量的にも圧倒するものであつたが、全てにおいて作者の立場を想像しながら、その詩的主張を逸脱しないように努めた。

私が実践している俳句のコンセプトは、「花鳥諷詠」であり、自然とそれにまつわる人事(花鳥)を無心に客観的に詠うのが俳句の本道であることに基づくものである。

神聖な石切場を身命を賭する石工職人の姿が、題名と七句の関連性において大変良く融合してそれが無く、佳句が続き格調の高い一連となつてゐる。いずれの句も完成度が高く、俳句作者として経験の長さを想像することが出来た。

奨励賞の「孟蘭盆会」では、作者は結婚後故郷を離れてどれ程経過したことか。今年は新たな命を授かっての両親の待つ古里への盆帰省である。愛情あふれる両親への感謝と、諸行事などを垣間見ることが出来た。

ただ、各種季語集や、俳句用字辞典、広辞苑電子辞書によつては、三句目の「墓参」を「墓参り」になつているものもあるので留意が必要である。

同じく奨励賞の「天鷲村」は、由利本荘市岩城町には天鷲村に天鷲城と亀田城の二つの城がある。いずれも亀田地区にあり、江戸時代末期の亀田藩二万石のゆかりの建物が移築復元された「史跡保存伝承の里」である。

作者は実情を把握の上に、上手に作句している。ただ、一句目の「甍に辻る」は、「甍を辻うに強く要望したい。

同じく奨励賞の「蔵」は、横手市増田町の重

要伝統的建造物群保存地区、いわゆる「蔵の町」

の一連の風情を淡々と作者の獨得な感性・表現

で捉えた、過去の入賞作品と遜色のない立派な

作品である。

今年は、青少年の投句では三編の応募があつたが、技術面と内容等において課題があるもの多かったが、将来性にも思いを馳せ、今後一層の奮起に期待して「夏の幻」一点にグリーン賞を出すことが出来たことが、選に当った者として喜びであった。

今年もあと一步で入選となる句も多数あり、入選を逃した各位の再挑戦を期待するものである。

終りに、心に残る佳句を上げて筆を擱く。

少女いま手話にて祈る十三夜

源流は汚れを知らず谷若葉

一村を神代に戻す里神楽

すすき原由緒きざみし開拓碑

仕事着の刺子映して代田水

大海に己が一隻天の川

志士五百無念のじじま木下闇

和服似の妻の仕草や桃の花

白神の深閑として蟬しぐれ

てらひなき少女の胡座祭くる

俳人協会秋田県支部副支部長  
秋田県俳句懇話会常任幹事

「新雪」同人

温かい時間が七句に存分に鏤められている。気

負いのない作者の柔軟な視点が新鮮。

奨励賞「天鷺村」

曲屋に木馬嘶く青あらし

甲冑に武者の体臭堂薄暑

## 新鮮な衝撃



森 田 千技子

「あきたの文芸」に寄せられた八十五名の方々の熱意を真摯に受けとめ、作品の新鮮な衝撃を軸に、全編丁寧に読ませて頂いた。

最優秀賞「石山抄」

初蟬や石工の昼餉石に座す

七月のたがねを打てば銀の音

石山に神棚一つ喜雨いたる

神聖な採掘現場での石工の光る汗や、耐湿性に優れた石の表情までが見えてくる。テーマに

凭れ掛かることも無く、独自の発想や視点を自在に活かした風格ある作品が並ぶ。

入選「田螺鳴く」

捨てられし村の溜池田螺鳴く

放置されたままの溜池とそこに宿る新しい生

命との落差が寂れた風景を溶かしそうだ。

入選「子吉川」

コックスの太き声飛ぶ川薄暑

競技ともなると舵取り役もついつい力が入る。

颶爽と風を切るカヌーが水面に眩しい。

入選「四季難詠」

余寒なほ上古の塚は石ひとつ

お墓の有り様も時代とともに変遷する。「石

対象への踏み込みの深さや「中七」の心情表記の確かさが読み手に安定感を与える。

奨励賞「蔵」

梅かをる内蔵までの通し土間

蔵巡る堀り割りの水温みけり

蔵の町の風情。土間は湿氣を帯びると艶やか

になる。「通し土間」や「掘り割りの水」の措辞が詩情空間をより深く象る。

入選「田螺鳴く」

捨てられし村の溜池田螺鳴く

放置されたままの溜池とそこに宿る新しい生

命との落差が寂れた風景を溶かしそうだ。

入選「子吉川」

コックスの太き声飛ぶ川薄暑

競技ともなると舵取り役もついつい力が入る。

颶爽と風を切るカヌーが水面に眩しい。

入選「四季難詠」

余寒なほ上古の塚は石ひとつ

お墓の有り様も時代とともに変遷する。「石

ひとつ」の措辞に作者の想念が見え隠れ。

### 入選「夫の面影」

一灯を求め彷徨ふ蟹の夜

明滅する螢火は心悲しい気持ちを搔き立てる。

夫婦の深い絆。彷徨は亡夫も又然りかと。

### 入選「風」

風薰るゆつくりまはす万華鏡

片目で覗く種々の模様の変化は、解放感がいっ

ぱい。百花繚乱の訪れを予感させる。

### 入選「北限の茶摘み歌」

茶園からすらりと伸びし秋田杉

檜山の殿様が自家菜園で、武士の内職として定着させた檜山茶。秋田杉はそれを受け継ぐ地元の若者達の心意気。清々しい一句。

### 入選「夏衣」

古稀すでに秘密を持たぬ夏衣

七十才はまだまだ若い。作者のピュアな心情が「夏衣」の季語とマッチしている。

### 入選「男鹿・真澄路」

真澄路を辿れば岬オガフウロ

男鹿半島の固有種というオガフウロの発見が、生涯を秋田で閉じた真澄像を膨らます。

### 入選「戦後七十年」

蚤しらみDDTと餓ゑの過去

実体験から吐く言葉は重い。戦中戦後の日本を浮き彫りにした全句に訴求力がある。

### 入選「老母」

ていねいに交はす挨拶門涼み

心のこもった挨拶は気持ちが良い。特に人生

の年輪を重ねた人の仕草は美しい。

### 入選「武家屋敷」

啞蟬や長押の上のたんぽ槍

たんぽ槍を啞蟬と捉えた手柄。質素で格式と作法を重んじた武家屋敷の様相が偲ばれる。

### グリーン賞「夏の幻」

亡き笑顔褪せた浴衣に染み透る

色褪せてこなれた浴衣は肌に優しい。それは正しく故人の笑顔。想い出は溢れるばかり。

最後に、他の共鳴句を挙げ、皆様方の今後の更なる研鑽に期待したい。

家といふハコモノ重しかたつむり

骨いだくままに桜へふりむかず

六魂祭みちのくどつと夏に入る

「麦」同人、秋田県俳句懇話会幹事、

秋田県現代俳句協会幹事

## 川柳



余韻を。

高 橋 三鳩枝

然らばどのようにしたらそのような作品になるかと言ふと体験経験はもとより実際にそこに立つて観る、それを土台にして語り、詩に綴る、故に説得力が強まる。因に今年の芥川賞の受賞者はお笑い芸人の作品だった。  
選考にあたり余韻をどのように感じさせるかに重点を置いた。応募作品の中には夢を題材とした作品が何編かあったが夢はやはり夢、分かれましたで済まされる。それに昨年に比してちょっと低調気味。一年間の時間をじっくりと費やしと選をする人や読む人に余韻の広がりを感じさ

せ示して欲しいと思う。また、その日その時の

頓智頓作は慎み、語彙は豊富に努める。

最優秀賞 「花の降る街」

正座してひとつ風に裁かれる

山越えて胸奥で鳴るファンファーレ

あと少し踊ろう花の降る街で

評 常連の作家を思われるが一句一句にある

ポエム。題名に全句がマッチしている。技巧に

走ることなく、全身の吐露を感じさせる。選考

委員全員が高得点。

奨励賞 「青い空」

曲がり角どうにかぬけた青い空

忍の字を掲げ家族を丸くする

ごった煮が一番美味しい大家族

想像するだけでも羨ましい。

奨励賞 「忘却の中で」

過去の花咲かせて亀裂埋めていく

追憶の炎を抱いて病む夜明け

評 平均している句群に感銘を与える作品。

しかしながら推敲を重ねたらもっと良い作品となつた。宮沢賢治の世界に引き込まれそうな郷

愁を覚える。

入選 「ノスタルジー」

神様の言う通り静かに眠る

ちよっと隙つくっているの気づいてよ

見つめられ自滅しましたいい男

ランスの良さと七句目がノスタルジー。

評 下五の(る)止めが気にかかるが全体のバ

入選 「父と母と」

力抜き病む子を想う細い腕

しがらみの軋轢に耐え母の笑み

評 父母の愛はこんなにも深くて重い、過ぎ

去った日々の回顧録。

入選 「命ある限り」

書き足して応えに迷う戻り梅雨

躊躇して生きる手立ての猪口を受け

評 助詞の工夫でもっとランクが上がっていた作品。盛り過ぎの感じをさせるが命への願望

を訴える。

入選 「本の虫」

空に雲わたしの手には文庫本

志賀直哉 秋の夜長によく似合う

評 秋の夜長をこよなく愛する作者の作品と思われ、柔軟な人柄が滲み出ており。かと思う

と厳しさも底にはあるようだ。

入選 「生きる」

悪性の癌ですと言ふ軽い声

評 ありふれた題名であるが、本当に癌の宣

告をされたのであればその意が強く伝わる。

入選にはならなかつた惜しい作品に、男の駅。

夢追いかけて。ひかり求めて。スランプの指。

だってボク。があった。次回に期待したい。そ

の都度指摘される事ですが川柳に限らず辞書を片手に作句推敲を怠らない。一字の誤字があつただけで選の対象にならない作品が多々あります。

秋田県川柳懇話会副会長 川柳花清水代表 美郷町住

選を終えて



館 岡 稲 風

最優秀賞、奨励賞と上位の作品は、選考委員

三名が高評価でしたが、入選作品全体から見て

全部が高い評価とはいきませんでした。落選の作品も含めて、全体に低評価であつたような気がします。

さて入選作品の選後感を申し述べます。

最優秀賞 「花の降る街」

題名と作品の内容が整っているような感じます。物事を筋道立て深く考え、紡いでいく。ここに作者の深く広い表現を感じます。

奨励賞 「青い空」

家族愛が凝縮されていて、散漫であったものが一つにまとまり、深く掘り下げられています。希望のある、「青い空」に仕上げられた作品です。このように想像をふくらませることができ、誠実な写生、それが感じられました。

奨励賞 「忘却の中で」

忘却の中の作者は、まさにと思わせる作品です、残り火を消さずに生きてゆく、長寿国様子を素直に七句にまとめ、省略の効いた表現で成り立っています。

入選 「ノスタルジー」

今までの入選に見られる表現はないが、さりげなく言葉を駆使した正にノスタルジー。作者

の思いが読者に伝わっててくる。

入選 「父と母」

父と母の思いが七句の中に深く静かに描写されています。父の浮いた心を戒める、寡黙でも凜とした言葉などベテランの作品だと思う。

入選 「命ある限り」

ひるむ事のない作者自身の姿が素直に詠まれていて感銘を受けた作品です。命の宿命なるものを感じます。

入選 「本の虫」

題名のとおり本にこだわった七句の作品である。いろいろな角度から見た本の虫、ただ黙つて読む本の虫を、作者は深く掘りさげた作品だと思います。

入選 「生きる」

生きるためにこだわった作品である。選者としては、目の付けどころが違う達成感のある川柳に出合えたと思っています。

最後に作品は事実とは異なるかも知れません、

しかし文芸の一つである、川柳は事実よりも文學性を重んじるべきだと考える。

最優秀賞 花の降る街  
不確かな路です幕はまだ引けぬ

山越えて胸奥で鳴るファンファーレ  
あと少し踊ろう花の降る街で

全日本川柳協会常任幹事

大潟村川柳俱楽部代表

大潟村在住

余韻のある  
川柳を



荒川祥一郎

叫びを詠んだ作品。六七句目の明るい余韻が作品の評価を引き上げた。詠み古された題材だがひと工夫が好印象を生んでいる。

奨励賞 青い空

曲り角どうにかぬけた青い空

忍耐に馴れてしまつた笑い顔

父の手のつっぱり弱くなるばかり

平明な作品だが人生のひたむきさが伝わる作

品。一句一句の中に長い時間軸があり、少しづつ変化した家族の姿が見える。農家に嫁ぎ葛藤

の末辿り着いた今日の笑顔と和を前向きに詠みあげている。

奨励賞 忘却の中

残り火を消さず女は風を待つ

悔恨の深さ写経を絶さない

忘却という字の重さ花万朵

心象と現実を結びつけた作品。多彩なことば

と共に余韻の広がる構成の巧みさは読者を物語の続きをへと誘う。作者の鋭い感性を高く評価したい。

入選 ノスタルジー

雨あがり里の香りが強くなる

丸くなる体に比例する心

若き日の思い出を詠んだ作品と思う。抽出一

句の実力がありながら物語を作ろうと作意が空回りして作品が薄っぺらになつた感もある。

入選 父と母と

父の書架 浮いた心を戒める

正忌には何処の何方か菊の花

亡き両親への思慕を綴った作品。人を敬う心

は親に育てられる。ありし日の父母の姿に今の

自分を写し重ね、感謝の念を詠んでいる。

入選 命ある限り

書き足して応えに迷う戻り梅雨

躓いて生きる手立ての猪口を受け

表題と作品から前向きな気概が伝つてくる。

しかし言葉選びが大仰になり、作品を固くして

いるのが惜しい。このまま広い視野で挑戦を続

けて欲しい。

入選 本の虫

空に雲わたしの手には文庫本  
志賀直哉 秋の夜長によく似合う

一句目は雲と文庫本の取り合せで広がりのある表現にしたが、他の六句は単に本の説明に終

わり折角の題材を生かし切れてないのが残念。

入選 生きる

悪性の瘤ですと言ふ軽い声

生きている微かな呼吸温かい

癌を乗り越えた命の叫び。経験者ならではの実感がすしりと重く伝わってくる。作者には生きる節目となる作品と感じた。

惜しくも選にもれたが心に残った作品

・八十馬力自嘲しながら米づくり

・パンを焼く程々の夢のせるため

・逆上り成功 ボクは鳥になる

・熟しても母は程よく残す渋

・子の発った余韻すすった茶も無口

・生涯を賭けた田んぼが涙ぐむ

川柳グループ柳山泊事務局

## エッセイ

### 選評



山崎 義光

今年度は、エッセイ部門の応募がやや増え、初めての投稿数も多かったとのことです。身近な題材を言葉にすることで、言葉にしなければ気がつかなかつた意味の発見をする。エッセイ

を書くという行為を通じてそのような経験ができるといふことは、どこの誰とも知らない人が、その文章を読んで何ごとかハッキリ気がつかれるようなことがある表現を目指してほしいと思います。それは、他人が興味を持ちそうな題材を選ぶということではなく、ささやかな個人的体験であっても、言葉の力で題材から意味をあぶり出す表現であってほしいということです。今後とも、積極的な投稿が増えていくことを期待したいと思います。

「緑色の時」（最優秀賞）は、入院した夫と散歩したときのささやかな出来事が題材です。出来事の描写が、簡潔で無駄のない文章で表現されています。桜の古木と若木の重なる風景描写は、単なる風景描写ではなくて、夫婦の今と若かりし頃との隠喩と読めるところに、言葉による意味の広がりを感じました。

「左に曲がって」（奨励賞）は、小学生のころの自分と、今の自分を、集落の「入口」という岐路に重ねて表現しています。「迷うこと」のない集落のまっすぐな道。そこを「曲がって」学校へ向かう道。その岐路は「入口」であるとともに「出口」でもある。自分の経験的な感覚

見につながっているところがよく書けていました。

【父の外套】（褒励賞）は、亡くなった父の遺品である「外套」の整理をしている現在を起點に、戦中から戦後、父の結婚と戦後の生活を追想する内容です。「外套」から「雨合羽」「アノラック」へと変化した物を、父は「雨漬（アマラック）」と呼んだ。時代の変化、「外」へ行く父、「雨」に堪える生活、それらを「楽」に掛け引き受けた父の生き様の一面が凝縮して表現されているように読みました。

同じ仕事をしてきた自分が重なり、「寄り添う」ことの自分なりの意味が書けています。この他、「五月 母の想い出」「おくれ髪」「青い空の下で」なども、よく書いていて惜しい作品でした。

また、若手の投稿者から選出されるグリーン賞には、「先生と私」「『おくのほそ道』に記された今はなき郷 象潟」が入っています。やや硬さが感じられなくもありません。多様な題材に対して、多彩かつ柔軟に言葉を使う工夫は、書く経験を重ねることで身についていくものだと思います。

最後に、応募作と共に通した表記に関するこ  
について。「……」（一マスに3つの点、二マス  
分）の表記ができるっていないものが多くあります  
た。また、（ ）「 」「 」へなど括弧類の  
使い方、引用と改行の書き方などに慣れていな  
いものが目につきました。こうした表記は、新  
聞や本を読むときに気をつけて、使い方を覚え  
るとよいと思います。

入選は一作でした。「M君に誘われて」は、英野口英世の伝記をめぐる教え子との交流を、英世の母の手紙を引用しながら、その言葉の肌理をよく引き出して書いています。「三十九の一」(入選)は、被災地にある保育所でのボランティア体験が題材です。現地の人たちの働く様子に、

## 選考を終えて



高橋一成

させた作品である。

冷静沈着に淡々と表現していく姿勢に好感が持てた。

最優秀作品「緑色の時」は、夫の入院に伴う自分の日常生活の変化の一端を、緑濃い六月の

千秋公園の風景に重ね合わせたもので、豊かな人間性と情感に満ちた世界が展開されている。

瑞々しく研ぎ澄まされた繊細な感性に基づく表現は、実に個性的で独特的な詩的雰囲気を醸し出している。大きな桜の古木の息遣いに、「忙しない日常」から遊離した心の安らぎやそこの「空間」に二人だけが存在している安穏さを感じられる。「一人の空間」は、「時の流れからも周囲の景色からも切り取られた異空間」であり、いかなるものも足を踏み入れる事のできない「異空間」である。その景色を「静かな老木の木霧」が温かく見守っていたのかもしれない。

作者が自身に感じた「すがすがしい風」のように、清涼感と氣品溢れる作品である。

奨励賞作品「左に曲がって」は、故郷における懐かしい過去の小学校時代の思い出とUターンした二十年後の現在の在り方とを交錯

生きていく原風景は、誰しもが殆ど故郷に多くを持っている。どんな形であれ、自分だけの風景である。そのことがこの作品によつて納得できる。

「家族の揃つていることに人一倍安心と幸福」を感じる「家の子」の小学生の「私」にとって、学校へ皆を連れて行く葛藤は、集落の「入り口」を出ることによって一小学生に変貌する。

今「私」は、社会人として様々な苦労を積み重ね、「出口としての入り口」を「落胆とあきらめの香」を今度は嗅ぐことなしに、左に曲がって「迷うことすらない、一本道」を進もうとしている。その決意が、限りなく深い故郷や家族への愛とともにしみじみと伝わってきて心地よい。

奨励賞作品「父の外套」は、農家である「き父」の戦前から戦後にかけての複雑な事情や家族の歴史、そして父にまつわる数々の趣深い逸話が、思い出深く描写されていて、親近感と共感が持てる作品になっている。

特に「ごそごとした石に柔らかな曲線が施されて霞がかかったような表情を見ていると、静

きたと思われる軍用の外套、釣り合わない母との結婚、長い飯場暮らしの父の生活等が抑制的でいた調子で小気味よく表現されていく。その中でも、父の死によつて三十余年間屋根裏の柳行李に眠っていた「外套」を、冒頭と終わりに配置する構成的な巧みさが、実に見事で印象的である。

「外套」には、様々な重い歴史を背負つて生きてきた亡き父の、一人の男としての人生が象徴されているわけだが、意外にも後半のまとめ方は、リズムカルで軽妙な筆致になつてゐる。かえつてそれが、亡き父に寄せる慈愛深い表現になり、重厚で奥行きのある作品に出来上がっている。

奨励賞作品「マリア観音」は、江戸時代に起こった隠れ切支丹にまつわる迫害の出来事を綿密な資料をもとにして、地域の記憶に綿々と刻まれている歴史的背景を意欲的に追求したユニークな作品である。

現在の湯沢市周辺に点在するマリア観音や切支丹の遺構に寄せる視線には、史実を見据える鋭い觀察力が感じられる。

特に「ごそごとした石に柔らかな曲線が施されて霞がかかったような表情を見ていると、静

かな祈りの声が聞こえてくる」という表現は、秀逸である。また「谷内佐渡」の分析や捉え方も個性的で興味深かった。

このような作品のスタイルの在り方は、今後の一つの指向性を示唆しているように思われる。

入選作品「M君に誘われて」は、教え子M君と「野口英世の母の手紙」の国語の授業を通じての体験談である。M君の進行性の難治性持病と「英世の母の手紙」が、どうしても重い雰囲気を作品の前半に漂わせているが、後半に、作者が二十数年後に訪れた「野口英世記念館」で、「私は、ずっと隣りにM君の気配を感じていたのだ。」と記すところで、やっと解放されたような安堵感を持つ。

英世を育んだ会津地方の磐梯山や猪苗代湖の風土に共感しつつ、静かにM君に感謝する結末は、説得力のある作品になっている。

入選作品「三十九の一」は、「東日本大震災から四年が経った。」で始まる保育所支援ボランティアを中心とした作品である。

時間の経過に伴い、被災地の復興や関連する事柄が急速に風化していく深刻な現実に、作者は厳しい視線を向けることを忘れていない。それは、「しかし、伝えたい。心の底から、

被災地のこと、被災されたみんなのことは見守っている」と、固い決意と限りない情熱に根差している。

そのことは、「私」の日々の目立たない保育の裏側の仕事や被災地の老人達への簡単な日常の挨拶となっているし、この震災を語る時には、「私の持っている言葉は単純過ぎて語りきれない。深く大きな悲しみを体験した方達に、寄り添う心は持っている。できることはそれだけ。」と表現する極めて謙虚な心情にも繋がっている。

それが、今最も大切な被災地の人々の気持ちの復興を勇気づけことになるし、現実的にも大きな社会的影響をもたらす力にもなっている。

感情を昂ぶらせることなく、終始落ち着いた調子を貫いていて、作者の芯の強さも感じさせる静謐さに溢れた作品になっている。

その他グリーン賞として二作品が選出されたことは喜ばしいことである。今後ともこの傾向が継続していってほしい。

三編が奨励賞を受けた。最優秀作と甲乙つけ難い「マリア観音」は、秋田藩内における隠れ切支丹の信仰とそれに対する弾圧を資料を駆使しながら叙述した一作。客観的で手堅い書き様は、この作者の中では独自の世界が形成されているのを思わせる。「左に曲がって」は、夜の散歩を日課にしている作者が「入口」と呼ばれる地点で小学校時代を回顧し、そこを出口として新しい世界をめざすという構成の作品。〈入



散文への  
関心の高まり

柴山芳隆

「あきたの文芸」にエッセイ部門（当初は随想・紀行部門）が設けられて十二年めに入った。

この間、応募数は毎年二十編前後であったが、今回初めて三十編を越えた。散文への関心の高まりを嬉しく思う。

最優秀賞に輝いた「緑色の時」は、入院中の夫と近くの公園を散歩した折の様子を淡々と叙述した、完成度の高い作品である。詩情がとても豊かで、この作者は詩人の才能も持ち合わせているに違いないと感じた。

三編が奨励賞を受けた。最優秀作と甲乙つけ難い「マリア観音」は、秋田藩内における隠れ切支丹の信仰とそれに対する弾圧を資料を駆使しながら叙述した一作。客観的で手堅い書き様は、この作者の中では独自の世界が形成されているのを思わせる。「左に曲がって」は、夜の散歩を日課にしている作者が「入口」と呼ばれる地点で小学校時代を回顧し、そこを出口として新しい世界をめざすという構成の作品。〈入

口」と出口の組合せがおもしろいし、導入部もよく書けていた。「父の外套」は、父親が愛用していた外套を父の没後に目にして故人を偲ぶ内容である。父親に対するしみじみとした感情がよく出でおり、話の終わり方も巧みである。

入選は一編であった。「三十九の一」は、保育士として働いた経験をもつ作者が、東日本大震災の被災地をボランティアとして訪れた際の体験を綴った作品。〈厳しい〉という単語を用いており、その行間からは作者のやさしさが滲み出ている。〈美しい〉という単語を使わずに美しいを表わすのが文学表現の要諦である。

「M君に誘われて」は、難病をもった生徒を担任した縁で、野口英世記念館を筆者自身が訪れたという内容である。野口英世の母の手紙が効果的に使われていた。

惜しくも賞は逸したが、よく書けている作品も少なくなかった。「青い空の真下で」は、離婚したあと娘たちを育てながら二十年以上頑張ってきた女性の感慨。心理描写に見るべきものがあり、小説にした方がよかつたのではと思った。今年秋田市で行われた東北六魂祭の一齣を描出した「長い行列から」は、書き馴れた感じの読

み易い文章だが、「閑古鳥が鳴いている店」といった常套句の多いのは気になった。六十代の女性が腰痛の手術を受ける経緯を述べた「病いを『得る』とは」は、腰痛や手術の具体的な様子はよく分かるものの、それ以外の部分はややお座なりの感があった。「回想の田沢湖—消えた幻の魚群」には、田沢湖からすべての魚影が消えるまでの過程が丁寧に述べられている。引用されている武藤鐵城の一文が長すぎて全体のバランスを損なっているのは残念であった。「地域づくり」は、時代の要請にマッチした作品と評価できるが、事実の報告が中心でエッセイとしての味わいやふくらみに欠けていた。

エッセイは文芸の一分野であり、文芸作品では描写が説明よりも重要なのが、叙述のほどんどが説明や報告で終わっている作品も少なくない。「遠い国イラン」「前九年と後三年の役に思う」「ギリシャ人との出会い」「父を語る」等がそうした部類に入る。

一方、「小さな思い出」「新聞配達のこと」「おくれ毛」等は、作者自身の感動が読者にまでは充分届いてこない憾みが遺った。

二作がグリーン賞を獲得した。「先生と私」「『奥のほそ道』に記された今はなき郷 象潟」

である。前者の「先生」とはピアノの師のことで、ピアノ以外にも日常生活の礼儀や作法などを指導してもらえるという設定で、小粒だがまとまりのよい作品である。後者からは郷土に寄せる思いがよく伝わってきた。若い人を対象にしたこの賞がエッセイ部門で出たのは初めてで、そのこと自体に意義がある。

最後に、原稿用紙の使い方を含む作文の基礎がまだ不十分な作品や、募集要項を守っていない作品が散見されたことを付記しておきたい。

『ある先生の先生』は、ピアノの先生がピアノの先生の先生を教える物語である。前半はピアノの先生がピアノの先生の先生を教える物語である。後半はピアノの先生がピアノの先生の先生を教える物語である。

# あきた県民文化芸術祭2015「あきたの文芸」応募状況

## 1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
27年度	12	32	56	85	44	31	260
26年度	15	37	71	84	50	21	278
25年度	16	41	73	87	61	20	298
24年度	14	44	91	85	62	17	313
23年度	17	27	107	92	58	17	318

## 2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳			エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	不明	男	女	男	女
27年度	5	7	14	18	26	30	46	39	28	16	—	15	16	134	126
26年度	9	6	15	22	34	37	53	31	32	18	—	10	11	153	125
25年度	11	5	14	27	31	42	52	35	40	20	1	11	9	159	138
24年度	9	5	16	28	38	53	51	34	41	21	—	7	10	162	151
23年度	5	12	15	12	52	55	57	35	34	24	—	7	10	170	148

## 3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
27年度	260	13	3	8	7	12	61	96	57	3	0
26年度	278	8	4	8	8	17	62	109	58	4	0
25年度	298	13	5	11	3	17	75	117	47	7	3
24年度	313	20	5	10	4	22	78	116	54	2	2
23年度	318	18	3	16	7	20	71	127	54	2	0

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	1	1	1	1	1	3	3	1	0
詩	5	0	2	3	1	7	14	0	0
短歌	2	1	1	0	3	9	21	17	2
俳句	3	0	2	1	3	20	26	29	1
川柳	0	0	1	0	3	9	24	7	0
エッセイ	2	1	1	2	1	13	8	3	0

## 4 応募の経験（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	9	23	47	67	33	15	194
新	3	9	9	18	11	16	66
計	12	32	56	85	44	31	260

再…以前にも応募したことがある方

新…今回初めて応募された方

## 5 月別応募数

5月	6月	7月	計
23	44	193	260

# あきたの文芸

## 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第四十七集（平成二十六年度）応募

二百七十八作品

### ・ 小説・評論部門

#### ・ 詩部門

奨励賞

藤田みち「この子の七つの」  
十田撓子「旅のうた」

奨励賞

矢代レイ「風呂敷」

奨励賞

小林康子「そんな時に」  
みやのえいこ「空」

最優秀賞

佐藤善隆「なりわい」

奨励賞

三浦隆「日々抄」

奨励賞

佐々木ヨリ子「満天星の雫」

最優秀賞

佐藤哲織「秋深む」

奨励賞

加藤トシ子「雛のおもざし」

奨励賞

佐々木ヨリ子「満天星の雫」

最優秀賞

佐藤哲織「秋深む」

奨励賞

山田草人「滝逍遙」

奨励賞

佐谷敏雄「蔵の町」

奨励賞

田北投石「下北の夏」

最優秀賞

藤咲田暎子「千羽めの鶴」

奨励賞

佐藤憲夫「愛アラカルト」

奨励賞

谷心平「男のロマン」

最優秀賞

石山敦子「伝承の舞」

奨励賞

加藤トシ子「夏の海辺で」

### ・ エッセイ部門

#### ・ 川柳部門

奨励賞

藤谷口心平「男のロマン」  
佐藤敦子「伝承の舞」

最優秀賞

川柳部門

奨励賞

谷心平「男のロマン」  
敦子「伝承の舞」

最優秀賞

トシ子「夏の海辺で」

## 編集後記

◎ 平成二十七年度あきた県民文化芸術祭2015 「あきたの文芸」入賞作品集「あきたの文芸第四十八集」を刊行しました。

この作品集には、十六歳から九十四歳までの応募二百六十作品より、最優秀賞四作品、奨励賞十五作品、入選三十作品、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞五作品、計五十四作品を掲載しております。

◎ この事業は、あきた県民文化芸術祭2015の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、広報協力をしてくださった文芸団体や各市町村、報道機関、図書館などの施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎ 「あきたの文芸」は、今年度より掲載方法を「部門別」といたしました。より読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っております。

## あきたの文芸第四十八集

あきた県民文化芸術祭2015  
「あきたの文芸」入賞作品集

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話 ○一八一八六〇一一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

表紙デザイン・挿絵 山本文志

印刷・製本 株式会社三戸印刷所



あなた  
の貢に  
進む道を  
探し  
ていた。

文化を  
する  
▶▶▶  
ブンカ  
の旅はら!  
おわ  
ない

発行  
・秋田県  
平成  
27年  
10月

非売品

